圍棋神髓

木

795.
H633i
W

名人本因坊秀哉講述

圍棋神髓

木

瀨越囲碁文庫

寄贈者　八幡恭助

松井明夫

互先定石

一間夾之部

二間夾之部

「圍棋神髓」講義之光景

（右）名人本因坊秀哉師　（左）編輯主任廣月絶軒

贈寄
瀬越囲碁文庫殿

國立國會
38.8.-5
圖書館藏書

617191

互先定石「一間夾」の部

目次

		自頁	至頁
「緒論」	(六圖)	一	三
「三々頂」	(十二圖)	四	一五
「頂引」	(八圖)	一六	二二
「頂行」	(十八圖)	二三	三五
「斜走掛」	(十一圖)	三六	四五
「斜走跳出」	(六圖)	四六	五一
「一間夾返」	(六圖)	五二	五九
「二間夾返」	(八圖)	六〇	六八
「三間夾返」	(四圖)	六九	七一
「手拔」	(十圖)	七二	八一

星ハ星トシテノ面白カラス

一間高締
高目締

定石詳解

互先の部

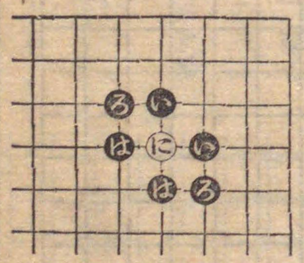
第二十一世 名人 本因坊秀哉講述

初段 廣 月 絶 斬編輯

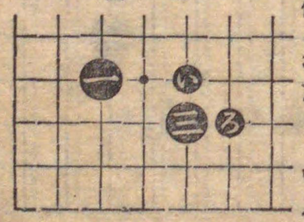
緒論

△互先定石の基點打着點即(ウチバショ)となるのは甲圖に示す(いろはの各三點である、(い)の點は小目(コモク)若くは目下(モクシタ)と言つて根據を造る基礎として最も手堅い場所である、(ろ)の點は目外(モクハズシ)と言つて、隅の根據にも又中邊への發展にも利いて居る手で、手固いといふ意味では少し小目には及ばぬが、其の代り輕妙な先づ活動のある點である、(は)の點は高目(タカモク)と言つて、根據といふよりは中原への發展を主としやう、部分よりは大勢を先きに、と言つた樣な意味の手である。(布石總論參看) (に)の點即ち星は、白としてならば兎も角、飽迄解り易く確に打たうといふ主意である可き黑の立場としては面白くない、乙圖は黑一と小目の要點を占め、次に三の手を以て目外しの點へ小斜走締(コゲイマシマリ)をしたのである。締(シマリ)とは(完全に一隅の占領を遂げる)といふ意。黑一から次の手で(に)の點に打つが一間高締(イッケンタカシマリ)、(ろ)の點に打つを「大斜走締」と呼ぶ此の「小斜走締」「高目締」「大斜走締」の三種の締り方が普通の締である。

甲圖



乙圖

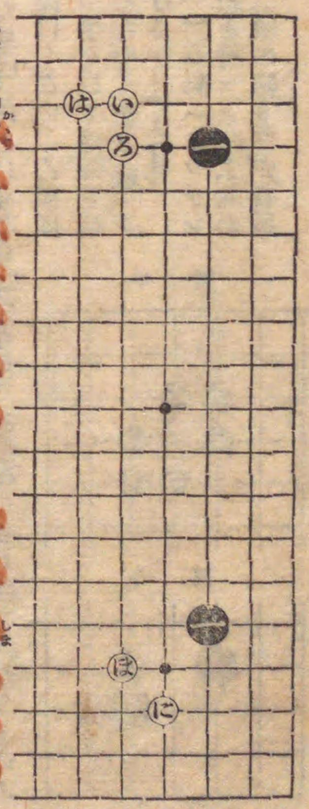


高目に対スル掛り手ノ種類

「小目」から「目外」若くは「高目」に行くのは順で、「高目」若くは「目外」から「小目」に戻るのは逆で畢竟手順の前後である、尤も其の小目を先きにし若くは「高目」及「目外」を先きにする其の意味には夫々深い理由はあるが（此の理由は布石總論を參照せられたし）此く「締」つた結果に就ては別に差はない。

扨一隅を（前に示す其の何れの形にもせよ）完全に「締」つた以上は、先づ急に此の邊で彼我の交渉應接は無いのであるから、「締」其が即ち定石として形付いて居ると言はねばならぬ。

然らば、互先定石の應接は黒が基點として打つた第一着手に對して白が「掛」即ち攻撃を開始して來た此の黒白二着の交換から始まる譯である。



丙圖

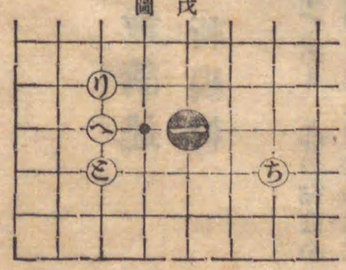
丁圖

△丙圖「掛」の點は大體に就て言ふと、敵が將に「締」らうとして居る其の要點を奪ふのにあるから、丙圖に示す小目黒一に對しては㋑の小斜走掛㋺の一間高掛、又稀に㋩の大斜走掛の三種。

△丁圖に示す目外黒一に對しては㋥の小自掛、特に趣向として㋩の高掛の二種。

△戊圖に示す高目黒一に對しては㋭に小目掛が普通であるが、特殊の場合として㋬に打つ事もある、然し是は「掛」といふよりは寧ろ「打込」といふ方に傾いた手である。

㋬若くは㋣から打事もあるが是れ亦尋常「掛」として茲に說く價値の無い手である（詳細は凡て布石研究に讓る）



戊圖

下段目下ノ石ヨリ三向拓ニ關拓

ろノ斜走黒手ニアラス

△己圖　黒一の小目に對して、白が二と「目外」に掛つて來たのは、黒の將に締らうとして居る要點を奪うたので、畢竟隅の利益を黒に獨占せしめまいとの意に外ならんのである、此際黒は單に消極的即ち守備といふ手段として、

㋩に尖むのは至極堅固な手ではあるが、其の代り少し緩いといふ非難は免かれぬ。

㋺に斜走するのも決して惡い手ではないが、二の白に對する攻撃力が緩んで居る、但し其の反面には㋩の尖に比べては中邊に向つて活動て居るといふ觀はある。

㋩の二間拓は古來盛に行はれた手であるが㋭及び㋺に比して如何にも位置が低くて打ち難く、今日では特に趣向としての外餘り用ゐられぬ有樣である。

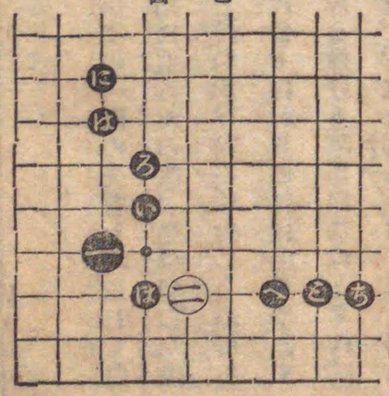
㋥の三間拓は㋩と殆んど大差はない手である。

㋩の尖頂は㋭、と、ち、の三種の夾の何れかがある場合趣向として打つ手である。

之を概括して言ふと以上數種の着手は、場合（此の場合といふは右隅及左上隅に打つてある石の關係上といふ意味）及趣向（此の趣向とは爾後の策戰計畫といふ意味）に由つて打つ手で、黒一に對し白の二と掛つた時必ずしも直ちに第三の手として打つに極つた手では無い。此の注意は次の三種の夾に就ても應用せねばならぬ。

㋭の一間夾、との二間夾、ちの三間夾は各々廣狹緩急の差はあるが何れも白二を夾み攻める手である。

本號には此中の「一間夾」定石から順次詳解する事とする。



己圖

（互先定石）

白四、意

常用手

手順ノ要所

一間夾ノ時ニ限ル手

互先定石「一間夾」

（第一圖）本圖は一間夾「三々頂」定石である黒三と夾んだのは黒がこの一隅の先着を利用して白二の攻撃に對し反對に夾撃したのである、これに對し白四と三々の點に頂けたのは、先づ烈しく黒一を衝いて根據を造り、一方黒三を攻撃せんとの主意である、又黒五と綽ねかけたのは少しく心得ある者の常用の手であるが、黒は飽迄優先の勢力を利用して四の一子に當り白が其の將に造らうとする根據を奪はうとした手である、依つて白は既に、根據の方で我が志を遂げる事が出來ぬとすれば外勢を制して勢力を伸すと同時に、七の點から敵を窘めやうといふ意で、六と膨らんだ、黒は乃ち直ちに白の來やうとする要點に七と應じた、乃で白は八と下つて又根據に戻つた、この五以下八迄は相互の要點で、實に間髪を容れぬ手順の要所である。尚是に就て趣味津々たる殘說があるが其は二間夾若くは三間夾の際に讓る）但し此一間夾のときに限りて黒は五と綽ねる手で六の處に行びても可い、何故なれば此の一間夾は極めて急な手であるから白を塗るといふ手段を取る事が出來る、が併し二間夾若くは三間夾の場合は決して六の處へ行びる手はない、又黒五と綽ね懸けた時、白六と膨らがずに八と下るは、往々初心者の擲棋に見るが、これはよくない、黒が五と綽ねかけたのは既に白の根據を奪つたのであるから白は六と發展の道を講ぜねばならぬ、然るに白が單に八に下つたならば根據に於ても得る所が少く、發展の方面は全く阻止めらるゝ事になるから、白六は肝要な

手抜ハ出來又

黒三ヲ攻ルコトヲ忘ルヤ

九ト十トノ關係

手であるが黒七も亦大切である若し黒七の手で八の點に綽ねたならば忽ち白に七に壓迫され一瞬黒白地を換る樣な事となる、で白は六の要點を占め黒亦七と打つた上は、白は元の根據に立戻つて八と下るのが肝要で、是亦如何なる場合と雖も手抜してはならぬ所である、實に此間の折衝間髪を容れぬ趣は翫味するの値がある、次に黒九は三の一子と相俟つて單に外面包圍を意味するばかりでなく、次に十の點へ下つて大に白を攻め立て、傍らト側左方面に利を占めやうとの意である、乃で白も十と曲つて安全に活を計つたのであるが、恁う堅くなつた以上は白は隙を覗うて㋑或は㋺に夾ひで、黒三からの拓きを妨げ大に之を攻撃せねばならぬ、黒若し㋑に飛ばゝ白も亦㋩に飛び、黒をして徒らに散地を走らして、其の間に左方に利を占めやうとの手段である。

第壹圖

何故一隅カラ形付ヌカ

無意味ナ手

「第二圖以下最初の黒一白二を單に●、○、を以て表示する理由」大體夾みの定石といふものは必ずしも配石の最初に行はるゝものとは限らん、然るに稍もすると之を誤解して黒一と打つた時、白直ちに二と掛るべきものと思ひ、白二と掛つた時、黒亦直ちに三と夾むべきものゝ樣に考へて、他の三隅を開放して、先づ一隅から白兵戰を始めるといふのが初心者の棋に毎々見る所である、畢竟是は古來定石本に黒一、白二、黒三と恰も第一圖に示す樣な順番の數字で示してあるから起つた誤解と思ふが、試に之を古今專門家の打棋に就て調べて見るとよく判る、必ず其の十中の八九迄は四隅四邊に相互に陣を布き、徐々に兵を進めて機を見變に應じて矛を交へるといふ風であつて、最初の第一隅から劔尖火を發する底の戰を始めるといふ樣なのは極めて稀である、然らば何故一隅から形付てかゝるといふ打方がよくないかといふと、彼我共に伎倆を揮ふ可き地域の狹くなる（即ち變化の區域の制限せらるゝ）事を恐れるからであらう。

此の點を慮つて本書は以下圖に示す通り初めの一、二の交換は●○を以て示し、此ういふ形に黒と白とのある隅で、扨て今黒が此く夾む手順となつた時白は此く打つ可く、黒亦此く應ず可きものといふ事を示すのである。

（第貳圖）　一間夾の場合に、七と黒が二間に拓くのは、緩慢と言はんよりは寧ろ無意味に等しい手である、或は無意味位では濟まぬ、最初一と烈しく一間に夾んで白を攻めやうとした主意を沒却する

断ヒテ無キ手

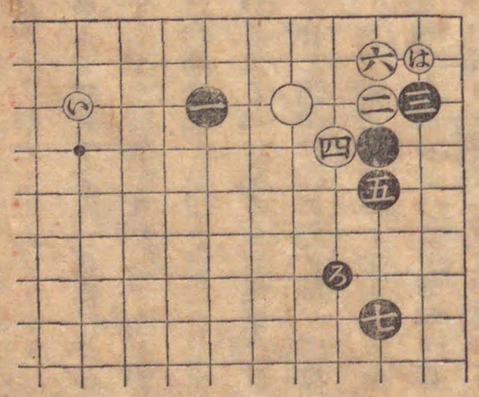
白ノ中原ニ出ヌ理ヲ悟ルコト

惡手と言つても酷評では無い、其で一間夾、二間夾、等の場合には此く二間に拓く手は斷じて無いといふ事を記憶しておかねばならぬ。

然らば此の一間夾若くは二間夾の時、此く黒が七と二間拓きするのがなぜ惡いかといふと、前に述べた當初の黒一が小目の黒と相俟つて白を攻めやうといふ手であつて、白の二、四、六、の三子は黒を攻めるのではなく唯黒に接觸して自己の凌ぎをしたのである、勿論白が此く二、四、六と打つた意味の中には隅に根據を造り、此の方面に勢力を加へておいて、時機を俟つて更に㋺方面から此黒一を攻めやうといふ考が含んで居らぬではないが、然し此の所は黒の先着であるだけに、黒の應手さへ正當であつたならば、白の考は實行の機會を得られぬ筈である。

乃で黒は白の手が六と緩んだに乘じて、直ちにるに斜走して一の一子と相俟つて白を包圍するの策に出たならば白は中原に逸出せんか、左右の黒に調子を與へて自然に利を占めさす事となるから、餘義なくはの點即ち角へ曲つて自活の道を講じ、徐ろに時機の至る迄雌伏するの外はない、黒も此くると打つてこそ、當初の一の一子の意味を十分貫徹し得たといふものである。

第貳圖



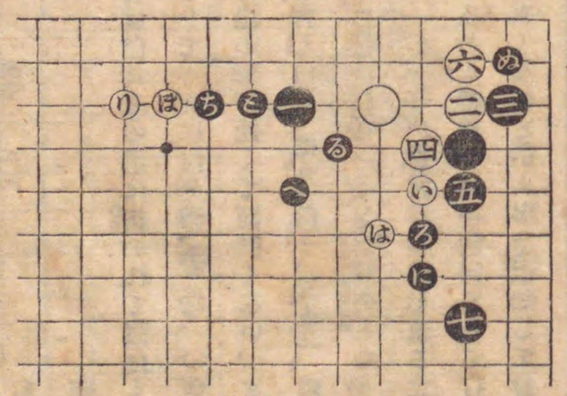
（互先定石）

七ノ後手ヲ怒メル手段

（第參圖）　然るに此く黑七と二間拓するに至つては、其の七の一子は別に防禦的といふでもなく、將又攻擊的といふでもなく、單に自己の地域を最狹區域に拓いたといふ、極めて（此場合に於ける）緩慢な手ゆゑ、此際白たるものは、此く黑の壓力の加はらぬのを侍として手拔して他に轉じてもよい、何故なれば次で黑が㋮の點に隅の根據を奪つて來たならば、其時いるは㋺と手順を押して中原に出るのも敢ておそくは無いからである、又白が黑の緩慢の手矛盾の手ねる七に着手した非を咎めて、主客地を更へ攻守の形勢を一變しやうと思つたならば、直にいに押し黑る白は黑㋺と黑を壓迫して自然に此方面に自己の勢力を加へておいて、其勢力を利用して、次でち若くはほの方面から黑一に迫り黑をして徒に散地を走らしめて、其の間に左隅方面に厚壯な地域を收めやうとする事も出來る、一間夾若は二間夾の際に黑七の惡き理由は上述の通りであるが、獨り三間夾の時は、場合によつては圖の樣に七と二間拓してもよい、と許される其の譯は、此隅黑がちと三間夾して居ると假定しておいて、扨黑が七の手を以つて中邊からにの點に打つて白に莅んで見た所で、黑の夾がちと遠距離にあるだけ、白は餘りに黑の迫擊を痛切に感じない、といふ譯は黑にと斜走した時白手拔して、次で黑が㋮に根據を奪うて來たならば一の點に拓て居る若黑一の點から迫つたならば隅㋮の點へ曲つて居る、即ち敵が左からすれば右、右からすれば左と、何れにでも活は十分あるから白は必しも恐るゝ所はないといふ理由がある、して見れば黑ちに三間夾の時、黑がにと斜走するのは、決して惡い手ではないが、已に白に對する攻が急に利かぬとすれば場合によつては七と二間拓しておくも決して惡くはない、此は黑が白を攻める方から言うたのである。

次に白が黑を攻めるといふ側から言ふと、黑が七と緩慢な手を下したに乘じて白い黑る白は黑にと前述の手順に押し、次でりに打つて黑ちの一子を攻めて見た所で、右隅の白と黑ちとの間が廣いだけ黑ちは或は一の點に或はるに活動の餘地があつて白りのために蒙る迫擊の度が極めて弛緩な、のみならず黑ちを攻める傍白の收めんとして居る左方の利は、一間夾黑一に對する白ち若くはほに比べると、此くりと左方に寄るだけ、其だけ實利が減少するといふ事は爭はれぬ事實である、更に重ねて言うと黑ちに三間夾の時は、白から黑ちを攻められても餘り苦しくはない、

第參圖



白に大利を得さする譯でもないから、場合によれば七と二間拓した所が差支はないといふ理由もあるのである。

上述中に數々場合といふ事を言つたが、其は重に左上隅及右下隅の布石との關係を言うたのであるが何れ三間夾の條下で重ねて詳述するであらう。

絶日の「味」

七ト押ス場合

『紹日』 從來の棋書多くは前圖黑七の二間拓を指して、「是は古來の定石である」とか或は「一趣向として時に此く打つ」とか輕々に叙してあるばかりで、其の古來の定石が善いか惡いか、其の趣向といふのは如何いふ意味かといふ事が更に分らぬ、此ういふ所を翫味して條理を明晰に領解しておくと、此の斜走と拓きと些かに二手の說明も多くの場合に應用する事が出來て啓發せらるゝ所も決して鮮くはあるまいと考へて、特に繁を厭はず師の絮說を請うたのである。

第四圖

（第四圖） 黑七の手は普通前述した通り㋺に斜走するのであるが右下隅に圖の樣な布石ある場合は白に㋺の邊に拓かれて面白くない、又七の手を㋩に打つたとしても次に白をに、は、へ、の何れかに夾まうとする時、何れも黑の形が低くて面白くない、といふ樣な場合に本圖の通り七と押し白八、黑九、白十、黑十一、白十二、と白を急擊しておいて次にへに白の一子を三間夾しやうといふ趣向であるが此の結果黑一の一子が非常な壓迫を蒙る（此く一間夾の場合は殊に）事となるから特殊の場合趣向として打つのは兎も角普通此く打つのは善くないといふ事を承知しておかねばならぬ。

（第五圖） 本圖は往々に初心者間の實戰に行はれて居る所である、黑の不利な事は勿論であるが、然し極めて特殊の場合即ち此ういふ打方を是非必要とする時機に際して、若しかく打つとすれば、といふのが以下說明の主なる理由である、即ち其の結果は、この一隅優先權のある黑が一隅に窒伏し、白は反つて優勢となるの奇觀を呈して居る、然るに黑五と綽ね懸けた時、白六と當てずに七と粘ぐは、これ亦初心者の打棋によく見る所であるが、萬々有る可らざる手で、

第五圖

九 二の點を粘ぐ

是等は畢竟四の手の眞意味を解せぬから起る過ちである、白八の當は先手を以て盤を禦いだ最も肝要な手、黑九の粘は茲で切を開始しては、初に五と當てた本意を沒却する事となるから止むを得ぬ次第であるが、白十の懸粘は一手を以て二ヶ所の缺點を防ぐの要所である。次に黑十一の綽は最も必要であるが其理由は次頁下欄第六圖を見れば解る。

（互先定石）

二間三間ノ時断ニテ打ツ（カラス）

重要ナ手

（第七圖）本圖黑三は普通隅八の點に綽る手であるが、此の場合黑一と一間夾に急に迫つて居るから、之を利用して烈しく三と立ち（白四の點の缺點を衝かうと擬した）白が四と堅く粘いだ時、黑は五と外面を掩うたのである、其で此の三の手は黑一が一間夾に（本圖の通り）在る場合にして初めて行ふ可き手であつて、若黑一が㋺二間夾、㋩三間夾に在る場合は斷して打つ可らざる手である、何せなれば㋺若くは㋩と黑の夾が緩んで居る時は、よし黑が五と押した所で

（第六圖）本圖は黑が十一の手でいの點に綽なかつた場合には如何なる結果になるかを示すに過ぎん。

假に黑手拔して白にいに下られると白ろ黑る白はとなるより外はないが、かくては黑一の夾みが無意味に歸するばかりでなく、白からにの下りまで利かさるゝ事となつて、黑の損失は又慘憺の次第である抑々溯つて言うと黑五の綽は行ふべからざる惡手であるが、局面の必要上止むを得ぬ場合若くは白に外部を塗らるゝにしても白が其効力を發揮する遑がない場合には、惡手を承知して行はないとも限らぬであるから只其必得を示したのである

要するに本圖黑としていの點の綽は決して忽にする事の出來ぬ重要な手である、然し白の側から言ふと布石の關係上白は直ちに此點に來るか來ぬか其は未定の問題である。

第六圖

九 二の點を粘ぐ

只此白を隅に封鎖する事が出來ぬばかりでなく、却て反對に白からいに綽ね出されて、三子の黑は徒に「ダメヅマリ」の傾を呈して㋺若くは㋩の夾の効力を消滅せしめるといふ樣な結果になるからである。

次で此く手順を運んで白が八と粘いだ時、後に白からるに截られて之を征に提る事の出來ぬ場合は、九の手を以てはに懸粘いでおくがよい。

又征のよしあしに關はらず、多くの場合九と打たずにはに懸粘ぐ方がよいかも知れぬ、其の

いノ怠粘ノ可ナル理由

第七圖

故は、若右下隅に敵即白の布石ある時之に對して堅固な備へとなる、又反對に黑の布石があるとすれば、此處に缺點を補ふはの一着は益々此の方面の黑の勢力を旺盛ならしめるのである、然しながら九の點も亦要處たるには相違ないから閑があれば九と衝當つて完全に閉鎖しておくがよい、さすれば後に㋺に綽ね白へ黑と白ちと先手に利益を占める手も殘つて居る。

（互先定石）

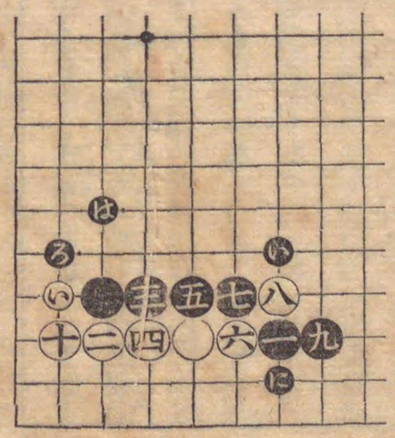
如何ナル時白六ト打ツカ

第七図ノろ
第八図ノハ
共ニ征ノ関係ニ注意ス
（キヤリ）

征ノ可ナル時ハ二ト綽込ムコト

（参考圖）　前圖黑三がモ一つ働いて居ると言う理由を細說するには玆に「一間夾手拔」の定石を以て來て參照するが最も捷徑である、（此の參考圖に示す「手拔定石」は何れ次號に詳解する順序ではある）、此の定石に於て第一に活動て居るのは白二の一子である、但し此く白が二と綽込んだのは黑が四に截た時三へ行び五にあて、黑一の一子を征に提る事の出來る場合に限る。若是が征の見込のない時に只漫然二に打つたならば直に黑の爲に四の點を截れて白三に行た時

第八圖　本圖は前圖白六の手からの變化である、白が此く打つは如何なる場合に必要であるかといふと、前圖の樣に黑に九と押られるのを嫌ふ時である、（但し本圖の手順は次で八と截つた子が黑にいと征に提られる患のない時に限る）、又白がいに綽ねないで單に十と下つた意味は外側を掩うて居る四子の黑に手順を與へて眼形を造らすを嫌うたからである、若白が前圖の樣にいに綽ねたならば黑るの白十黑はとなつて此外側の黑は確固不拔なものとなると同時に、白が先きに八と截つた一手は殆んど何の活動をもせぬ事となる但し場合によつては黑が九に行びる手を以つてにに下らぬとは限らぬ、其の時白はいに綽粘ぎをせねば直ちに黑からいと押へられて後手活をせねばならぬ。

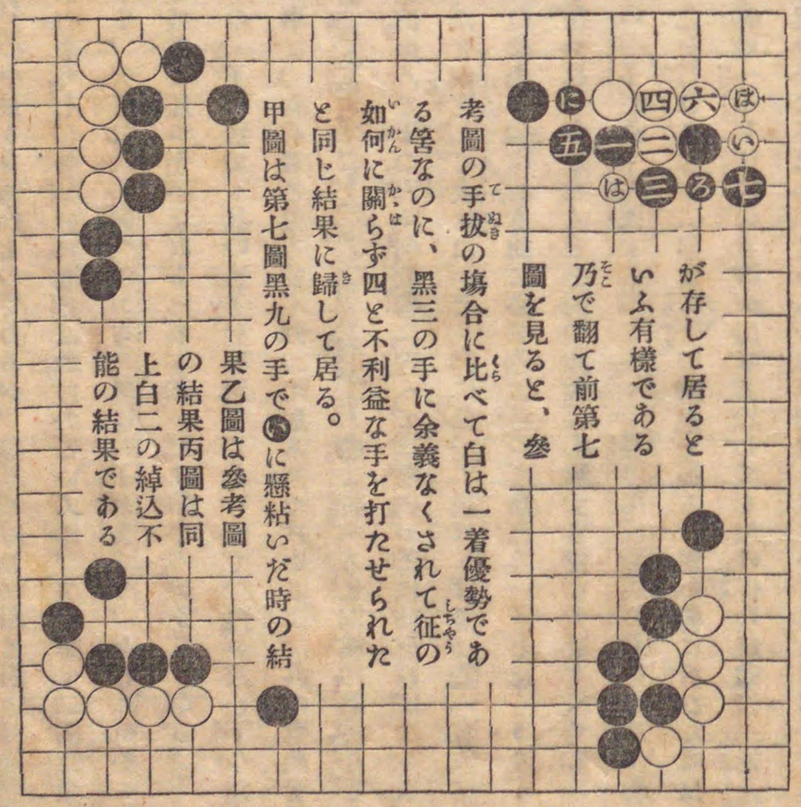


第八圖

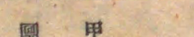
黑に六の點を粘がれるの愚を見ねばならぬから征の利かぬ時は白は忍んで四と行びるより外はない、さすれば黑二、白六、黑に白い、黑七、白ほ、といふ結果に歸するの外はない、此場合に於て白二の綽込があると無いとは非常な相違である、試に兩者を對照すると、白が單に四と行びた結果は外側の黑には一も缺點がなく、包まれた白は悉く「ダメヅマリ」の形となつて居る、然るに今若し二と綽込んだ結果を見ると黑はに衝當る手を五と緩めた形となり、尙且つはの缺點が存して居るといふ有樣である乃で翻て前第七圖を見ると、參考圖の手拔の場合に比べて白は一着優勢である筈なのに、黑三の手に余義なくされて征の如何に關らず四と不利益な手を打たせられたと同じ結果に歸して居る。

甲圖は第七圖黑九の手でへに懸粘いだ時の結果乙圖は參考圖の結果丙圖は同上白二の綽込不能の結果である

參考圖



乙圖


甲圖

丙圖

（互先定石）

黑五肝要

運用上心得(キ手)

（第九圖）　本圖は「一間夾頂引定石」の中最も普通のものであるが、黑三と綽ね白四と引いた時、黑五の拓きが肝要である、もし黑五の手で七に懸粘いたならば如何かといふに、其は第十二圖及第十三圖を以て説明する樣な手順になる、次で白六と截つたから、黑は一子を棄てゝ、七と外面から當て自分の缺點（敵に截られる）を補うて且つ先手を取るためにろの點に粘ぐのが正當である。

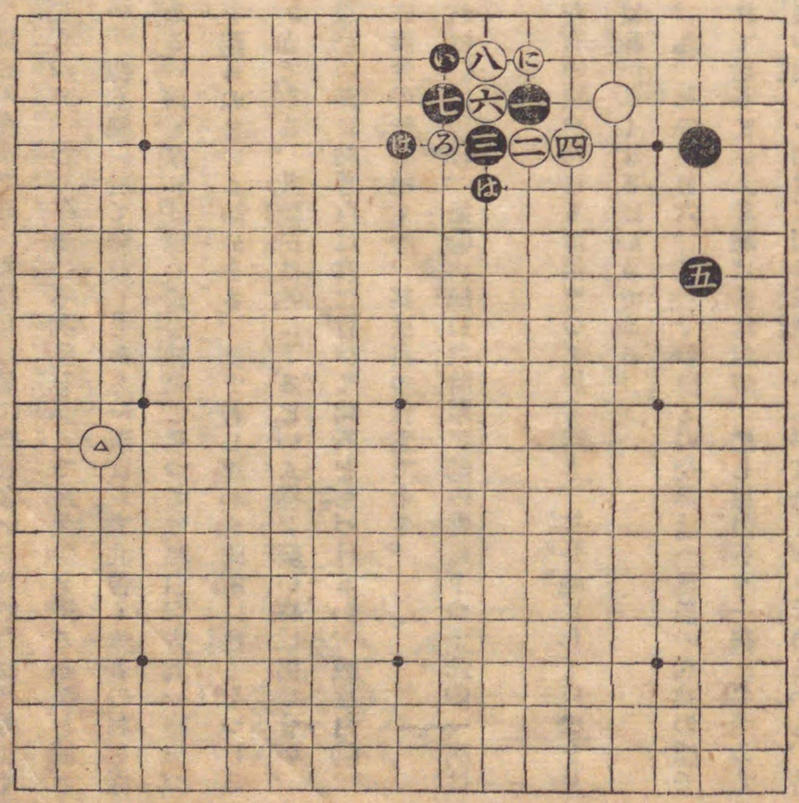
○註　白六と截つた時、黑は一の一子を捨てゝ其の捨子を利用して七と當て、白が八と下つた時ろの點を粘がねばならぬといふ事は、初心者と雖も能く知つて居る所ではあるが、其の意義を了解して居らぬと、偶形の違つた所に出逢ふと一向運用が利かず、は に押へると同樣の愚劣な手を打つて失敗する事がある然らば白が八と下つた時何故は に押へては惡いかろに粘がねばならぬかと言うと、白八の時黑に押へたと假定して次に白が若し に曲つて呉れゝば黑はろの點に粘いで後手となるばかりで濟むが、白は先づに曲る前に必ずろに截つて黑三の一子を提らうとするであらう、此ういふ所で一子を拔かれるのは殆んど全局の勝敗にも關する樣な大事な所であると同時に溯つて言うと最初の黑一の一子が全く犬死する事となる、乃で黑は騎虎の勢餘義なくに三の一子を行びねばならぬが、之を行びるといふ事は征の問題である、黑がに行びた時白はに曲り、其時黑がに打つてろの一子を征に提る事が出來るとしても此の征の前途に「征待」の一子を打たれ次に尙一着を任意の點に打たれるといふの大不利益を犯さねばならぬ事となる。

ろの點粘ぐが大切

是は征の利く時の事であるが、若不幸にも征の前途即△印○の邊に白があつてろの一子を征に提る事が出來ぬとすると三、、若くは七、の雙方何れかの二子は危險千萬の結果となるの外はない。

して見ると最初白が八と下つた時黑がろの點を堅く粘いでおくといふ事は最も大切な點であるといふ理を能々了解しておかねばならぬ。

◎『注意』此の第九圖及本文は次頁第十圖以下の參考のため特に記したものである。



第九圖

（互先定石）

三線ト二線ノ交換

細部ナガラ此打方ニ注意スベシ

急ぐ所カラサン

白黒ノ利害ノ研究

（第十圖）　この黒七白八は、三線と二線との交換であつて些しも黒に損はない、乃で白は是非なく後手を以て一子を抱へてゐなければならぬが、若し多少の不利益を忍んで迄先手を得る必要を感じた場合には第十一圖の通り打てば可い、扨本圖に於て開放してある一隅は双方共暫く先着の利を保留して局勢の進捗を俟つといふ形である、何となれば圖の樣な結果となつては黒白双方共一時形が治まつて、急に動かねばならぬ必要を認めぬといふ傾がある、其で若し黒から此所に極りをつけるとすれば㋩に失頂けるの一手あるばかりである、其際白は㋧に下るといふ樣な緩い事は出來まい、先づ㋺に綽ね黒㋧に抑へ白㋙に當て黒㋥の點に粘ぎ白は㋭に行びて此所を形づけるか、或は白㋺、黒㋧となつた時、單に㋧に粘いで隅に幾分の味を殘すか、其は白の任意である。

若又白から此の所に手を着けるとすれば㋥に頂け、黒㋺に綽ねた時單に㋧の點に下つて此の一隅は治まつて終ふ。

然し前にも述べた通り此ういふ隅は左右の黒白何れもが治まつて居る限り、侵分地として時機を見て居らねばならぬ、急いで着手しては味がなくなるばかりである。

尙一言して置くは、此の形に於て三、九、七の黒と六、八、十の白との交換は一見黒の利益の樣であつて、十の一着は白として到底後れて居るといふ非難は免れぬが、然し黒白各々一得一失である何故なれば黒三着は中原に向つて發展の途てを開けて居れ根據といふ事は全くゼロであるから、若

土圖ハ先手ヲトル手段

も此の三子の運動をば等閑にしておく時は、白に㋭方面から攻めらるゝ順序となつて（棋家の所謂重形になつて）或は危殆に陷らんとも限らぬ、若白が此く㋭に迫つて來て居るにも關はらず油斷をして居つたならば、また忽ち㋧に迫まられて、非常に苦む事となるから、白が㋭に迫つた時は直ちに㋭の邊に動いて之に備へねばならぬ。

（第十一圖）　即ち本圖の樣に打てば白は先手を得るのであるが但し口印白の邊に征の當りある場合に限るのであるから特に注意せねばならぬ、又其の結果に就いて見ると黒に十一、十三、十五、の三着を費さして、頗る堅實の根據を造らしめた、是は決して白の利益ではない、此の不利益を忍んで迄先手を得ねばならぬといふのは餘程重要な點即ち此の代償に相當するだけの急場がなければならぬ。

第十圖

（第十一圖）

（互先定石）

十二図七ノ手三通リ打方アリ

十三図二三四ノ調子

（第十二圖）本圖は白四と引き黒は八の處に拓かず五と打つて㋑の截りを防いだのであるが、其何れを撰ぶべきかは場合に於ける策戰と、配石の關係に由るから一概に可否を言ふ事は出來ぬが普通は八の處に拓いて一の一子を棄てる方が解り易い即ち治りが速いからよいのである、此くなると黒白共實利に於て互角である。

（註）黒が九に截つたのは、此の一子を犧牲にして白の㋺に下る手を牽制して其の間に此の隅の治りをつけやうとの意である白が十と黒を壓して置いて十二に行びたのは、黒に㋑に當てられるのを防いだのである、但し白十四が若も黒九の一子を征に提る事の出來ぬ場合は六の手を一路進めて九の點に打つもよし又征の如何に關らず此く打つも敢て妨げない。

第十二圖

（第十三圖）前圖黒七の手は單に本圖の通り一と斜走する事もある、其の時白は二に尖み黒三に行びた時白は四に單關して此方面の黒の活動を全く沮止め、黒亦五と下つて手堅く隅に活るの手順となる。

第十三圖

肝要十一手

手筋

（第十四圖）白六の時黒㋺に斜走する手もあるが然し治つて居らぬだけに白から策を弄ぜられるの餘地がある、故に場合によつては、本圖の樣に七と尖み頂けるもよい、この手順中最も肝要なのは黒十三の斜走である、併し十三と打たずとも黒は活はあるから、若し他に急を要する點があれば手拔するも差支はないが、其の結果は次圖の樣になつて甚だ不利に陷らねばならぬ

（參考圖）即ち白に㋺に曲られ黒㋺白は黒㋩に白の一子を提り白㋻といふ止むなき結果となつて、黒の三子は全く根據を失ひ何の爲に（前圖）五と懸け粘いだか解らなくなるから、斯ういふ所は先づ忍んで前圖の通り十三と斜走して置くがよい、之は單に外面の發展を意味するばかりではない左右に及ぼす不利の影響を豫防してゐる譯である。

第十四圖

參考圖

（互先定石）

頂行

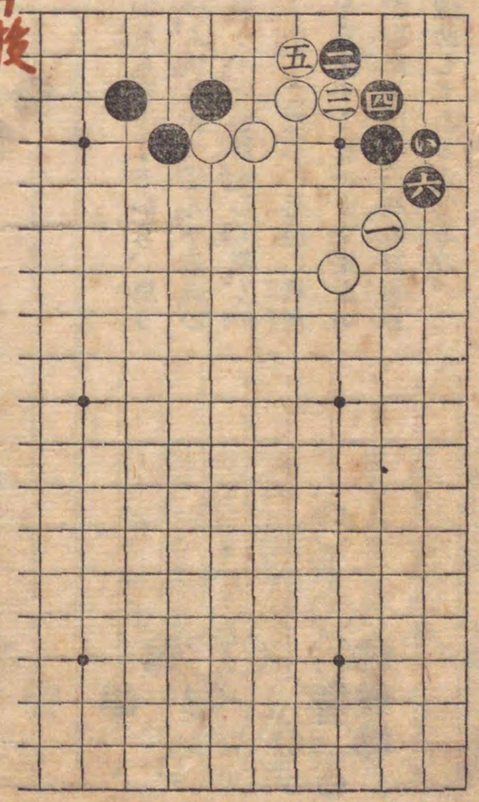
頂行ハ如何ナル場合ニ打ツベキカニカ夏下段見ヨ

下段ノ活方

（第十六圖）本圖はこれ迄とは違つて白四と行びたのであるが前圖頂引の手は自己の連絡が出來て堅固にはなる、が併し外部に勢力を張るといふ方は多少缺けて居る、本圖は△印白と二、四の白との間に敵から乘せられる缺陷はあるが其の代り外部には發展の餘地が存して居る、要するに一利一害また止むを得ぬ次第であらう。

白四は後に、㋑の點から黒を攻めやうといふ意味を含むでゐるので、黒五と突當り、白六と立ち、黒七と飛んだ時、白は自己

手拔



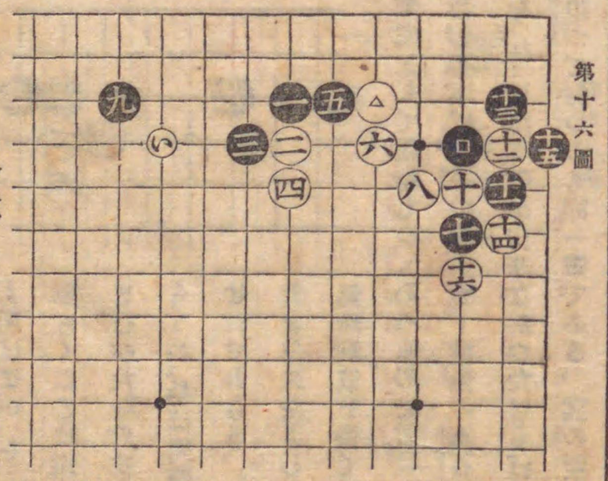
第十五圖

（第十五圖）本圖は第十四圖黒七が手拔の時の變化である、黒が手拔した所で白からは一と尖む位のもので別に妙手も無い、乃で黒は二と斜走し白が三と突進して來た時四と其の鋒を止め、白が五と曲つた時六に尖んでおくのである、若し白が三に打つ手を以て五に下つたならば、黒は白に副うて三の點に立ち白が六の點に尖んで來た時㋺に下つて活を計るのである。

此活方

白ハヨリ攻ムル意味

の缺點を防ぐ傍ら敵の間隙を覗うて八と打つた、其時黒若し十に應ずれば次に白は㋑に打つて一、三、五の黒の三子を攻め立て左方に利を得やうと言ふのであるが、黒は之を知て九と此方面に備へたのである、で白に十と突出され黒は何れかの一子を犧牲にしなければならんのは、又餘義ない譯であらう、只茲に注意を要するは黒七の單關である、假りに此手を以て十六の點に拓いたとすれば、白に八と懸けられた際黒は十と應せねばならぬそこで白は㋑に打つて黒を



第十六圖

攻め立てる手順となるのであるが、若し白八の時黒之に應せずに九に備へたらば何うか、本圖に比して五十歩百歩ではあるまいかといふ説もあらうが、其は大變な差がある苟も犧牲は代償を得可きものである、決して無代償である可き筈はない、

本圖黒は七の犧牲を拂つた代りに一隅に健全な活を保つて居る之に反し黒十六の點に拓き白に十と下られては口印黒を犬死さす事となる最初黒が七と輕く飛んだのも全くこの關係があるからである、黒若し七の一子を提られる事を不利と考へる時は第十七圖の如く打てば宜い。

（互先定石）

三角ニ拓キタル型

（第十七圖）　即ち本圖の通り打つのであるが前圖と本圖とは、場合の如何によりて利益と認められた方を任意に用ゐれば善いのである、

扨前圖及本圖共に黑は果して尙先着の利を占めてゐるか、今之を手順を換へて說明すると假りに白第一着に六の點に高目に打ち次に黑口印の點に第二着として小目に打ち白十、黑十一、白八黑七となり次ぎに白十二に截り以下黑十五迄の交換を遂げたものとすれば、白が「高目外頂」の定石を應用した夫れと少しも違

第十七圖

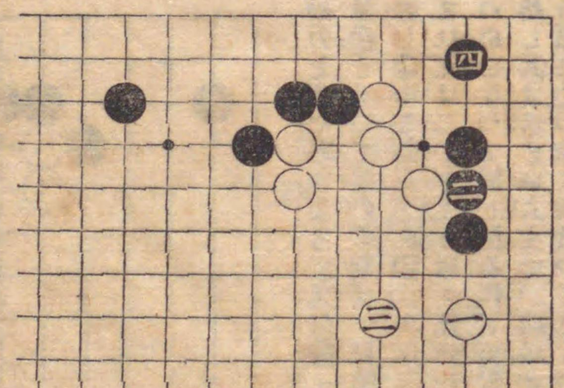
ふ所はない、そこで黑一の詰に對し、白は恐らく二とは頂けぬであらう又殊に黑五と行びた時白は果して△印白に抑るであらうか、是は問題で、恐らくは此の抑へはせぬであらう、して見ると此く緩慢な數着を白に費さしめた點から見ると、黑は無論利益を得て居る譯で、先着の効果は依然として維持しつゝあるものと言はねばならぬ。

若し其棋が二子の置棋若くは他の布石の關係で白が黑七の一子を征に提る事が出來なかつたならば、白は十の手を以ていに迫つて打つのも亦一策である、其の變化は第十八圖を以て示す

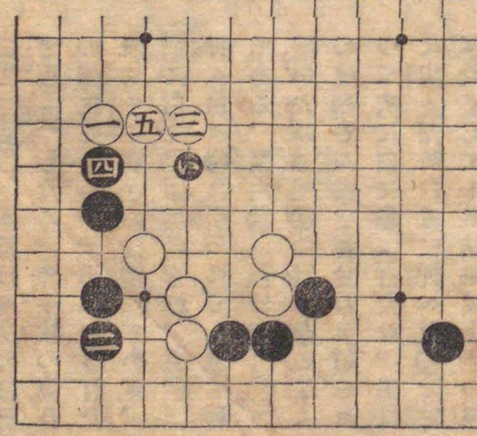
四ノ衝當大切ナリ

（第十八圖）　本圖は白が二の點に突出す兩斷の策を止めて一と迫り全一隅の黑を攻めたのである、乃で黑が二と粘いだのは自家の軟弱を補うたのであるが、白尙も三と打つて黑の發展を妨げた時、黑は圖の通り四と飛んで打つのがよい。

（第十九圖）　又白一の時本圖の樣に黑二と下る手もある、白同じく三と打つて黑の發展を妨げたならば黑は㊀の頂けを含んで四と突當り白に五と粘がせて手を拔けばよい、この黑四の突當りは打たずとも、黑に活路はあるが、それを活る爲に、黑が蒙る所の損害といふものは非常なものである、試に次圖を見られよ。



第十八圖



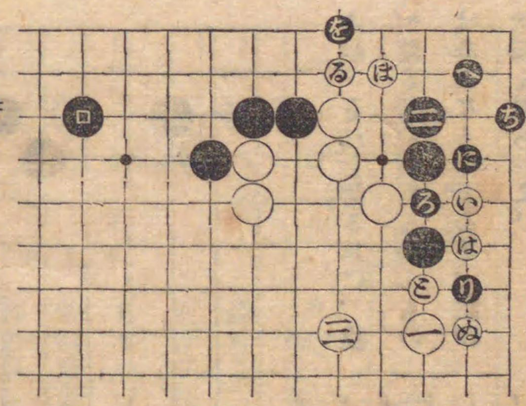
第十九圖

（互先定石）

八、策ノ手

輕效ナ手

（第二十一圖）本圖白八は策のある手で、（即ち參考圖に示す通り黑にいと立たせ、白は其の調子に依つてろに押へ自然に自己の缺點を防いで、次ににの點から黑を攻めやうと言ふのであるが）、黑は此の策に乘せられずに本圖の通り九に飛ぶのが尤も輕妙な手である、此九は寧ろ白の謀の裏を搔いて利を占めるといふ頗る活動のある手で、乃ち十以下圖の樣になつて、一見白は隅に莫大の利を占めた樣であるが決して其うでない、一隅の白にはまだ大きな缺點が有る上に



第二十圖

効力を削ぐ事となる、又白へに打たずしてほに尖めば黑へ白と黑ちとなつて黑の不利は一目瞭然である、又白ほに尖んだ時、黑若しへの要點を忘れりに白の二子を抱へたならば、白にぬに夾まれ黑は二子を提る暇が無いから、餘義なくへに戻らねばならぬ事となつて同じ活るにしても甚だ不利な活方をせねばならぬ然し其は活といふ丈で、結局非常な不利益であるから、白三の時黑はとの點に衝當つて置くが最も良手段である。

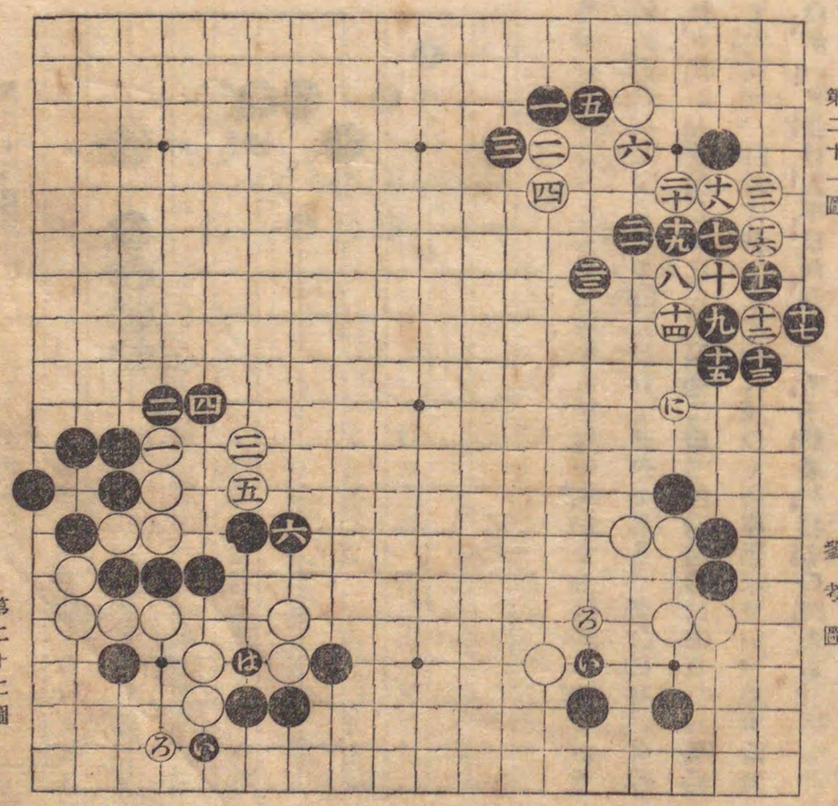
（第二十圖）本圖は前圖の白三と單關した時、黑手拔の場合の變化であるが、黑は何う打たれても不利なのは當然である、單に白にはに頂けられ、黑いに押へ白にりに引かれても黑不利である、又白はに頂けずにいに置いた時は黑ろ白は黑にとなるのは殆ど滿慮を要せぬ手順であつて次に白にへに打たれ、黑ほに尖んだ時白るに押へ黑をに綽懸たとしても其結果は上側の黑に影響を及ぼし口印黑の拓きの

此黑白模失

欠点トハ如何

十、八、十四、の白の三子は立場を失ふやうな窮境に陷りて白甚だ不利の結果である、これ皆八の一着から胚胎したものと斷じても不當ではない。

（第廿二圖）前圖に於て白は大きな缺點を有て居ると言つたがこれは後に黑からいに綽ねられ白ろに押へた時、黑はに「出截」の筋が殘つて居るからで、要するに前圖白八の手は破綻の元である、幸にして參考圖の樣に黑が欽れば可いが、本圖の通り其の裏を搔かれては、白の損失又當一着の後位では濟まぬ。



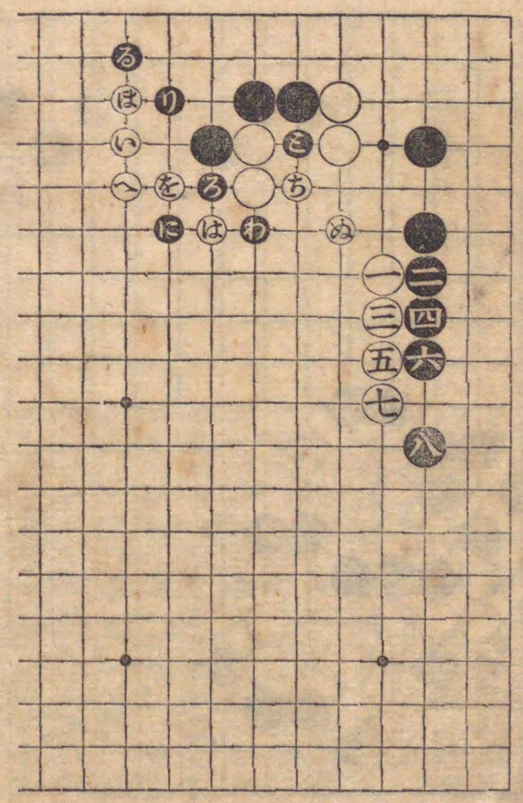
第二十一圖　參考圖

第二十二圖

（互先定石）

白ハ又ハほかノ攻撃ニ黒如何ト應スベキカ

（第廿三圖）白一と掛けた時、黒が四の點に飛むだ場合の變化を前圖に於て示したが、場合によつては本圖の樣に二と行びて打つ事もある、かくて白三から黒八まで圖の通りになつて黒は實利を占め、白は一見中腹に壯大の形勢を示して、從て一方黒の三子は之が壓迫を蒙る樣であるが實は然うでない、今白がいに打つてこの黒を攻撃すると假定して、黒はろに出で、白はに綽懸た時、黒烈しくにに綽るのである、其時白わとをとの二點に缺點がある爲をに截る事が出來ぬから白は少しも黒に對する壓迫が利かぬ又白はに綽ないでぬに懸粘いだなら黒はにに尖むで充分である、又白最初いに打たずほから攻撃したならば黒るに出で白へ黒と白ちに押へ黒りと尖頂け、白ぬに粘がば黒るに綽ねて是亦黒が宜い、要するに白が一と掛けた手は何處までも不結果に終るのである。

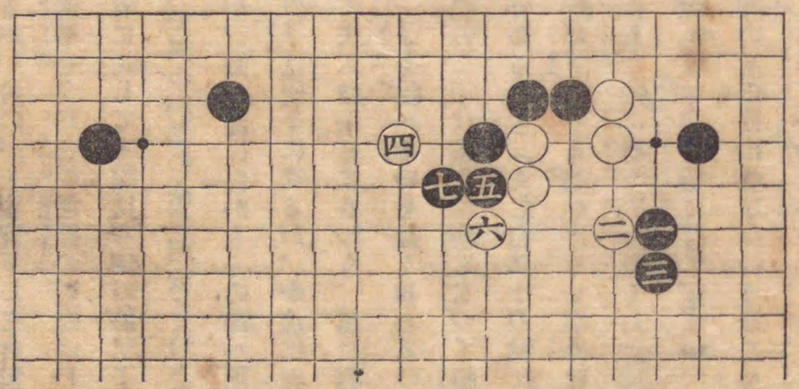


第二十三圖

白ニ四ト攻メサセテ黒及テ利ヲ得

定石撰擇ノ可否ハ場合ニヨル

（第廿四圖）前圖は白が本圖ニの點に打ちたい爲に策を弄したのであるが、本圖は黒から白に二と打たせて更に其上を行かうと云ふ手であつて、兩者策戰の對照が中々面白い、併しこれは配石上の問題に移つて來るから單に一隅の定石としては少しく越權の恐があるが、敢て說くと、即ち圖の通り左上隅に黒の布石ある場合、黒は一と斜走し、白二、黒三となつた時、白乃ち機に乘じて四に迫り、黒五、白六、黒七となれば黒の策成れりである、何せなれば白四の一子は成程黒の三子を攻めて活動いてゐるには相違ないが次に白が動かうといふ左方面には既に黒の配石があつて白は勢力を展ばす餘地がないから、白は攻め甲斐が無いといふ譯になる、といつて黒に一と斜走された上は、白は圖の樣に打つより外はないから、つまり恁ういふ配石の場合に白が最初頂行びの定石を用ゐたのが惡かつたといふ事になる是を見ても定石撰擇の可否は總て左右の配石に關係する事が解るであらう。



第二十四圖

初心者成

（第廿五圖）　本圖は前圖の續きであるが、尙白が一と着手しない迄の形を見ると、先きの頂引定石の第十圖に於て黑白双方共當分隅に着手せず局勢の進捗のを觀望してゐると言つて置いた、其の所と殆んど同意義の形である、が只前者に比して本圖は右側の黑三子が中邊に向つて高く斜走して居る丈け黑が治まつて居らぬ傾がある、で隅の利益の全然開放されてゐる此點へ、若し黑が先着を以て四の點に締る事になれば問題はないが、圖の樣に白から一の點へ頂けられる事になると、二以下十に至るまでの結果となつて、左邊の五子は安全になるが、中邊に向つた右側の黑の二子は孤立の形となつて、甲に於て得た所は乙に於て失ふ結果となるから、黑に利益のあるものとは思はれぬ。

（絶曰）黑十の手を以ていに白三の一子を抱へるのを往々初心者の中に見るが是はよくない、何故ならば白ろ黑は白にとなり孤立の黑の二子は益々薄弱となつて終ふ計りでなく、かく黑が一子を打拔いたとして尙十の盤りは急務であるから（もし白に十の點に下られたならば左側の黑に影響を及ぼすは言ふまでもなく、白にほの下りをも利かさるゝ事となつて其影響は上下左右の總てに迄及ぶのである）つまり白を堅くさしてろに覗く理を無くした結果益々不利益である。

（第廿六圖）　若し黑が前圖の結果を嫌へば本圖の樣に打てば可い、併しこれでは白の打ち得で、黑は多數勢力を費した割に地域といふ程のものは出來ないのであるから、黑は寧ろ六と粘ぐ手で八の點に押へ劫手段に出た方が可い、尤も白がこの劫に勝つたとしても粘ぐより外に仕方がないので

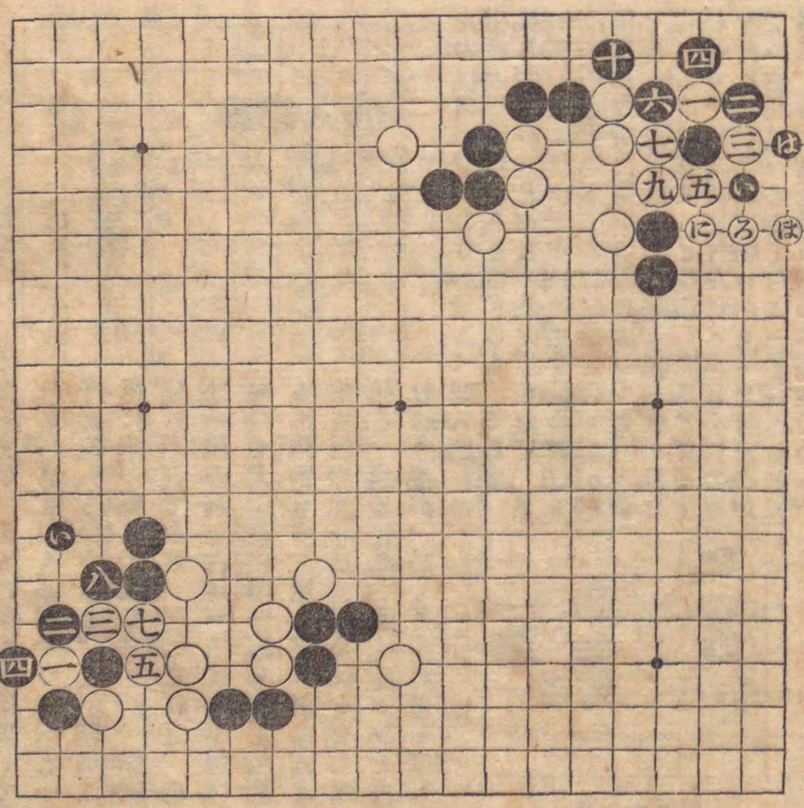
黑劫に打つ

るが、さうなつても黑はいに懸粘ぐ手があるから黑としてはさのみ損ではない、これに反し若し黑が劫に勝つて七に打拔事になると、全體の白は眼形を失つて忽ち薄弱となつて終ふ、して見ると白が三々に頂けるのも亦時機問題で、容易には打てないのである。

若し白が頂けて來たとすれば、黑は前述の劫手段を撰ぶのが此場合に於ける最上策である。

（注意）　本圖は第廿五圖黑四の手からの變化である。

六　一の點粘ぐ



第二十五圖　八　一の點粘ぐ

第二十六圖　四

（互先定石）

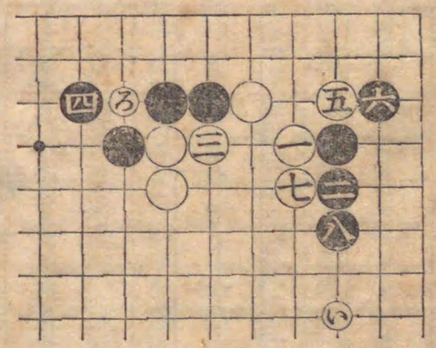
白一尖頂ノ意
水谷四段ハ
二ヲ五ニ打
テリ

白いヨリ攻撃

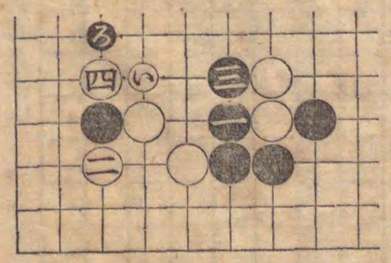
（第廿七圖）　本圖の通り白一と尖頂けたのは、若し黒が三の點に突き出したならば、白は五に打つて振替らうといふのであるが、黒は其を嫌つて二に行び、白乃ち三と出道を塞ぎ黒亦四と打つてろの截を防いだのである依つて白は五と三々の要點に綽ねて黒の根據に迫り、更に七と押し八と應せしめて堅固な形を構へたのであるが、白は次にいに打つて黒を攻め立てる手段を取るの順序である、白が五と三々に綽かけたのは既にいの攻めを意味してゐるのである、「囚みに云ふ本圖の形は、丈和、秀策兩師對局の一隅に顯はれて居る」。

（第廿八圖）　は黒が一と突き出した不道理の結果を示したのであるが、白は無論二と三々の要點を奪ひ、黒尚は前意を繼續して三と押さば白も亦關せずに四と一子を抱へるのである、この結果は單に此一局部に就て見れば、黒幾分の不利である、何故なれば、白は一隅の利を占めた上に尚中邊に向つて大に發展の餘地を存して居るに拘はらず、黒が將に屠らんとする白の二子は未だ命脈を存して居る、然るに此一隅優先の利を占むべき黒が、かゝる不結果を來したのは何が爲であるか、これ則ち黒一の突破の不條理なるを證するものである。

然らば白がコと小目の黒に迫つた時、黒が四の點に行びて小目の黒を救うたならば如何かといふに、白はいに押し黒がるに行びて黒一の頭を押へておけばよい、畢竟黒が四の點に行びたのは最初一と突出した手と矛盾する譯で、白に二と打たれてから小目の黒を逃出す程なれば初めから一と打たぬがよい結局黒一と出て白に三と押へさせた事になると其交換は黒の不利益である。



第二十七圖

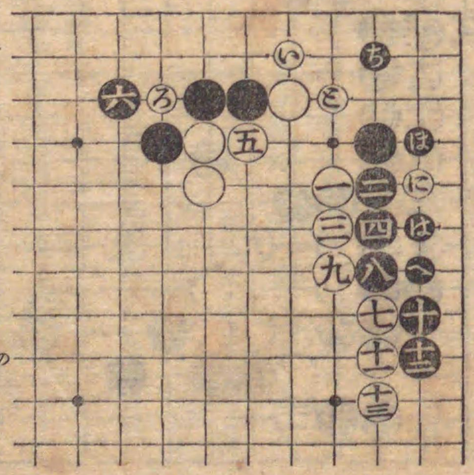


第二十八圖

四ノ手ヲ八ニ
トブ時ハ次
点ヲ生ス

白七心得
オクベキ手

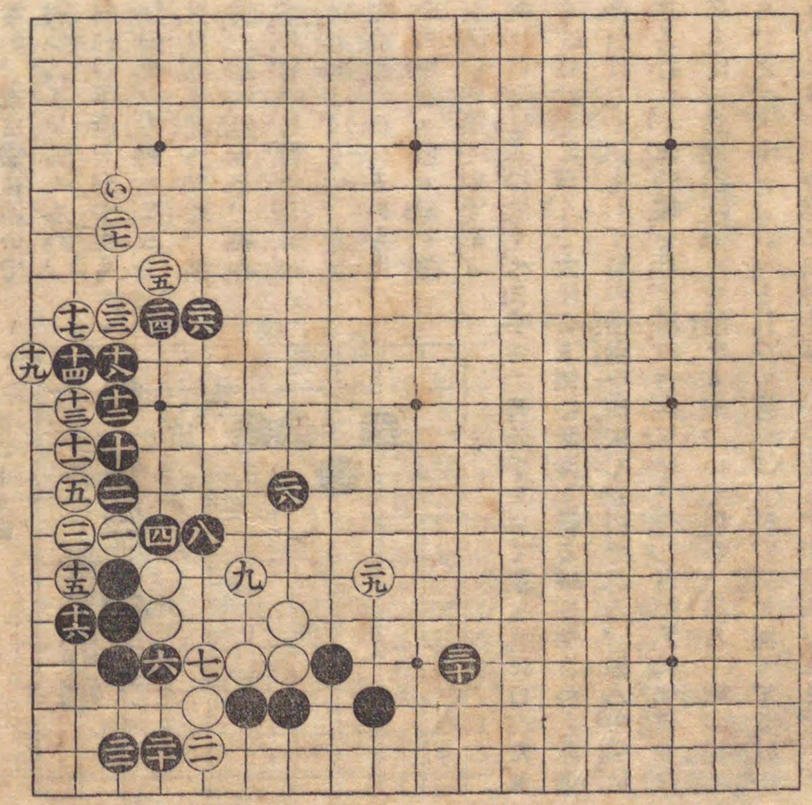
（第廿九圖）　前圖は白が一を尖頂け黒二と行び黒絶えず一歩を先じて行びて居たが、本圖は白一と斜走に懸け、黒二に行び、白三と行び、白が始終一歩を先じて居る、でこの白一の懸けは些しく無理なりと說いてある棋書もあるが、別段無理といふ譯もない、扨黒四の手を以て八に飛んだならば如何かといふに、然する時は直ちに、白にいに下られて黒にろの截りと四に突出しとの二箇所の缺點が出來る、此時黒がろの截を防いで六の點に懸粘いだならば、白は四に突出し黒はに盤つた時白ににに截れて黒の應手を試みられる、乃で黒はに抱へて八の一子を棄るか、或はへに粘いで隅の二子を棄てるか、何れの手段を取つても結局黒の不利となる、又白五と押へた時、黒いの點に綽るを、初心者の打棋に間々見るがこれはよくない、白は無論とに行びるから自分の地域へ態々敵を追ひ込む樣なものである次に白七は心得置くべき手で、若此手を以て單に九に行びたならば黒は七に飛んで大に右下側に發展し得る事となるから此場合白は七と斜走して黒の活動を制限したのである、黒八の手は寧ろ打たずに時機を見て居た方が可い、若し白が八に突當つたならば、黒はちに飛んで治まりがついて居る、然るに圖の樣に八、九、十、十一、十二、と打つて終へば、後の味を無くするばかりではない、中原に白の手厚い形を造らすの不利がある。



第二十九圖

（第卅圖）　前圖白七の手で本圖の通り直ちに白一に押へれば如何といふ其の變化を示す、此の時黑が三の點に綽ぬて打てば無論白の利益であるから黑は二と夾むのである、白若し四に粘げば前圖白七の手で單に九と行びた場合、黑に七に飛ばれたと同結果となるから、白は勢圖の樣に三と下らねばならぬが其時黑は四と截るのである、以下黑三十まで圖の通りになつて黑は尙先着の効果を保つてゐる、が併し㋐に白の布石ある時、黑が二と夾んで圖の樣な手順を踏むは、よくないのであるから其の場合には黑は（前圖六の位置に懸粘ぐ手を以て次圖の樣に打たねばならぬ。

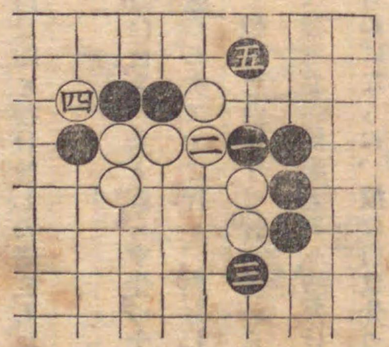
第三十圖



（第卅一圖）　本圖は前々圖黑六の手からの變化である、黑が四の截りを防ぐに先つて、圖の通り一と突き出し、白に二と粘がせ次に黑三と綽懸けたのは前圖の樣に白に壓迫される事を嫌つて上部の二子は之を捨て、中邊に勢を張つたのである、次に白四と截つた時、黑不關焉と五に飛んだのは、棋家の所謂手理と稱する輕妙な一着で、捨てた石を飽迄利用して少しの利をも失ふまいといふ手である。

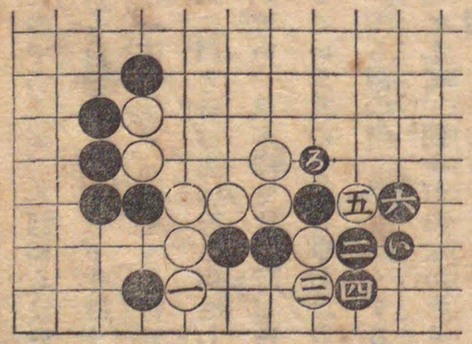
（第卅二圖）　本圖は前圖の繼續で白が一と盤りを止めた場合、黑は二と當て、白三、黑四、白五と截つた時、黑は㋐に一子を救ひ出すか或は本圖の樣に六に綽ぬて打つか、其れは配石の模樣、若くは其時の策戰次第で任意の行動を取れば可い。又黑二に當てずに單に㋐と打つのも輕妙な手である、何れにしても黑は此際捨てた二子を利用して、白をして飽迄此所に勢力を費させ、自然の結果として利を收めやうとの主意に外ならんのである。

第三十一圖



が併し黑が二に當てるといふのも㋐に打つといふのも、要するに時機を見て打つ手で、急いで打つ可き手ではない、尙注意せねばならんのは凡て棋は輕く轉換して打廻す趣向、即ち運用の妙を自覺する事が必要である。

第三十二圖



（互先定石）

（第卅三圖）　扨前圖迄は、白二が黒一の頭に頂けた場合の變化を示したのであるが、本圖からは白が二と小目の黒を壓して斜走掛をした場合の變化を説明しやう、圖の通り白が二と掛け以下十四までの手順を運んで、此方面に勢力を加へたのは、次に㋺に打つて黒一の一子を攻め立てやうと言ふのであるが、白は必ずしも圖の通り極りをつける必要はない、否寧ろ單に四と行び黒に五と應ぜしめた丈けで、六以下の手順は之を運ばずに直ちに㋺に夾むで打つた方が可い、只本圖では、若し白が此方面の極りを付けやうと思うた場合には、斯く打つべきものであるといふ其の手順を示したのであるから、實戰に臨むでは白の此打方は余り好ましくないのである、尤も圖の通り黒を固くする事が左右の白に些しも影響を及ぼさない場合、若くは黒を凝す爲の趣向として、間々打たないとも限らないが其は極めて稀である、先づ白は四と掛け放した儘直ちに㋺に夾むで攻めるのが最も普通の打方であらう。

手順に就て尚注意を要するは、黒七の時白直ちに八と截らず先づ十と押し、黒に十一と行ばせ次に八に截るのと又本圖の樣に白先づ八と截つて次に十と押し、黒をして十一に粘がすのと果してどれだけの差があるかといふ事であるが、假りに白が十と押してから八に截ったとすれば黒は九に抱へずに十二の點に粘ぐかも知れぬ即ちに黒考慮の餘地を與へるだけ白は損であるが、本圖の樣に白直に八と截つたならば黒は必ず九に提らねばならぬ、故に白は先づ本圖の通り直ちに八に截るのが

三間夾打込ミ似タル型アリ

普通で、十と押し、後八に截る手順は極めて稀である、

（第卅四圖）　本圖は前圖の樣に白が決りをつけないで、單に六と夾むだのである、白八の盤りは左右の白を輕く凌いだ手で、殊に右方面に黒のある場合には自己の凌ぎを兼ねて、六方面への敵からの詰にも備へる事となるから、大に宜い手である、先づ白は一時凌ぎに八と打つて黒の應手を試みたのであるから、黒も亦直ちに之れに應ずる必要はない、然るに初心者は白八の時直ちに㋺に抑へ、白㋩黒㋥白

第三十三圖

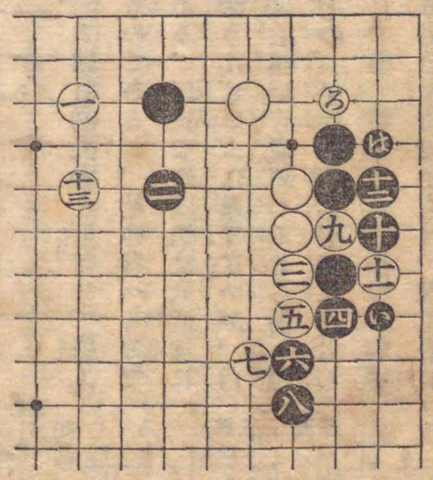
㋭黒㋬白㋣黒㋮と形付けて終ふものであるが、是亦考へものである、何故なれば黒は只低地に活きたといふに過ぎないが、白は上部から連絡してをる而も黒七の一子は白の其堅壁に密着した、事となつて一見黒の不利なる事は解るであらう、又場合によりては黒からㄅㄇと打つて白を低地に壓迫する手段もあらうから、黒が直ちにㄈに押へる事の是非如何は（黒五の時白がㄌと打ち黒をしてㄆと應ぜしめ次に截りを入れて前圖の如く決りをつくる事の問題たると等く）、是亦問題である。

そして此等の問題は布石研究の領分で解決する事が出來る。

第三十四圖

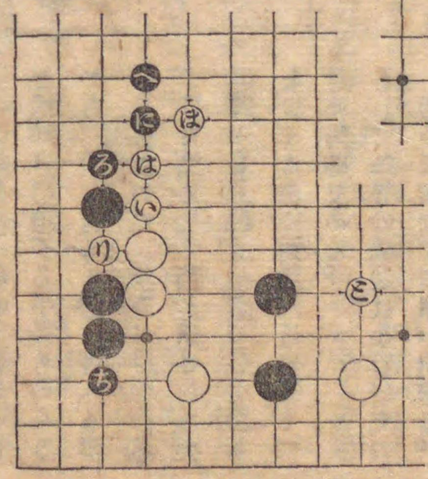
棋ノ妙味ノアル所

（第卅五圖）　本圖は前圖白八の手からの變化であるが、白が三、五、七と押し、然る後九と衝き出し、次に十三と攻める手順は非常に大切である、假令一手でも手順が前後すると打つ意味の連絡を失ふ事となるから、よく注意せねばならぬ、黒十二の手を以て㋩に一子を抱へれば白は十二に截つた後ち㋺に頂け黒を㋩に曲らして精々凝らした上、同じく十三の點に打つて黒を攻めればよい、又圖の樣に黒が十二に粘いだならば黒には種々の截れ味が殘つてゐるから白は其を見て打つて居るので、棋の妙味は凡て斯ういふ所にある。



第三十五圖

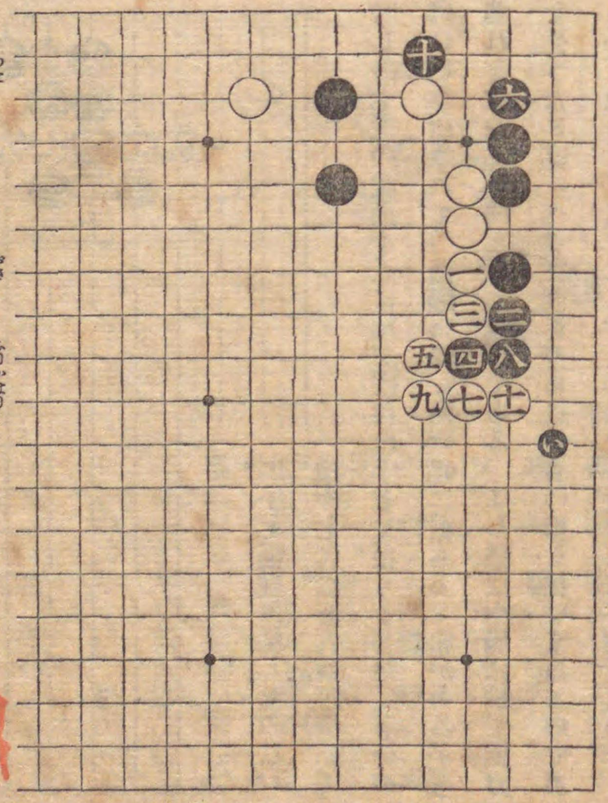
（第卅六圖）　本圖は手順の前後した一例を示したのであるが、即ち白いに押し黒ろ白は黒に白ほ黒へとなりたる時、次に白りに突き出さずして直ちにとに打つて攻むれば如何といふに、黒にちに下



第三十六圖

俗手　土ノ押ヘ　厚キ手

（第卅七圖）　又白五と綽ねかけた時、黒七の點に行びず本圖の樣に六と下る手もある、この六は隅の守備を兼ねて中間の黒との盤りを意味してゐるから、下邊に於ては黒聊さか得る所はあるにしても、中邊に於て大に、失ふ所があるからよく形勢を見て打たなければ大に不利を招く事となる、又黒八の時、白九に粘がず十一に押へるは俗手であつて宜くない、直ちに黒に九に截られて始末に窮する事となるから、白は必ず九に粘がねばならぬ、で黒も六の意を繼續して十と盤り白も十一と押へて振替を打つたのであるが、此白十一の押へは頗る厚い（勢力優秀）手であるから黒は十の手を以てに斜走しても可い、が何れを撰ぶも其場合を見なければならぬ事は勿論である。



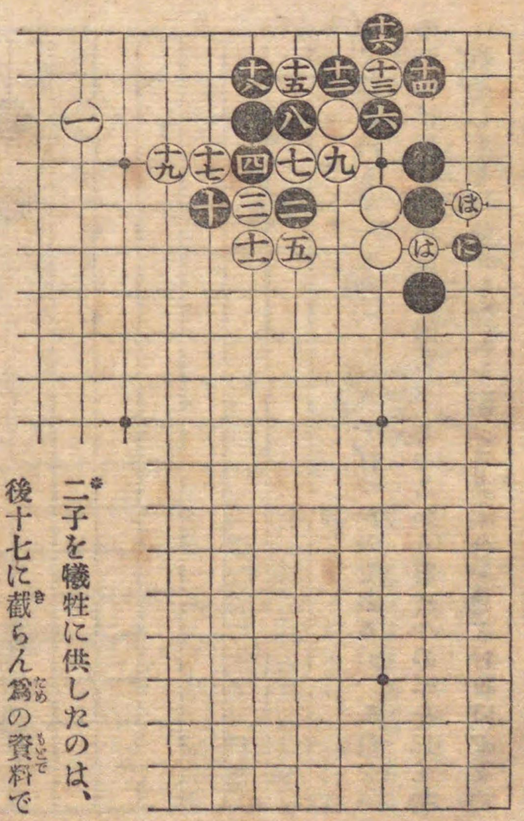
第三十七圖

（互先定石）

三同夾
切金

三ノ手助

（第卅八圖）本圖の樣に白一と三間夾をするのは左上隅の方面に白の締りがある場合、好むで打つ手である、此時黒は單に三に單關しても可いが、圖の樣に二と斜走して、白の截れを覗ふのも一策である、白は之に對し星に沿うて凌ぐのが普通であるが、白としては眞面目に過ぎるといふ所から、亦一策として三と頂けたので是も手筋である以下圖の通り變化し白は上邊に於て敵に實利を占められた代り中邊に於て大に勢力を得たのである、又白十三、十五と截つて



第三十八圖

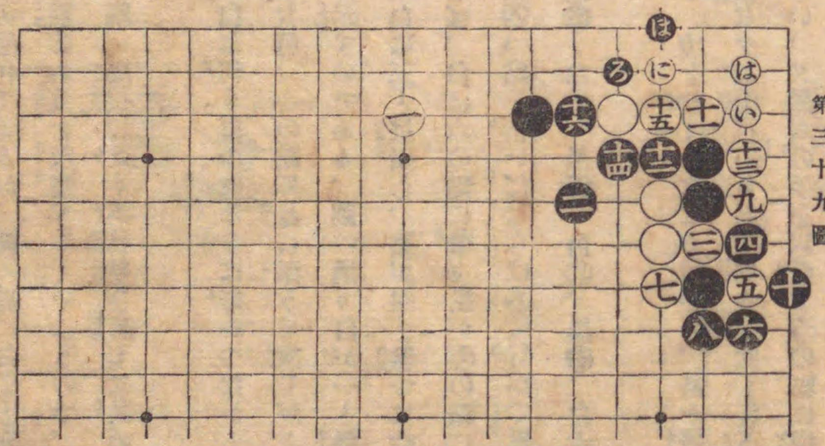
若し白十三の時黒十五に結がば白に十七と截らるゝ憂はないがはに突き出されて、黒ほに受けた時ほに截らるゝ味があるから其れを慮つて十四と抱へたのである、よし黒は中邊に於て勢力を失うたとはいへ、實利を占め且先着の權を握つてゐるのであるから黒の立脚地として、この治まりは決して不利でない。

二子を犧牲に供したのは、後十七に截らん爲の資料で

二ヲ二ニ夾

（第卅九圖）木圖は白が一と打つて黒を二間夾とした時の應接である、之に對する黒二の斜走は前圖と同樣の意味である、以下白十一に至る迄の着手は別に說明せずとも解つて居る筈である、

黒十二の手で若も十三の點に、白九の一子を抱へたならば、忽ち白に十二の要點を鎖されて、左側の黒は非常に凝形となるばかりでなく、中間の黒は根據のない所謂る浮き形の結果を呈して非常に不利を招かねばならぬ事となるから、本圖の通り白を兩斷する策を取つて十二と突出すのが極めて肝要な手段である



第三十九圖

扨本圖の樣に打つて終つて黒は後にるに綽ねるが良い手である、其の時白がにに押へたならば黒はほに二段綽をし、白は止を得ずはに後手活をしなければならぬ事になる、若黒るの時白にに押へずして單にはに活きを計つたならば、黒からにの點に行びられ何處迄も後手活をしなければならぬといふ譯であるから、本圖の樣に運んでは無論黒の方が優勢である、

（互先定石）

（第四十圖）此は前圖第十三の手からの變化であるが、圖の様に白二と抑へるのは宜しくない、此く打つのは（い）及（ろ）に缺點を生じて全然隅の利益を放棄するといふもので、扨其の代償として何の得る所もないのである、抑々白が此の一隅の應接に此く不結果を來した其の原因は前圖白三と突出し五と截つた趣向が無理なからである、

然らば溯つて此の應接の始めに、白は何う打つたならば好かつたかといふと、其は第三十三圖の説明で述べた通り、最初黑が斜走した時、一の點即星に添うて凌ぐがよいのである、

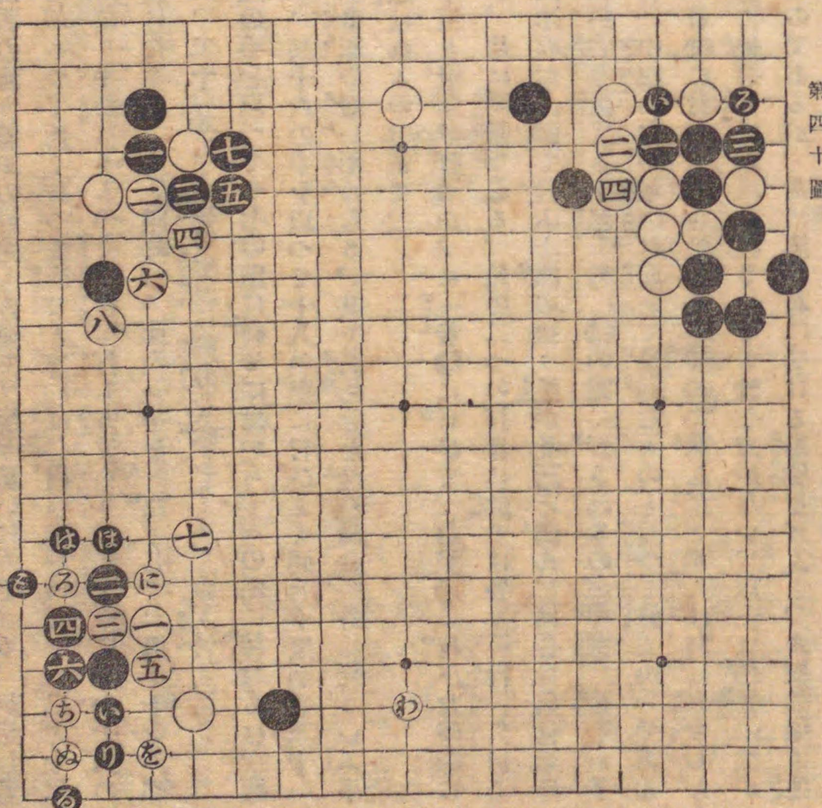
（第四十一圖）本圖は特に參考として示すのである、圖の通り白が一と斜走掛した時、黑が若し二と單關したならば何うかと言うに即ち白は三と突出し、黑が四と盤つた時白は五に曲つて抑へるがよい、其の時黑が若し（い）に行びたならば、白は六の點に截り黑が（ち）の點に抱へた時（ろ）に截つて黑二を征とする事が出來る、又白六の時黑（ろ）の點を粘いだならば（ち）に行びて黑二子を提る事になる、又、白一、黑二、白三、黑四、白五、黑（い）、白（ろ）、黑（は）、白（に）、黑（は）、白六、黑（と）、白（ち）、黑（り）、白（ぬ）、黑（る）、白（を）と運ぶ手順もある、

此うなると何れにしても黑は何れか一方を捨てねばならぬから、其を嫌へば圖の通り六と粘ぐの外はないが此うなると黑の姿勢の活動なサ加減は一見して判る、此く迄不働を忍んでも初めに二と飛ばねばならぬといふ道理は決してない、又黑六の手を以つて（ち）の點に掛粘く手もあるが、其の結果

出截

は本圖と大同小異である、白七は次で（は）の點に頂けて益々黑を壓迫しやうといふのと、一方には（ね）の邊から黑を夾み攻めやうといふ意味を兼ねて打つた手である。

（第四十二圖）此の出截の變化は非常に複雜である、殊に二間夾若くは三間夾の場合は種々の變化があるが（其の詳細は二間夾及三間夾の條下に讓る）此一間夾の時は双方共に本圖の通り打つのが普通の應接である、此の結果黑が先手となるのは先着の効果の然らしめる所である。



第四十圖

第四十二圖

第四十一圖

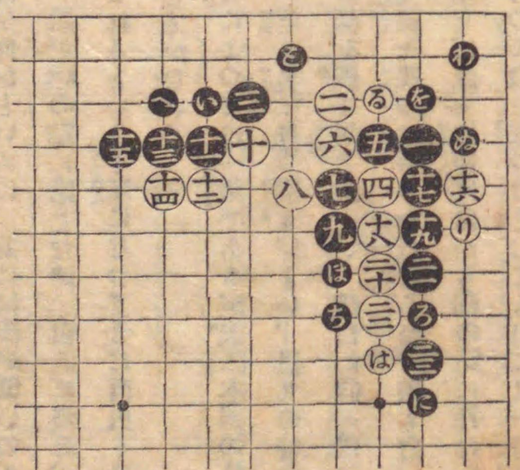
（互先定石）

（第四十三圖）黑十一の手は、前圖説明の通り運ぶのが尤も普通で又解り易い打方である、が然し黑が右隅との關係上何か趣向する所があつて此く打つて來たとすれば、白は本圖の通り十二、十四と押し、次で十六の點に打つのが所謂る手筋なるもので巧妙な打ち方である、要するに此の十六の着手はダメヅマリの俗手に陷るを避けた手であると同時に、此の一子を好餌として、黑を十七の點に誘ひ出し自然の手順を以つて十八、二十、廿二と運び中原に勢力を張らうといふ手段なのである、

「註」　ダメヅマリとは白若し十六の手を以つて十七の點に押せば黑から十六の點に綽ねられ、此の四、十七、の二子の白は僅に二手、又十六の手を以つて十八の點に行びても同じく黑から二十の點に綽ねられると忽ち二手といふ命脈の短い形になる、其で萬止むを得ぬ場合の外は此ういふ手はダメヅマリと稱し俗手として嫌はれるのである、

白二十二の時、黑は本圖の通り二十三と飛んで打つか、モ一着ろに行びて、白がはに行びた時にに飛んで打つたならば如何であらうか、是は問題である、此の二つの打方に就ては各々一得一失がある、つて必ずしも是非の斷定する事は出來ぬが、強て言ふと圖の通り黑が廿三と飛んだ場合は白は此の所を手拔する事は出來ぬ何故なれば白若手拔すると忽ち黑　はの點に押されるのが非常に烈しい手で、折角十六の一子を犧牲にして得た中腹の白の地域は極めて薄弱なものとなつて終ふからである之に反して若し黑廿三の手を更に一着ろに行びておいて白はの時にに飛んだとすれば白は必ずしも此の所に應接するとは限らん、任意に他の好む點に手拔されても致し方がない、以上は側面の黑が中央方面の白に及ぼす勢力を説いたのであるが、次に黑自身に受ける影響を言ふと、本圖の通り運

んだ結果は白からろの點に突出される味があつて其の結果隅で多少の損をせねばならぬが、若今一着ろに行びておけば其の患はないのである、乃で此の利害得失を比較すると、本圖の場合に黑が隅で受ける不利益は僅少であるが、白が若し手拔すれば非常な損害を招く事になる、若し又黑廿三をろに行び白はの時にに飛んだとすれば隅に損をする處がない代り、白には任意に手拔きされる、して見ると失の少くして得の多い本圖の手順に運ぶといふ事が此の場合必要である、



第四十三圖

「先を急ぐ」といふ打方で着打が重くて無理の傾きがある、やはり十一の手で十八の點に白を提り切つておくがよい、本圖黑十九の手でほに行びる打方も無いではないが、變化が非常に複雜になつて容易に其の利害が判らぬ、若も黑が十九の手をほに行びたならば以下の手順に運ぶのが普通であらう白十六、黑十七、白十八、黑ち、白二十、黑ち、白り、黑湖、白ろ、黑を、白廿三、黑わ。

つて言ふと黑十一の手を圖の通り綽ねて打つとか或はへに飛んで打つとか（黑へに飛べば白十一の點に行び、黑手拔すれば白はほの點に突出す若又黑手拔せずにとに尖まば白は矢張り十六と打つがよい）兎に角黑が三の一子を惜んで打つといふのは、先に打つ可き點を後にして、後から行く可き所を先にする即ち、

（第四十四圖「斜走跳出」白四は從來黑一に迫つて斜走した着手を一變して、黑三の方に接近して迫つたのであるが、此の手はろに單關するのを一層ハタラカした着である（ろの單關は緩慢で不利益な手であるから實際には殆んど打つ可き手でない）

此の手は一見黑三に迫つて居る樣であるが若し黑が此の所を手拔きするか或は三の一子を動いたならば、白はいから攻めやうといふ意味を含んでをるのである、乃で黑も亦其を防いで五と應じた、此の五の手をるに二間拓したならば如何かといふに、其は位置が低いのと緩慢なのと二つの欠點があつて、白から五の點に掛けられ、黑がいの點に應じた時、白六に頂け、黑はと綽ね、白七の時、黑にとなつて白にと方面から攻められるといふ手順になつて太だ面白くない、又白から單に六と頂けられても或は手拔きされても致し方がない、

本圖白六の時黑はに綽ねるのも塲合によつては一策であるが矢張本圖の樣に七と立ち白に八と應じさせて、九と打ち白を兩斷するのが解り易く且つ治りがよい、黑九の時白此處を手拔して他に着手したならば、黑も亦手拔して互に時機を觀て居るがよい、後白がほの邊に迫つて來たならば、黑は直にへに突き拔いて黑三の一子と連絡を謀つておかねばならぬ、若も白がほの邊に迫つたにも拘はらず、黑がへの着手を怠つて居たならば忽ち反對に白からへの點に打たれて黑は左右に兩斷されるの恐がある、其時たとひ黑がとと打つて白を截つたとしても白には一向痛痒を感じない、即ち白は

ちに綽ね、黑りと抑へた時、白はの點に粘いでおいて徐ろに左右の黑を攻めるといふ手順になつて、黑は非常の不利を犯さねばならぬ事になる、

（第四十五圖）本圖の樣に黑が白の根據を衝いて兼て自己の根據を造る目的で、七と綽ねた時は白は八と膨らんで黑九の時、更に十と打つて黑三を低地に壓迫しやうといふ打方に出るがよい白十の時黑十一の手を十二の點に行びるのは重いから、此く輕く飛んで捌かうといふのである白が十二と突出し十四と曲つたのは此の處を早く治らうとの手である、*

第四十四圖

*要するに本圖白四、黑五、白六、となつた時は矢張前圖の樣に黑は七の手で八と立つがよい、此く七と綽るのは面白くないといふ證は、手順を更へて説明すると（本定石第一圖第五頁參照）三々頂定石の手順に運んで黑はに斜走す可き手を五と尖み白に四と斜走された形となつて居る即ち白四、黑五の交換は損得の容易に解らぬ手となつて居る、（但し黑がほに在るのと此く五に在るのとは五の方が堅固に過ぎて損である事は明かである）

第四十五圖

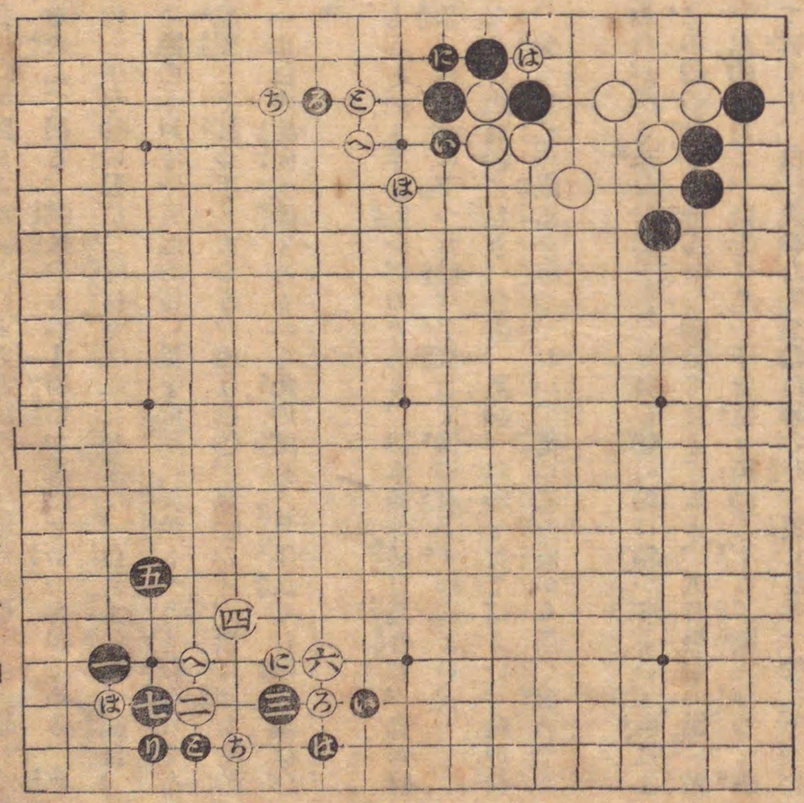
（参考圖）是は前圖の殘説を示すのである、前圖白が十四と曲つた後、黒が若し此處を打つとすれば如何打つかといふに先づ、いに押し白がはに截つた時ぬに粘ぐ位のものであらう、然し是も左上隅布石の關係によるので、若も左上隅に已に白の布石があつて、其の石からの拓を兼ねて白からちに夾まれる恐のある場合はいと押す手でるとニ間に拓いておくがよい、

黒がいにも押さずるにも拓かずはの點に一子を惜んで粘ぐといふ打方は重くて良しくない、若黒がはの點に粘いだならば白は次に何う打つか、其は一に左上隅の布石の關係によるのである、乃ち左上隅に黒の布石のある場合であれば白はほから壓して黒の位置を低くからしめるの手段に出るがよい、若又左上隅が白の占領に歸してをる場合ならばとから激しく迫る打方もあらう、又ほに打つ手を以てへから打つ筋もあるが要するに之等は多く布石關係の問題であるから省略する、

「註」此く棋が廣くなつて（棋が廣くなるとは變化が多樣になつて其得失消長を容易に豫測する事の出來難い形勢を指すの意）黒の治りが惡い結果となつたは畢竟前圖黒七の手を前々圖の樣に運ばなんだから其の惡影響を受けたのである。

（第四十六圖）黒五と應じた時、白六の手を以つてほと三々の要點に頂ける前圖の手段を變じて、六と打つて黒三を壓したのは白の一策である、其は白六の時黒がぬに飛んだならばるとと突出し黒がはと盤つた時にと曲つておいて此の白の治まりをつけ、隅に味を殘して打たうといふ意味であるから

白六の手は黒にいと應じさせやうといふの計畫なのである、勿論前述の通り白六、黒い、白る、黒ほ、白にとなつて見ると隅には白から何とも打つて無い方が黒の一、五、が未成品であるだけ白のために都合はよい、然し本圖の樣に黒から七と尖みつけられては、白は謀のウラをかゝれた體で、太だ不結果を來すのである、して見ると白六の手は面白くないといふ事になる、黒七の時白がへに立つたならば黒はりと綽ね粘ぎ、三の一子を輕く棄てゝ打つのが萬全の策である。



参考圖

第四十六圖

（互先定石）

（第四十七圖）黒が五と尖んだのは、白にいの點から攻められるのを嫌うたと同時にるに尖み頂けて二、四、の白を兩斷しやうといふ味を含んで居る、其故白も六と衝當つて之を防いだのである、此時若も黒が此の方面を手拔きして三の一子をはの點に二間拓でもしたならば、白は直にろと綽ね、黒がいの點に綽ねた時七に伸び（參考圖の十以下十五迄の樣に黒を低地に壓迫しやうと試みるであらう、又ろに綽ねる手で七の點から威壓して打つ手もあらう、或は白ろ、黒いの時、白は烈しくわに二段綽して打つかも知れぬ、其は一に白の趣向次第であるから此の處を一旦手援した限り黒は白の命に維れ從はねばならぬのである。

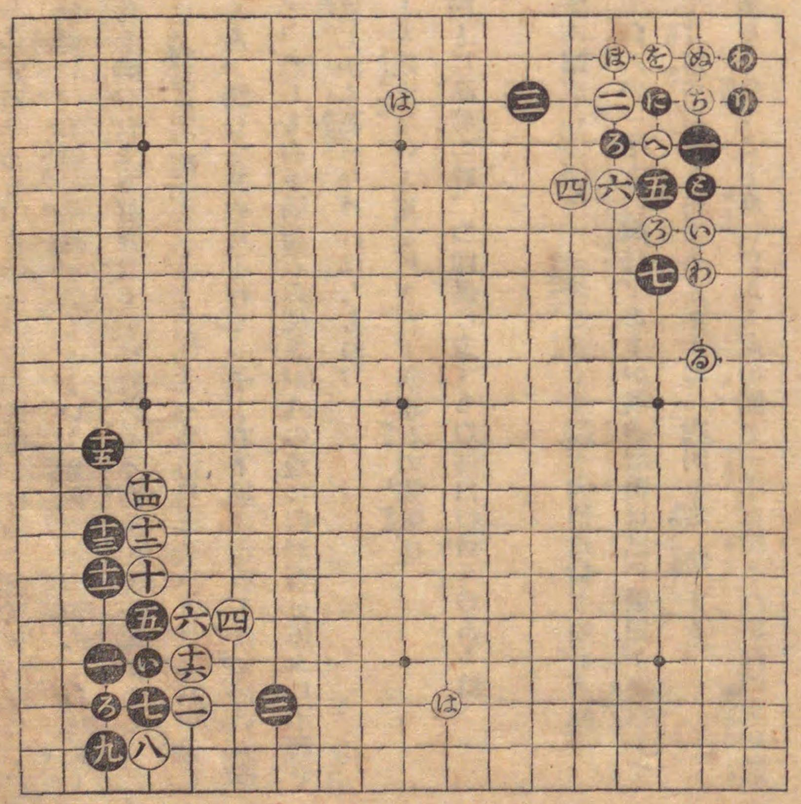
本圖は黒七と打つて白のろから迫まらうといふ手を拒いだのである、扨本圖の樣な場合に、白がはから夾んで來たならば、黒はにと尖頂け白がほに下つた時、手拔して他に着手すればよい、又白がはに夾まずにへにあてゝ來たならば黒はとに粘ぎ、白ち、黒り、白ぬと打てばよい、白が初めへにあてゝ此の手順に運んだのは、先づ自己の眼形を造つておいて後にる方面から黒を攻めやうとの意を含んでをる、

茲で黒が注意せねばならぬのは、最初白がへと來た時にとあてゝ白をるの點に粘がすといふ事はよろしくない、何故なれば、黒若し自己のとの粘ぎに先んじてにあてたとすると、其時黒るの點に粘ぎ、黒退いてとに粘ぎ、白ちに截り、黒りにあて、白をに黒一子を提り黒わと下る手順となつて後手とならねばならぬ、之を手順を更て言うと、白へ黒と白ち黒り白ぬの時、更に後手でわに下つた

と同樣の結果となつたのである

即此の黒からにあてるといふ一手は益なくして却て害のある手である、要するに本圖黒七と飛べば此隅双方とも互角である

（參考圖）前圖黒七の手で直ちに圖の通り七と尖み頂けるのは宜しくない、其の結果は圖の通りの手順となつて、只白を堅固厚壯ならしめるの外何の所得もない、本圖の樣な場合に黒十七の手をに打つかろに打つか容易に斷言が出來ぬ、乃で右二點の何れへか黒が着手したものとすれば、次に白はにに打つて黒三を攻める手順であらう、



第四十七圖

參考圖

（互先定石）

（第四十八圖）本圖以下は「一間夾返し」の定石である、本圖白四は前圖迄とは全く態度を一變して、黒三の謀を討つて逆襲に轉じたと同時に、右側に地域を造らうといふ趣向であるから、白は此く四と夾返す前に能々右下隅布石の關係を調べた上で打たなくては意外の不利を招くの恐がある、何故なれば、白が此く四と打つた上は（勿論黒の應手にもよるが）先づ普通黒五白六と押し八の邊に白の手の運ぶ事を豫想せなければならん、然して其の八と打つ一子と右下隅の布石とは如何いふ關係が生じるかといふ事を研究して見て、若しも右下隅布石の關係が八の邊に白が石を運ぶに不利であると考へたならば溯つて四の夾返しから更めなければならぬ、

（イ）四の夾返しが利であるか少くとも差支ないと見る可き右下隅布石の姿勢は

白いはと高締の時、白ロ印黒とろの點とに高締の時、ロ印黒に對する口印白の掛りのある時。

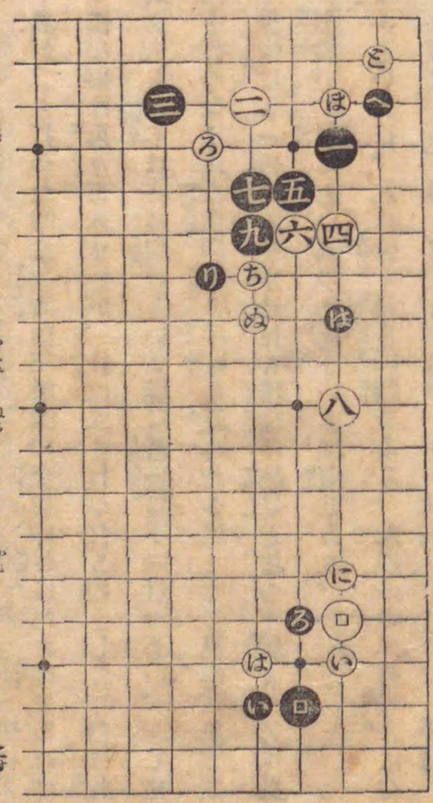
（ロ）四の夾返しを不利と見る場合

黒ちの白いの交換のある時、白が口印黒の點から口印白へ小斜走若くはにへ大斜走締りのある時。

「註」此の利害兩樣の姿勢は主として白八の一子との關係であるが其の理由は已に幾回か詳述してある理論を綜合して得た智識を以て了解の出來る筈であるから特に説明を省略する、

黒五の手は極めて必要である、若此所を手抜すると直に白から此の點を一手で鎖され黒白の形勢忽ち一變するの患がある、

黒五の時白六と押し次で黒は七と行びるのが通形であるが、黒は此の七の手でろの點に圍ふ手も無いではない、が後に至つて白からほと三々に頂けられ黒がへと綽ねた時とに二段綽をされる味がある、然し黒がろの點に打つたとしても、白が直に隅へ打つとは限らぬ、先づ八に拓いておいて後に九の點に行びキッて八の方面を充分厚壯にして置て絶ず隅の味を殘して打れるのが黒に取ては頗る苦痛である、モ一つろの點に圍うた黒から不便を感じるのは九と綽ぬ白ちの時りに二段綽の出來ないといふ事である、



第四十八圖

黒が九と曲つたのははの打込を狙つたのと兼て白二がろに尖んで逃出さうといふのを拒いだ手である、

本圖黒九の次に白十の手を何れへ打つかと言へば、先づちと綽ぬ黒りと綽返した時ぬに行びておく位のものである。

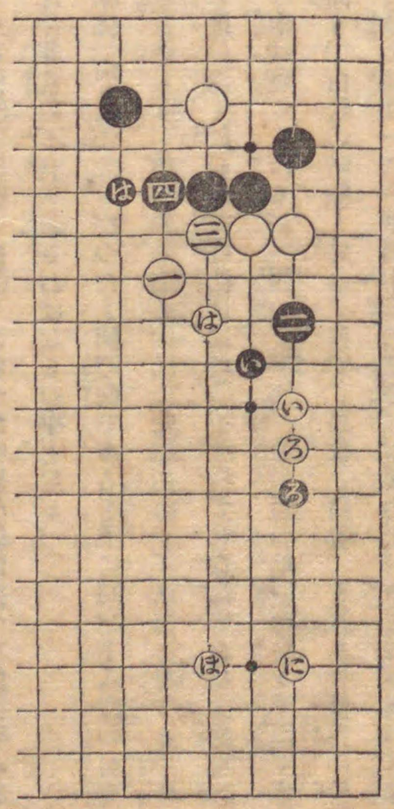
問、圖の樣な場合に白二は最早遁出す事は出來ぬであらうか

答、尙隅に多少の味が殘つて居るから、時機を待つて白は手段を講じるの餘地がある、然るを今直ちに露骨に逃出したり活を計るのは策の拙なるもので、反つて失敗の基である。

（第四十九圖）本圖は前圖白八からの變化である、白一が此く中原に向つて斜走したのは、黑に三の點へ曲られて壓迫を感じるのを防いだ手である、黑が之に對して二と打つたのは白一の一子を愚に歸せしめやうといふ手である、已に黑から二と打たれた以上は白は三と押すより外好手段はない、乃で黑は自然の順序として四と行びて一子の白が逃出す途を全く閉塞して終つたの（假令隅には尙多少の味が殘つて居るにもせよ）である、今此の部分だけに就て見ると黑の方が多少活動いて居ると言はねばならぬ、即ち白一と黑二との交換は白の方が不利といふ事になる、何故なれば此の塲合に於ける白三黑四の交換は避く可らざる必要の手である、其で最初白が一の手で三と押し黑が之に應じて四と行びたものと見て、次で黑が二と打つた時（勿論白三黑四の交換の行はれた後であれば黑は此く白の壁に接近して二と打つ樣な事は萬々あるまいが、假に二と打つたものとして）白は此の處を何う應接するか、先づはに飛ぶとも恐くは一に尖むといふ樣な緩慢な手は打つまい、して見ると最初に白が一と斜走して黑が二と打つた手は前述の通り手順を更へたものとして見れば白三黑四の交換後黑二と打ち白に命令して後慢なる一の尖みをさせたも同樣の結果となつて居る、乃ち此の所黑白四着の交換は黑の方が多少活動いて居るといふのは此ういふ理由である、然らば白一は打つ可らざる手であるかといふに、之は全く塲合問題である、此の一の手の可否は右下隅の布石關係からして判別しなければならぬ、即ち右下隅にほと白の亭締りのある樣な塲合で

あれば無論此の一の斜走は良い手である、其故は次に白がい若くはろと夾む手が右下隅からの拓きを兼ねた大塲の占領であるからである、之に反して右下隅にほの點に黑が高締して居る塲合であれば矢張り前圖の樣にいと拓いてをる方がよい、一の斜走は太だ面白くない何故なれば次に白がいと夾んだ所で、黑は右下隅にほの黑高締の勢力を恃んでとと尖出すか或はとと夾で打つか何れにしられても白は餘り芳ばしくないのである、

要するに白一は右下隅に黑の高締のある時は決して打つまじき事と心得てよい、然らば右下隅白高締りのある塲合で白が此く打つを利益と見て一と打つた時に黑は二の手を何う打つたならばよいか、其の時はとと飛んでおいてもよいが、二と打つたからとて決して惡ひといふ譯はない、何故なれば右下隅布石の如何に關せず白に三と打たせた以上は二の一子は活動いた譯である、唯後に至つて二の一子を捨るか助けるかといふ事を考ればよい、強て此の一子を逃出さうとして益々下方の白を厚壯にする樣な恐のある時は輕く捨てるが上策である、已に既に此の一子は相當に働いてをる上に今捨るとしても、之によつて白を牽制して尙多少の代償は得らるゝ譯であるから棄たとしても決して損といふ譯はない。



第四十九圖

（第五十圖）圖の様に白が一と廣く拓くのは、黒から二と曲られた時三と綽ね、黒四白五、黒六、白七と自然の應接を經て此の處に地を造らうといふ趣向の時であるが、若し右下隅に黒ほ白ろの交換がある場合であれば白一の一子は一層好點である、何故なれば一の一子は黒に對する三間夾を兼てをるからである、然るに右下隅に黒ほ、白ろの二子の布石があるに拘はらず、白が一の手をいに三間拓するのは頗る緩慢である、又前圖の様に白一の手を以つて四の點斜走するのは甚だよろしくない、何故なれば、右下隅に黒ほ、白ろの布石があるにも關はらず白が四の點に斜走して來たとせば黒は㋐に打ち白二の點に押し黒にと行びた時、白がい若くは一の點に夾んだとして黒は例の黒の目外を利用しろの小目を壓してはとかけ白へ、黒と、白ち、となつた時黒はりに打つて白を攻める事になると、白は其の應手に苦しんで非常の不利を犯さねばならぬ事となる、

（第五十一圖）本圖黒二と打つた意味は（前々圖）二、と打つたと同趣向であると共に四以下八迄の自然の調子を以つて下側に大規模の地域を造らうといふ手である、已に此の二の一子は白に對する一種の牽制策として打つた子であるから黒が六と綽ねた當時已に二の一子は捨てた意味である（勿論時機を得たならば動かうといふ幾分の味は殘つて居るが）隨つて下側一帶の黒の地域を益々手厚くするため、白が九と掛粘いだ時ろと曲り、白はの時にと綽ね、白ほ、黒へ、白と、と運んで豫定の策戰を遂行するのも敢て惡くはない、然し其は一に右下隅布石の關係によるので、若も右下隅の狀態

が黒六以下の手順を運んでも大した利益を收める見込がない場合は、六と綽る手で單にりに行びておくがよい、然すれば此處白も堅固になつて居ないから何とか應じておかねばならぬ、白若し九に單關したら黒はりに打つて二の逸出を謀るがよい、白若黒からりに來られるのを不便と考へた時は九に冠する手でりの點に尖んでおくかも知れぬ其時は、黒は九の點に單關し、白亦りの點に頂けて盤つておく外はないのである。（以下次頁）

第五十圖

第五十一圖

（互先定石）

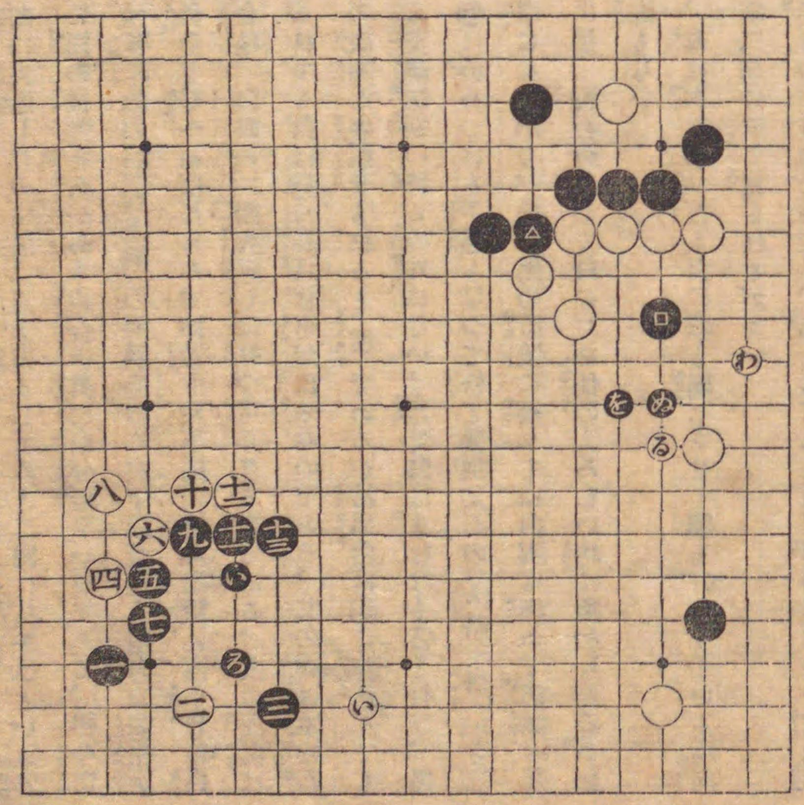
問、本圖の樣な場合に口印黑を逸出す手段として㋺に打つ得失如何

答、黑㋺に打てば白はるに押し黑㋩を行びた時白はわに盤つておけばよい、塲合によつては此ういふ黑の逸出すのが必しも惡いといふ譯では無いが、元來△印黑に綽ねた當時已に此の口印黑一子は捨てた趣向である然るに今此く堅固な白に密接して然も全く根據のない子を逸出すといふ事は常初の趣向と矛盾する計でなく其の結果は諸方面に惡影響を及ぼして非常に不利を招くに終るから戒む可き事である。

（第五十二圖）本圖は前圖迄七の點に尖んで打つた手を一歩進めて五と頂けたのであるが此く打つた以上七と引き九と綽ね十一、十二と行びたのは必然の手順で、黑としては此く運ぶより外別に手段も變化もない、此の一局部に就て見ると黑は非常に發展して居る樣であるが、其の實本圖の樣な打ち方は大局から打算して多くの塲合餘り實利はないのである、强て本圖の樣な打方の尤も適當と考へられる布石關係を言ふと、右下隅及左上隅、黑の大締りでも行はれて居る塲合でなければならぬが、さういふ事は殆んど望む可らざる事である五以下十三迄の黑は一見雄大な形を造つて居る樣であるが實は虛勢である、何故なれば隅には白の利益になる味が殘つて居る其の上に絕えず白にいから打たれる理ゝ覗はれて居る、∴其で今黑の造つて居る形は、實際幾何の利を藏して居るかゞ疑問である、若も右下隅の布石が白でいもあつた時はいの夾が益々酷しくなる譯で其の結果は慘憺たるものであらう

問、黑九の手を㋺に單關して居る定石を或書にて見たる事あり利害得失如何

答、斯る緩慢な手は、最初に五と頂け七と引いた手を無視する樣なものである、今㋺飛ぶ位ならば寧ろるに尖み白を圍うておく方が頗る優つて居る、黑㋺に飛び白に九の點へ行びられた時黑は果して何う打つか、尙一着此の所を始末せねばならぬではないか、して見ると黑㋺の惡るいといふ事は一見して判る筈である。



第五十二圖

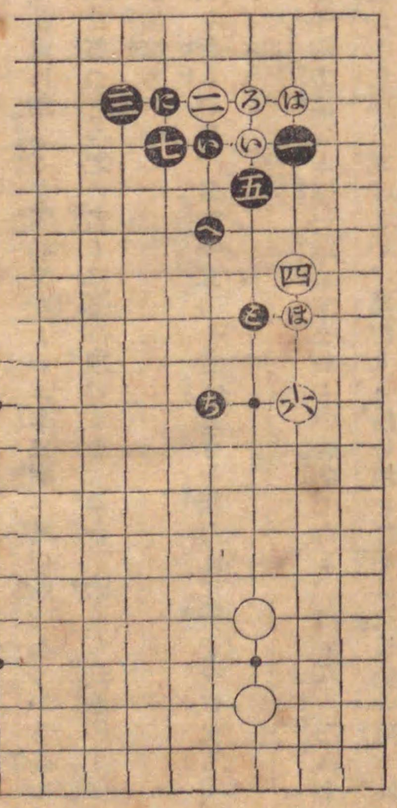
（互先定石）

（第五十三圖）「二間夾返」白四と二間に夾返したのは黒に五と尖まして六と二間に拓かうといふ初からの趣向であるから、若し右下隅に圖の様な布石がある場合は眞に申分のない手である、扨今迄は定石の詳解に布石關係を説く時分は多く此の隅（右上隅）の隣隅である右下隅及左上隅との關係を説いたが、本圖は更に左下隅との關係をも考へねばならぬ、即若も左下隅の例の七點（兩小目兩高目兩目外及星）に黒の布石のある場合は、白四の二間夾返しは打つ可らざる手である、其の理由は黒から五の手を以つて直にいに頂けられても白はいに綽込む事が出來ぬのである、其の譯は本定石「一間夾手拔の部」及第十五頁參考圖の説明を參照せられると明であるが結局白はいに綽込んでも黒いの一子を征に提る事が出來ぬから支離滅裂に終るの外はない、乃で白は止むなくろと行び、黒がいの點を粘ぎ白はに押した時黒にに極めつける手順となつて恰ど置棋定石の「大斜走掛」から三々へ打込んだ時と同じ結果を呈する事になるから、此く黒の堅壁に接しては白四は極めて活動のない手となつて居る、但し左下隅方面に黒の布石がなくて白のため征のよろしい時は黒から五の手を以つていに頂ける事が出來ぬは云ふ迄もない、

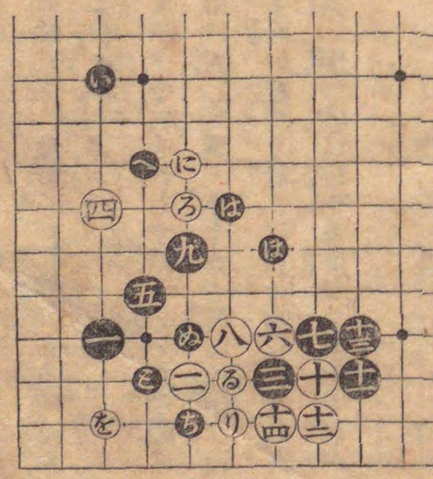
黒七の手を以つてへと打つ事がある、其は次でとに打ち白にほと應じさせてちと打たうといふ趣向の時であるが、其の詳解は布石三子第二局に就て見られるがよい、

（第五十四圖）白六はいの點へ二間拓するのが普通であつて、此く六、八と頂け引いて二の一子を急

に救はうとするのは些少無理である、然しながら若も左上隅に堅固な白の布石があつて黒にいから四の一子を攻められても左程苦痛を感じぬといふ場合なれば圖の通り打つても敢て惡いと言ふ事はない、黒九が斯く雁行したのは後にいから攻めて、白ろ、黒は、白にと自然の手順を運んだ結果はに掛け粘いで白中原への出路を閉塞しやうといふ意である、然るに黒がいから攻める手を以つて單にはに飛んだならば、白にいの點に拓かれる事となるから黒九の一子は、さ程働かぬ事となる、然し黒は必ずしもいから攻めるのみとは限らぬ場合によつてはへに掛けて白を低地に壓迫しやうといふ打方もある、圖の通りなつた後黒からはに尖み頂ける手もある是に非常に大キイ手で、白若し



第五十三圖



第五十四圖

手拔きすれば黒はちと綽ね、白り、黒ぬ、白る、となつて隅に於ける黒の實利は確になる反比例に白は根據さへ怪しい事となるから白は黒がとと尖つけた時ちの點に下つておくがよい、然らば尙白からはをに飛んで隅の地を削る味も殘つて居るから相互得失の差は非常なものである、

（互先定石）

（第五十五圖）黒五の斜走は普通の手では無い、敵を紛らかして打たうといふ趣きの手であるから白としては試みる事もあらうが、黒としては矢張り前圖迄の樣に㋑一尖んでおくが穩當である、本圖は若黒が此く五と打つて來た時は白は何う之に應じるかといふ事を示す、

白が六と頂け八と膨らんで隅に味を殘しておいて側面へ轉じて十、十二と押し十四と拓いた手順は一分も隙のない打ち方である、白が此く右側に地域を造つたのに對して黒も亦十五と綽ねて隅に白の根據を奪うたのである、然しながら隅の白には尙㋺と抑へる味が殘つて居る、白十六は必ずしも打たねばならぬといふ手でもないが右側の白を手厚くすると共に隅の㋺に抑へる味をキビシク利かす手である、

其で白は時機を見て㋺に抑へ、黒又此處に切爭を開始するといふ事は耐へ難い處であるから必ずはに粘ぐであらう、然る時に白は㋩に打つとも㋭に若くは㋺に頂けるとも場合に應じて任意の手段を講じ黒を牽制して利を占める事が出來る、

要するに先着の地點で此く黒が不利を蒙るのは、最初の五の一着宜しきを得なんだ弊を受けたものである。

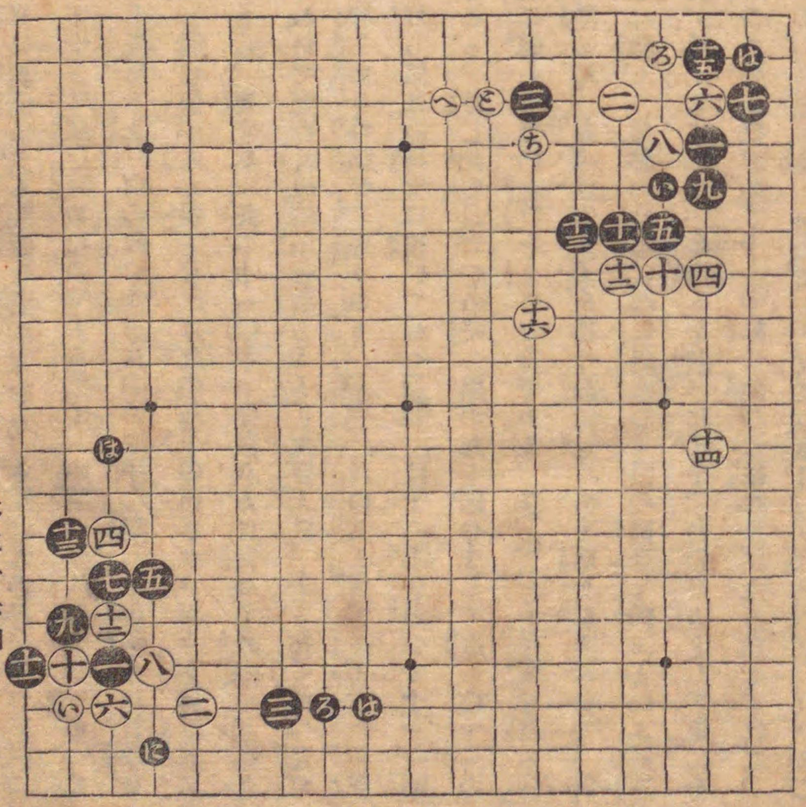
（第五十六圖）黒七は前圖の樣に白に十四方面に地域を造らすまいとの趣向である、白が八と膨み十とあてた二着は㋑の點へ下る手を働かした手と見てよい、黒が九と掛け粘いだ手は次に㋑の點へ綽

ねて白の根據を覆さうといふ意を含んだ手筋である、

問、白八の手を㋑に下つては如何

答、若黒三が㋺の二間若くははの三間の塲合ならば㋑に下る筋もあるが、圖の通り一間夾の際はにに置かれる筋があるから㋑の下りは斷じてない

黒十一と綽ねた時、白若し㋑に粘いだならば、黒は十三と綽ねる手ではに夾んで打つがよい



第五十五圖

第五十六圖

（互先定石）

（第五十七圖）前圖は白隅に活を計る爲に右側に大不利益を蒙つたから、本圖は之の弊を避け、隅に着手する以前に先づ六、八、と押して十と地域を定めたのである黒十一の手は堅固な着手であつて白から隅に手段される一味を幾分消して居る上、白の四、六、八、の三子に對して少からぬ打擊を與へて居る譯である、何故なれば後にるに黒が曲る事となれば此の三子の白はダメヅマリの狀態に陷つて勢力が頗る薄弱となるからである、要するに此の十一の手は黒白双方に向つて此の一局部の要點である、其で白が隅を閑却しておいて先づ此の地域を造らうとした以上は、十と拓く前に先づ十一の點に曲つておかねばならぬ、即ち曲る時機が二通りある、「第一」は白八と押す手で十一の點に曲り黒にはに應じさせて次に八と打ち黒九の時十に拓いておく「第二」は十の手を以つて十一の點に曲つておき黒はの時十に拓くのである、然し此の「第二」の時に黒が九と應せずして直ちに十一の點に抑へたならば、其時白は九の點に綽ねて黒の鋒を止めるのである、又「第一」の手順を運ぶ内にも白は必ずしも十と拓くのみとは限らぬ、其は二の一子をはの點に逃げ出す筋を見ておいて、白四、黒五、白六、黒七、白十一の點に曲り、黒はの時單にほに斜走して黒の應手を問ふといふ打方もある、以上三種の應接は何れも白が黒からする十一の抑へを避けた手で、白の打方として黒に十一を抑へられるゝに比しては遙に勝つて居る白が此く十一の點に曲つた後ほに斜走したとすれば、黒は果して何う應じればよいかといふに、其は單にぬに飛んで白二の逸出しを防いでおくか、或は

ると打ち、白に八と應じしめて九に行びておくかの二通りであるが、此の内るに打つ意味は已に五十一圖で說いた通りである

問、本圖白十、と拓く手でいに頂け、黒がはと應じた時にと膨み黒がほに引いた時十に拓いておけば第五十四圖と同樣の結果になつて白は利益ではないか。

答、此の場合なれば、たとへ白十の手でいに頂けて來ても黒は決してはに應じない、鬪せず焉として十一に抑へるであらう、其時白にに膨んだならば黒はへに掛粘くが最良の手である、此のへの一着は一方隅に向かつてははに綽ねて隅の白の根據を覆す手である、と同時に右側方面に向つてはりに綽ねて四、六、八の三子の白の効力をゼロたらしめる烈しい手である乃で其の手順は前「第五十五圖」と大差ない、即ち白い、黒十一、白に、黒へ、白と黒ちと綽ね、白若しはの點に粘けば黒は十の邊から白を攻る、白若しはの點に粘がずはの點に黒の一子を提らばりに綽ねる此くなつては白は六、八と三子行びてあるだけ却つて重くて惡い寧ろ前圖の樣に四の一子單獨であつた方が輕くてよい。

第五十七圖

（第五十八圖）黑七は前圖の樣に白に七の點に押されるのを嫌つて、白の行びやうといふ點を奪つて激しく七と綽ねたのである、乃で白は又黑から抑へられやうといふ要點を奪つて八と曲る黑に九と引かせて十と綽ね十一と押したのであるが、白若し八と曲る手で十の點に綽ねたならば黑は八の點に抑へキルがよい本圖は「第五十二圖」と殆んど同形同意である、彼に在つては本圖の四がろに掛粘がれてあるといふだけの差である、圖の通りの結果となつた後に、白からいに頂け若くはほに夾む筋のあるのは「第五十四圖」の詳解と同意である、尙本圖隅に殘つてをる味は、白は時機を見計らつてにおくがよい、其時黑ほに押へたならばへに引く迄であるが、黑ほに押へずへの點に白の歸路を遮つたならば、白はほの點に行びるがよい

「註」白に、黑へ、白ほ、となつた時、黑若しとにおかば白はろとあて込む筋がある、乃で黑がりに引けばぬに截り、黑ぬの點を粘げは白はりの點に抑へる。

以上「二間夾返」の定石六種の中に就て「第五十三圖」の白四が二間拓をせず六と頂ける手段は無理である、「第五十四圖」以下黑が五の手を以つて一の一子から尖まずに白四の肩側へ斜走するのも黑としては感心した手ではない、然し此の一間夾は互先定石である、隨て一隅の應接が黑から始まるものとのみは限らぬ、若し白が先づ小目に據つて居る隅へ黑が「目外」の點へ斜走に掛り、白が之を一間に夾んだとすれば、今迄譜に示す所と黑白全く地を更へる事となる、其で研究者は宜しく本圖の通りに盤面に子を下して充分研究された後、更に黑白地を更へ或は隅の向きを更へて繰返し咀嚼せられん事を希望するのである、上述「第五十四圖」は黑が五の手の弊を遺憾なく曝露し白は又得意に打廻した手順になつて居る、「第五十五圖」は黑が手段を更へて前圖白四の策戰を破つて居る、「第

五十七圖」は稍四の趣向を遂げた觀があるが、尙多少弊を受けるの傾があるで、該圖の終りに詳述した手段を實例の上に現はし得たのが「第五十八圖」である黑先着の處であるに關はらず此右側に白の領域を確定させて而も何處迄も隅に味を殘されて居るといふのは全く黑五の餘弊と言はねばならぬ、

然しながら棋は多く塲合問題である、否殆と凡が塲合問題である塲合を離れて應接の可否を斷定する事は容易でない、之は繰返し注意しておく必要がある、

注意要項をば更に綜合して茲に參考圖（右下隅）を以て示さば

第五十八圖

參考圖

「對角隅即左上隅に黑の布石ある時は、白にに綽込む手なし」

●黑の立塲より言へば、白よりにに綽込まれる筋ある時はいの一間夾及ろの二間夾の時、黑はいに頂けまじき事

但しはは三間夾の時は白より綽込の有無に關せずいに頂けて差支なし

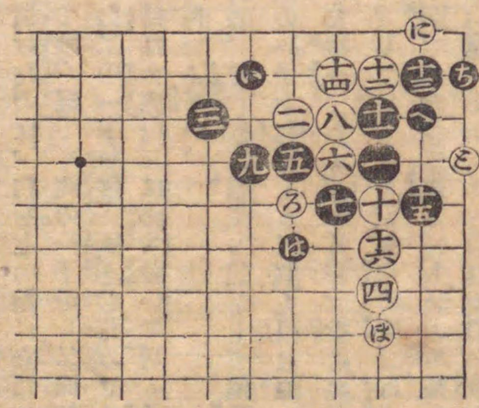
○白の立塲より言へば、黑にいと頂けられた時、にと綽込む手の無い時は、い一間夾ろ二間夾は三間夾共に惡し、

（互先定石）

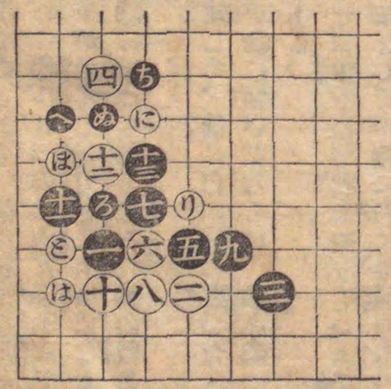
（參考圖）前圖の終に注意條項として記しておいた『一間夾返、二間夾返』の塲合白から（本參考圖）六の點に綽込まれる筋のある時（勿論白が夾返した時は此の綽込の筋のある塲合に限るといふ事を繰返してある）は五と頂ける手は悪いと言つておいた、で今茲に參考圖を示しておかう、即黑が九と行びた時直に白に十と截られる是が致命傷である、其時黑十一と行び、白十二と綽ね、白十三と綽返し、白十四に粘ぎ、黑十五に綽ね、白十六と行びて二間夾返しの四の一子と連絡する、乃で黑が若し白の眼形を奪うために㋺に尖んで來たならば白は直に㋝に截つて七の一子を征にかけて提るばかりである、其で黑は㋝の截を防ぐために㋩に掛粘がねばならぬ、次で白から㋚に綽ねられ、黑㋫に粘いだ時㋭に置かれて萬事休する譯である、處が、若し三間の塲合であると、白四が㋯の點にあるから㋝に截られる患がない、隨て白から十と截る手もない譯である然るに尙白が無理に十と切つたならば本圖十六の手迄の通りに運び、黑は十七の手で㋺に尖むがよい、然すれば「眼有眼無」で此隅白の敗滅は言を待たぬ（黑㋺の時白㋚に綽ねたならば、黑は㋩に下つておくがよい、若過つて㋫に粘いだならば、白に㋭におかれて十五の一子を先手で提られる、若し應手を誤れば刼爭となる樣な不利を招かねばならぬ）是が三間夾返の塲合に限て黑からは五に（白綽込の手の有無に關はらず）頂けて差支ないといふ理由である、

（第五十九圖）『三間夾返』黑十一の手は「布石互先第二局第十六頁第十四行以下及本定石手拔の部」に詳述した通り㋩の截味を消さうといふのと㋩に綽ねやうといふのと二通りの意味を含んだ所謂手筋である、

白十二は黑に㋝に粘がせて㋩に下らう即ち十一の一着を愚に歸せしめやうといふ手である、乃で黑は白の謀を破つて圖の通り十三と打つがよい、其の時白が㋩に下つたならば黑は㋚の點に行びておけば其は白に㋝の點を截して㋯からあてやうといふ趣向で、已に白に㋩に下られた以上黑一の一子は何時捨てゝも惜うない、寧ろ四の一子を浮して此の方面に雄大な勢力を造る方が非常な利益であるからで、若㋩に下らずして㋝の點に截つたならば黑は㋯に當て込み白㋭、黑㋫、白㋭となつた時㋩に綽ねておいて充分の結果である、白若し前二通りの打方に出でず㋚に綽ねて來たならば、黑は㋭の點に行びておくがよい。



參考圖



第五十九圖

（第六十圖）本圖は前圖の繼續圖である、白がいと覗くのは策のある手であるから、黒は警戒を加へてろと應じるのは良い手である、此の形の時に白が先手を取らうためにこに打つのは太だ不利益である、何故なれば黒を堅壁ならしめると同時に折角夾返した白の一子が殆んど効力を失ふ事になるからである、乃で白の打ち方として最も無難なのは、後手を忍んではに下つて居て徐ろにちの截を狙つてゐるのがよい、

白が單にはに下つておいて、黒が此の所を手拔して他に轉じたと假定して、後に白がいに覗いたとすれば、黒は其時如何應じたらよいか、其はにと覗き返して若も白がほに粘いだならば、黒亦へに粘ぐといふ即ち敵を重くして自らは輕く打つといふ打方がよいのである、

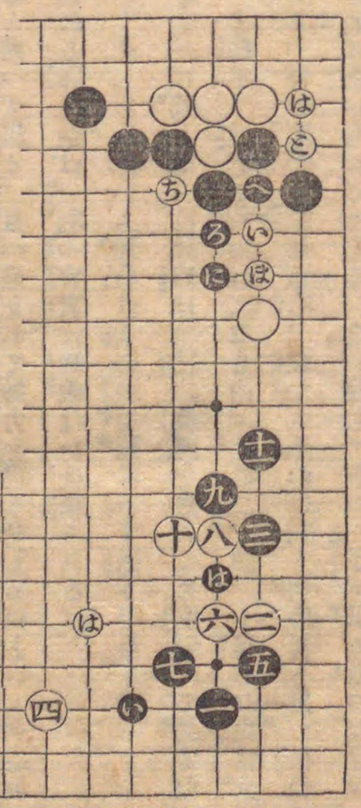
（第六十一圖）圖の通り黒が五と尖み頂けたのは、白を七の點に立たせて重くして攻めやうといふ手段であるから、白も亦其の策を避けて輕く棄てゝ四の一子から二間拓をして中側に別に地域を造つたのである、乃で黒も亦七と打つて白二の一子を確に擒としたのである、

問、黒が五の手で七の點に頂けた時は大底白二は必ず動いて居る樣である、然るに今黒が五と尖み頂けた時輕く之を棄てたのは如何いふ譯か、

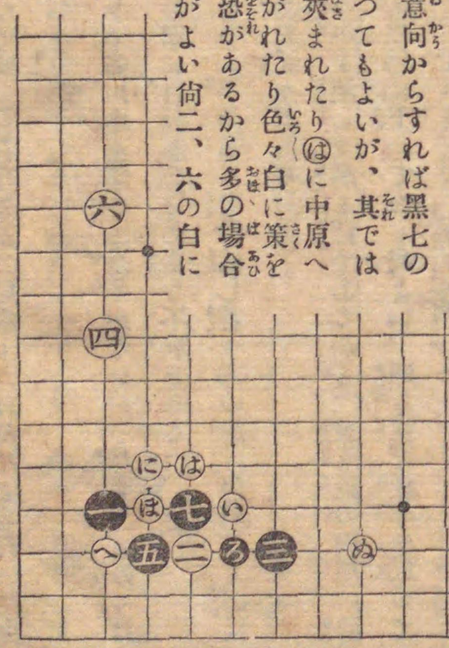
答、本圖の結果は尙白からいに綽ね、更にはに當てゝ黒をして餘義なく二の一子を提らせるといふ味が殘つて居る、つまり白は二の一子を捨てゝも手割上損は無いといふ事になる、然し之れが黒から五の手で七の點に頂けられた場合であるとすると、次に黒は決して五と抑へる譯はない、必らずろの點から抑へるであらう、して見るとヨシ多少の味（即ちにに覗き黒が手拔したならばほと突出し、黒五の時へに截る手順）が殘つて居るにもせよ本圖の五と先づ尖頂けた其の結果に比べては非常な差であるから、白はろの點から抑へられるのを嫌うて、先づ七から頂けられた時

は必ず二の一子を動いて隅に活を計るのである反對に、五と尖頂けられては棄ても惜くはない而も其の代價は四、六の拓きによつて十分得て居るといふ意がある。

（第六十二圖）白が四と夾み返した時單に黒が七と尖むのは緩い何故なれば、後にヨシはに圍う手があるにもせよ尙ほ白からは隅に色々味が殘つてゐる、隅に味があるとすると勢黒は堅固になるとして見れば（四其から六に拓く）白が三間といふ遠距離にあるだけ白の利益であつて其と同時に黒の不利益である事は言ふ迄もない黒五の時白が動くとすれば先づ圖の樣な應接であらう、隅を治まらうとの意向からすれば黒七の手をいに打つてもよいが、其では十一の點に夾まれたりはに中原への出途を塞がれたり色々白に策を弄せらるゝ恐があるから多の場合此く打つ方がよい尙二、六の白に對する攻擊も烈しく利くである。



第六十圖



第六十一圖

第六十二圖

（互先定石）

（第六十三圖）「手拔定石」此の條を研究するに當つては（布石互先第二局第十六頁及互先定石一間夾三々頂第十四頁、同三間夾返第六十圖）の説明を交々參照せらる可し。

對隅に黑の布石があつて、黑一の一子を征に提る事の出來ぬ場合は是非がないが、然らざる限りは白は是非共二と綽込まねばならぬ、是の手で單に四に行びるのは非常な不利である、

○黑七が手筋である事○白八は先手を取らうといふ手である事○然し若し㋺の邊に白のある時は八とあてるのは宜しからざる事等は屢々詳述した通りである、

白八とあてるのは先手を取るために少なからぬ不利を犯して居る譯であるから、若も此の處黑の勢力を旺盛ならしめぬやうと思ふならば後手を忍んで㋑に下つておくがよい、即ち茲で後手を取つても隅の白は大丈夫であつて㋩の截味も殘つて居る、且つ黑をして勢力を逞うせしめぬといふ利益がある、（其の代り黑に一手大塲を打たれる譯で是は一利一害實に餘義ない次第である）

白が八とあてるのは黑の勢力を逞しうせしめるといふ理由は次の參考圖に示す通りである、

（參考圖）後に至つて黑から（機を見て）一に截り取られた時は、已に側邊を黑のため塞がれて居る白は自活を謀るため餘儀なく二、四、と後手で應じておかねばならぬ、（此の二、四、と應じた白は言はゞ被征服者である、降伏的活である、黑が右から來れば右、左から來れば左と何時でも黑の命のまに〳〵後手を以つて挨拶しておかねば活はないのである、之に反して白の一子が截り取つた黑は

黑先ニシテ
四隅ノ手ヲ
ルヘカラス

絶えず先手を以て自己の勢力を加へて行くのである、此の參考圖の樣な狀態になつて居る時には下側右邊に向ては白は容易に手を下す事が出來ぬのである、若し此の方面に紛爭が起つた時は、黑の方には多少の無理が利く反比例に、白の方は中々根據を造る事も勢力を張る事も容易でない、

其の理由は、黑は何時でも先手で㋩の「下キリ」が利くからである、此の手順は、黑先づ㋑に置き白㋺に尖み、黑㋩白㋺に黑㋩となつた時、白は八に活きて居らねばならぬ、要するに黑㋑以下は一〜着々白からの命令手である、此の應接にして一着を誤らば忽ち斃れるの外はないのである。

第六十三圖

參考圖

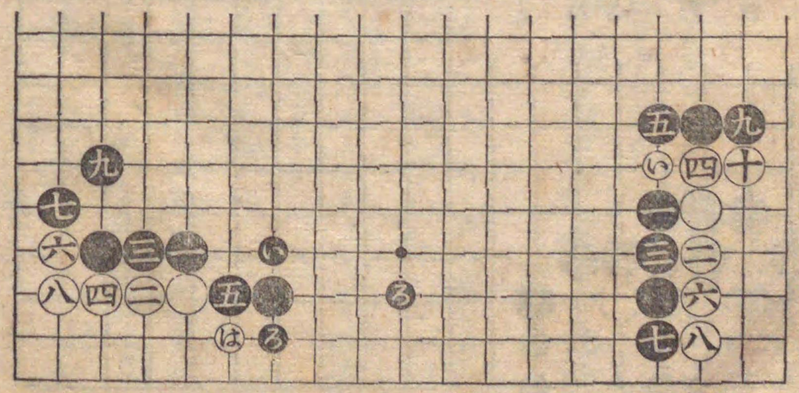
（互先定石）

（第六十四圖）本圖白二と行びるのは、對隅に黑の布石があつて白は三の點に綽込む事が出來ぬ（若綽込めば忽ち二の點を截られる）塲合、餘義なく不利を忍んで此く二と行びるといふ事は屢々詳述した通りである、黑五の一手は他に好い打ち塲所のある時は手拔きしても差支はない、其時白六に綽ね、黑七に抑へ、白八に粘いだ時、黑は五の點に突き當るか或は九に綽粘かといふ二途があるが乃ち黑五の着を手拔すると一間夾三々頂定石に戻る事となる。

（一間夾三々頂第七、第八圖說明第十二頁以下參照）

本圖黑の形は頗る厚壯である鞏固である、其の代り後手である、若も黑が先手を取る必要を感じた時は、五と衝當る手で六の點に下つておけばよい、其時白五の點に衝當つたならば黑はいに立ち白が八の點に押へた時、黑はろに下り白をしてはに應ぜしめて矢張り先手である、其の結果は次圖に示す所と全く同じである。

（第六十五圖）本圖黑七、九、の二着は手順として直に打つて置かなければ、白からいに出截りをされて非常に不利を蒙らねばならぬ、白十と抑へた時次に黑は（一局部即定石として）何れの點へ打つかと言ふにいの出截は敢て恐るゝに足らぬから、此の堅壁を利用して左星下ろと大塲に打つのが普通であらう。



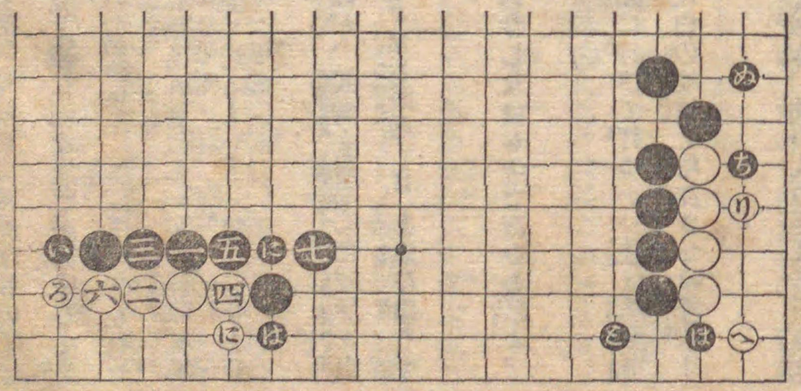
第六十四圖

第六十五圖

黑七ノ手ニ含ム意味

（第六十六圖）本圖は前圖に於て黑が五と立つた手から變化して五と抑へたのであるが、次で白六、の時黑七と掛け粘いだのには無限の味を含んでをる、黑七と打つた時白が一着を更に此の所に費やすとすれば普通であるが、若も白が手拔したとすれば、其際黑は何う打つか、假に之を本圖符號の示す通り、黑ぬに下り白ろに應じ、次で黑又はに下り白をしてにと應ぜしめたとすれば、黑七はにの點にあると殆んど差はないのみならず其の結果は、前圖ろと大塲に拓く可き手を以つて本圖にに堅く粘いだと一般で黑は太だ不利と言はなければならぬ、黑七は決して此かる平凡な終を見やうといふ手ではない、即ち次圖に示す樣な手順を運んで、七の一子に含む意味を遺憾なく發揮する事が出來るのである。

（參考圖）、白が手を拔いたならば、黑はぬと綽ね白がへと押へた時ちと掛粘がうといふ趣向である、要するに一方ではちに尖む筋を見てをり又一方ではぬに尖む筋を見てをる此の「兩尖み」を利かさうといふのが（第六十六圖）黑七の手に含む味である。



第六十六圖

參考圖

（互先定石）

（絶曰）前頁の終參考圖の中に「筋を見て居る」といふ一句がある、此の一句は實に甚深微妙の味を含んで居るのである、此の章を編して居る時に、座に居合はされた某棋伯（高段者）が感嘆して言はれるに、「成る程何うも調が緻密なものです！、兎ても尋常一樣の（無論棋家）者には及びもつかん譯です、勿論大ティな者にも此の形を見て此ういふ筋がある位は解らん筈はないが、實際戰局に莅んで此の味を遺憾なく運用し活用するの神算鬼策がなければ見て居るといふ一語は發せませぬ云云」と

我々淺薄な棋想では兎ても其の味の萬分一をも咀嚼する事は出來ぬが、強者と對局した時屢々出逢ふ此の（見て居られる時の氣味の惡さ、又た見て居る人の餘裕綽々たる面惡くさ）を思ひ出さずには居られぬ。

他日機を得て、本章尖み味のモ少し具体的な説明を請うて諸君に紹介したいものであると思ふ。

（第六十七圖）白六と綽ねた時、黒は七と隅へ曲つて打つか或はぬの點に行びて打つか、是は畢竟塲合問題である、若し隣隅に圖の樣な白の布石がある塲合は其の方面に白の地域を增加させぬ意味で七と曲る手を以つてはの點に行びる方がよい、

白が八と離れて打つたのはぬと黒に接觸して打つよりは多少活動いて居る、此の八の手は三子の白

黒七ノ手場合問題

白八ノ手注意スベシ

白ニノ付三子ヲ取ラスヌトハネル可ト云後段注意シテ見ルベキ

を助けて打たうといふ意である

其の手順は、黒いに粘いだ時（但し白八の一子が此く緩んでをるため黒は必ずしもいに粘ぐとは限らぬが若粘いだ時は）ろに掛粘いで三子を助ける運びになる

若白が三子を捨てゝ打つ趣向ならば、八と打つ手で直にはに當て黒は無論いに粘ぎ、白又にに押す手順となつて、次で黒がはに截れば白はへにあてる、黒若はに截る手でとに截らば同じくはの點に粘いで三子を捨てるか

第六十七圖

ら黒がりと提つた時白はちと單關するといふ結果になる

但し塲合によつては黒とと截つた時ろにあて三子の白を活きて打つ事も無いとは言へぬ。

然しながら黒の立塲から言ふと三子の白を提るといふ趣向は甚だ面白くない白は、黒いに、白にと押して來た時ぬに綽ね、白がるに綽ねた時黒又ちの點に行びて飽迄右側方面の地域を手厚くする策を取つてと、はの截味を何處迄も殘して打つ方が策の得たものである。

（石定先互）

黒一面白カラス

（第六十八圖）黒一は治りの惡い且つ緩い手である、

（絶曰）本圖以下三圖共黒一が面白くない手であるが坊間に流布して居る棋書に載つてあるためか同好者間にも往々實戰に用ゐて居る向もある樣であるから、研究のため特に其の應接の可否得失の詳解を師に請うたのである。

然らば布石關係からして此ういふ子を打つ必要の塲合があるかと言うに、さういふ塲合もあらうとは考られぬ、乃で此の黒一の一子のよろしくない事を調べるには解剖的に手順を更へて說明すればよく解る、其には之と殆んど同型の「一間夾斜走掛定石」の手順を應用して詳解する事としやう、

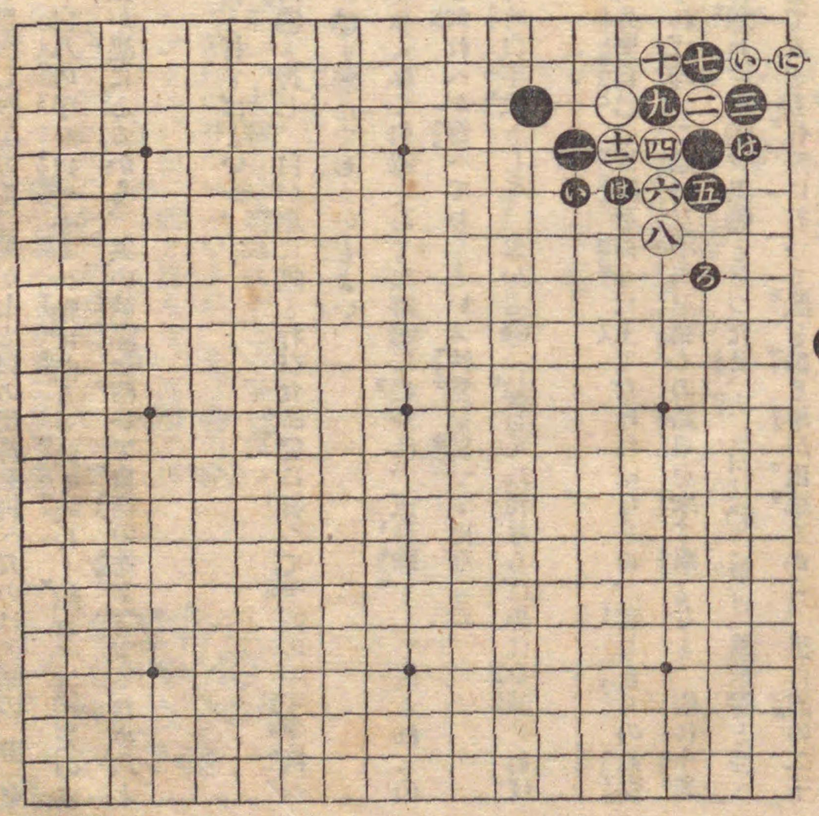
本圖白十二と粘いだ時、黒はろに飛んだものと假定しておいて、

溯つて、黒の一間夾に應じて、白は六と斜走に掛け、黒五に應じ、白八に行び、黒ろと飛び、白手拔きするとすれば、黒は普通いに斜走して白に四と打たせて黒は二と下つておく可き理であるを本圖に就て見るといに斜走する手を以つて九と尖頂け、白十と綽ね、黒七に抑へ、白四にあて黒十一（二の點）に粘ぎ（本圖は隅二線に黒三の一子があるが是は白の二と相殺して無いものと見て差支ない）白に又手拔きされ、茲でも尙いに斜走す可きを一と覗き、白に十二と粘がしたと同じ結果になつて居る、

即ち本圖と同型の「一間夾斜走掛」の塲合に（本圖）九に尖頂けたり一に覗いたりするのは極めて惡手

であるといふ理は直に移して本圖の應接を批判する事が出來る

然らば溯つて本圖白二と隅三々の點に來た時に、黒は（三々頂定石の塲合の樣に）四の點に行びたならば何うかと言ふに、其時は白九の點に粘ぎ、黒三に綽ね、白いに抑へ、黒ぬに粘ぎ白にに下り茲に此の隅の白は治まる譯であるが、後に至つて白から十二の點に突出され、黒はと抑へた時いの點の截りが酷しい譯になる此塲合にも、やはり黒はいに斜走にあるのが本理であるから、此の理違ひの黒一は何しても弊を亨けるのである。



第六十八圖　十　（二の點粘ぐ）

（互先定石）

（第六十九圖）本圖は前圖に比べると黒少し利である、黒が七と白の出鼻を抑へたのは包圍の勢を示して利を占めやうとの策である、白八の手を以て十一の點に曲らず此く烈しく綽ねて打つたのは十五、十三、十二、の三ヶ所の缺點が黒にあるから、其の缺點を衝いて自衛の途を講ずるため八と綽ねたのである、

問、白十六と下りキッた時黒は何う打てばよいか、

答、ろに截つて、白はに行びた時にと押し、白が更にほと行びた時へに打つて十四の一子を抱へておくか、或はろと截る手で單にりと飛んでおくのもよい、

此くなつた結果隅には黒からいと綽ねられて白ろとあてた時はに粘がれ、三目點として屠られるの恐があるから白たるものは尙一着を何れへか備へておくといふ注意を怠つてはならぬ、

問、黒がろにへ若くはりと打つた時白手拔きして、黒からいに綽ねられたならば黒は全滅せねばならぬか、

答、黒がいの綽を打つ前に、先づ外面自己の缺點を補うた上でなければならぬ、若し自らの缺點を忘れて急に隅の白を屠らうとすれば却つて意外な不利を招くの結果を來す事となる、假に今黒が強て隅二子を提らうとしていに綽ね、白ろ、黒はとなつた時、次に白はにに頂け、黒がほと抑へた時單にちに引くとも又はへにあてるとも任意に打つて眼を造る事が出來るから、黒は隅の二子

を提る暇がない、強て提らうとすれば之に代るより或はより大いなる不利を犯さねばならぬ。

（第七十圖）本圖の形は、白として餘り面白くないが、然し黒の方にも缺點がある、要するに此の一間夾手拔の場合は、黒二手を先んじてをる譯であるから餘程優勢でなければならぬ、然るに本圖の結果から見ても比較的好結果を呈して居らぬのは畢竟最初の黒一が原因をなして居るのである、

黒五の手は單に七に引いて打つ事もある、其時は白八に綽ね、黒ろに抑へた時、白は五の點を粘いでをるがよい、（是でも尙ふの截が殘つて形ちも味も極めて惡い、本圖の結果黒は十三の手を以つて何れに打つかといふに、先づはの點にグヅミ、白にろと提らせ、黒はと押し、白にへと抑へさせて、にと斜走し、白はへの截を拒ぐか、或はろとあて白にろと提らせてにに備へるかの二法である。（一間夾定石終）

第六十九圖

（第七十圖）

（互先定石）

互先定石「一間夾」の部（完結）

「緒論」▲特撰　計六圖

「三々頂」○正撰　四圖（第一、第五、第七、第八）

▲特撰外四圖、參考四圖、　計拾貳圖

「頂引」　○正撰　四圖（第十、第十一、第十二、第十四）

▲特撰外三圖、參考一圖　計八圖

「頂行」　○正撰　八圖（第十六、第十七、第十八、第廿一、第廿四、第廿七、第廿九、第卅一）

▲特撰　外九圖、參考一圖　計十八圖

「斜走掛」○正撰　六圖（第卅三、第卅四、第卅五、第卅八、第卅九、第四十二）

▲特撰　外五圖　計十一圖

「斜走跳出」○正撰四圖（第四十四、第四十五、第四十六、第四十七）

▲特撰　參考二圖　計六圖

「一間夾返」○正撰四圖（第四十八、第四十九、第五十一、第五十二）

▲特撰　第五十、五十一續　計六圖

「二間夾返」○正撰四圖（第五十三、第五十四、第五十五、第五十八）

▲特撰　外二圖、參考二圖　計八圖

「三間夾返」○正撰四圖（第五十九、第六十、第六十一、第六十二）

「手拔」　○正撰七圖（第六十三、第六十四、第六十五、第六十六、第六十七、第六十八、第七十）

▲特撰　外一圖、參考二圖　計十圖

通計　八十九圖　内正撰四十五圖

○正撰とは古來今日迄行はれて居る定石の中に就て（イ）普通行はれる形（ロ）往々若くは稀に行はれる形（ハ）場合に依つて行はれる形（ニ）對手の打着に應じて餘義なく運ぶ形等、諸種の見地からして師が撰定せられ若くは創定せられた定石である。

▲特選とは、師の説を敷延する上に就て、或は變化を叙するに就て、若くは坊間行はれて居る諸書の誤謬を訂すに就て、必要と感じた際、編者が圖を添へて其の利害得失等の詳解を師に請うたものである。（絶）

互先定石「二間夾」の部　目次

	自頁	至頁
「三々頂」……（十圖）……	八三	九一
「頂」……（二十五圖）……	九二	一〇七 大斜
「二間飛」……（八圖）……	一〇八	一一三
「斜走掛」……（十六圖）……	一一四	一二七
「一間夾返」……（九圖）……	一二八	一三三
「二間夾返」……（六圖）……	一三四	一三六
「三間夾返」……（十九圖）……	一三七	隅に接する石 一五〇 隅方
「手拔」……（二十五圖）……	一五一	一六六

互先定石

「二間夾」

三々頂

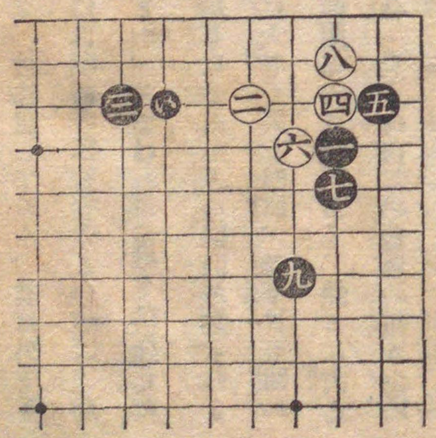
（二間夾とは黒三の子を指し、三々頂とは白四の手を稱す）

第一圖　黒一と小目に據り、白二と之に對して目外に掛つた意味や其の理由は、互先定石の緒論及一間夾の初に於て詳述してあるから茲に之を略す、

黒三は白の二間拓の點を先づ奪うて之を夾み攻めたので、此の二間夾と彼の一間夾とは何れ程の差があるかと言ふと、唯少し緩んでをるといふだけで、夾む意味に於ては太いした相違はない。

「註」黒三の手が❻に一間夾であると、本圖の様に二間夾にしてあるのとの差は種々あるが、極手近例を擧げていふと、一間夾の時であれば黒五の手で直に六の點へ行びて白を塗りつける事が出來るが、二間では少し緩んで居るから具合が惡いといふ様な事なども其の一つである。

（第壹圖）



『註』「黒三は白の二間拓の點を奪うて之を攻めた」といふ事に就て一寸注意しておく、其は外でもないが、此の言葉の反面を誤推せぬ様に、といふ一事である、白二間拓の點を奪ふといへば、此の白は黒から夾まぬ時は必ず二間拓するものかの如くに聞こえるが、其では豫て屢々講述した「目外の點からは何時でも廣く拓く事が出來る」といふ定義と矛盾しはせぬかとの疑問が起らぬとも限らぬが、其は決して矛盾した說ではない、彼の「目外」からは大きく廣く四間、若くは五間に拓くといふのは部分の定石といふよりは寧ろ大局に關する布石的關係の意味がある、然るに夾といふは多くは部分を主とした隅の定石の問題であるから、此場合「黒三は白二の普通の拓き場所たる二間拓の點を奪うて夾攻める」といふ意味に解せねばならぬと同時に、此の說の反面に「黒が若三と夾まぬとするも白が三の點に二間拓をするといふ樣な事はない」といふ事をも承知せねばならぬ隨て「白二からは何時でも四間若くは五間に任意に拓ける」といふ道理には毫も差支がないのである、尙殘說は餘論に於て述べる事としやう、

白四、黒五、白六、黒七、白八、の五着の意味は一間夾の初に詳解したと同樣である、

黒九の手は黒三と相待つて白を包圍する勢を示したのであるが、

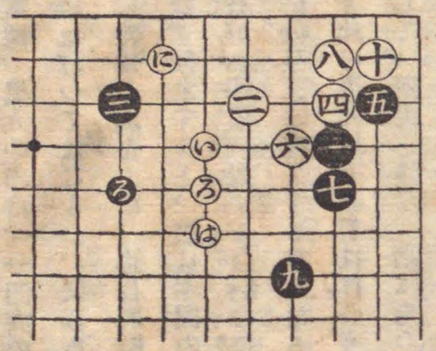
白十は必らずしも此く曲らねばならぬ事はない、白十を手拔して黒から此の十の點に根據を奪うて

手拔シテ包圍スベカラス

來た時、白はいに若くはろに打つがよい、白假にいと尖み、其時黒ろと單關して迫まれば白はぬに飛んでもよし、又場合と趣向とによつては手拔しても活はある、即黒からはを鎖された時にに斜走すれば活は十分である。

「註」白手拔して黒から十の點に押され、白い黒ろの時白又手拔して黒にぬの點を銷されにに走つて活るといふ事は、白は二手拔いて他に着手して居る譯であるから素人考には一見非常に利益の樣であるが然し此ういふ形になつては包まれた白は一隅に活きたといふ外、局面に向て何等の勢力もないに反して包圍した黒の勢力は盤面到る所に影響して居る、即ち此の偉大なる勢力と、手拔した二着の効果と相爭ふ譯故、さう旨い筈はない、乃で餘程の場合でないと此く手拔して包まれるといふ事は爲す可らざることである、（置棋隅三手拔と同論）

（第壹圖の續）



「補說」白十の手を手拔したとしても黒は急に此の十の點に押すとは限らぬ何故なれば此の十の點といの點とは見合つて居るので、白は十と根據から迫り出すかいと外から壓して隅へ十と曲らすか機を見て利益と考へた方に着手せねばならぬ急に形づけては却つて後悔する事がないとも限らぬ

第貳圖、黒九の手は、一間夾の時は大惡手、二間夾の時も先打つ可らざる手で、三間夾の時と雖も普通は打つてはならぬ、只極めて稀な場合特に打つ事もある、と記臆しておけばよい、

其の特殊の場合とは、場合問題即隣隅布石の關係を指すので、若右下隅に圖の様な高締の黒があるものと假定すると、黒は本圖の通り運でおいて㋺と星下の大場を占領する事が出來る、又右下隅の配石が△印黒に對する白㋩の掛りのある様な場合であると、黒は右上隅を本圖の通り運んで次に㋣に白㋩を三間夾とする手になる、

乃で此の黒九以下の手は打つ可らざる手といふ事は一間夾の時も同様であるが、若黒が此く打つたとして一間夾と殊なる點は此の黒三が(一間夾㋩に比して)白の堅固な數子に一路遠ざかつて居るといふだけ幾分か不利が少いとも言へる、

是は、若一間夾㋩の場合であると次に白から㋥と星下から攻められ、其の攻める白が左上隅方面に得る利益に比して、本圖二間夾三を白が㋩の點から攻める其が一路左に寄るだけ幾分白の得益が減じるといふ理由に基くのであるが、不利たる所以は則ち一なりと言はねばならぬ、

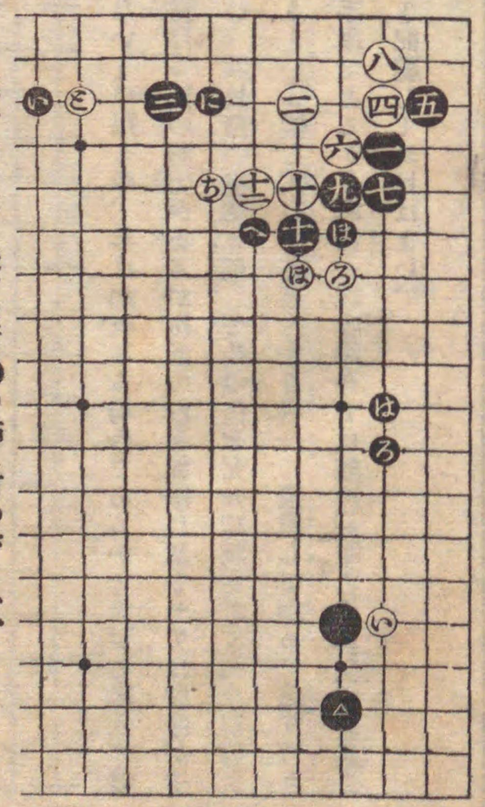
問、黒が本圖の様に九、十一と押すのは、一に右下隅布石の關係によるので、黒は必ず㋺若くは㋣の邊に子の運べる順序でなくては折角一隅に不利を犯して迄九、十一と押した主意が零になるといふ譯は判然した、と同時に黒三の一子が㋩方面から攻られるといふ事は免る可らざる事である、

然し(必ずしも初心者でなくとも)相當に力のある人士の中でも研究の足らぬ結果打つ可らざる場合に打つ可らざる手を下すとか、或は折角打つた子の効力を十分に發揮する事の爲し得ぬ様な場合が少くはないが其ういふ際に是が對手たるもの之を咎める手を知らぬため、往々敵の無理を成効せしめ所謂理に勝つて非に負けるといふ様な事がある、

此場合黒若㋺る方面に着手せず三より二間に㋩と拓いたと假定すると白は五以下の數子を如何にして攻めたならばよいか、

答、黒十一、白十二、黒㋭、白㋧の後、黒三が若㋩と拓いたならば、白は㋣と打ち黒に㋺

(第貳圖)



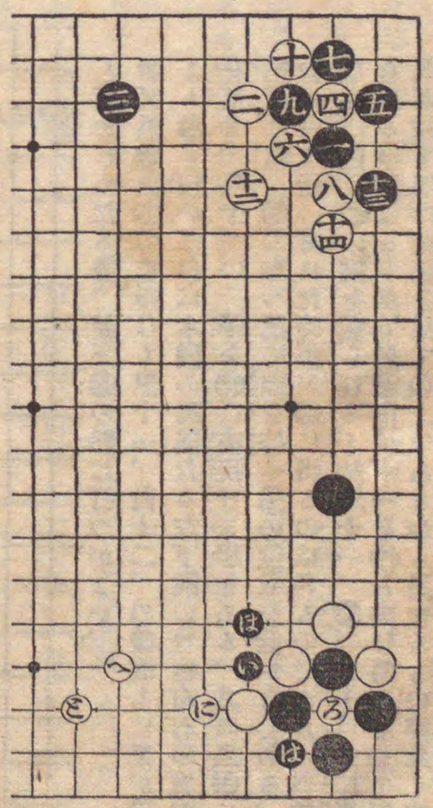
と應ぜしめたる後、星下㋺の點に打つがよい、

若又黒㋭白㋧の交換なく黒十一、白十二、の後直ちに黒が三より㋩と拓かば白は本隅の對隅たる左下隅の自他布石の案配を見て、黒十一の一子を㋺に夾頂ける事もある、其時黒㋺に粘げば白は㋭の點へ黒の頭を抑へ黒の位置を低からしめる、初め白に㋺に夾れた時黒が㋭に出るのは考ものである、何故なれば白に㋺の點を截られると結局十一、㋭の二子は征に提られる事になる、其で最初白が十一を㋺と夾む時からして對隅即左下隅の關係を見ての上であるから黒たるもの亦此く夾れた時は充分注意せねばならぬ。

(互先定石)

第三圖、本圖は一間夾第五圖及第六圖と殆んど同樣であるから彼の圖の說明を參照せられるとよい、兎に角黑七の手は惡手である、前第二圖の九の手以上の惡手である、若之を三種の夾に就て行つたとすると一間夾の時に此く打つのは大惡手である二間夾の時も無論惡い、唯三間夾の時は、前の二つに比べると稍惡さの度が薄い、

然らば絕對に此の手は打つ可らざるものであるかと言ふに其は極稀な場合即千百盤中に一度位此の打方の必要を感じる場合が



（參考甲圖）

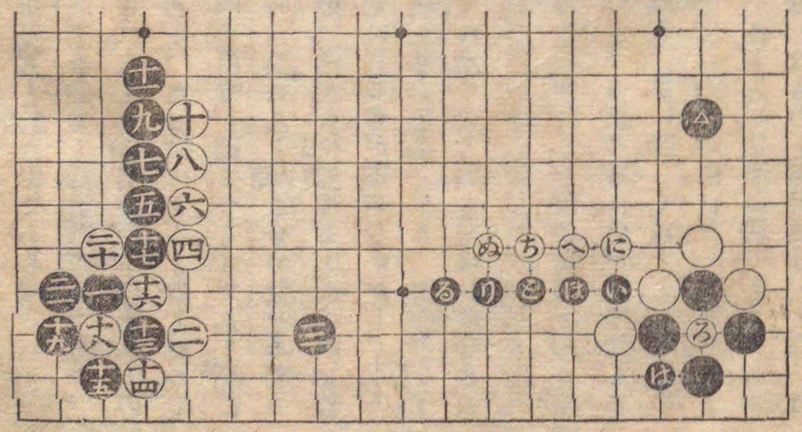
ないとは限らぬ、其は如何なる場合であるかと言ふと附近に優秀なる黑の勢力があるが扨此の白を無事に活させては勝味が少い、其故白の根據を顚して此の白を充分に攻立てゝ利益を得やうといふ樣な策戰を必要とする場合に遭遇して初めて施す可き手段であるから尋當一樣の場合では無論「惡手なり打つ可らず」と記臆しておけばよい、

問、地方の蠻力棋と戰つた時、此の隅の形を生じ白十とアテれば必ず四の點を粘ぐ事とのみ思つて居た所粘がずして直にいの點に截られて其應答に窮した事がある此ういふ時の正當なる應手及其利害得失如何。

答、（參考甲圖の如く）黑いの時ろと一子提り返しはと應ぜしめにと行び黑ほと行びた時、隣隅布石の場合によつてへに斜走するとも或はとに二間拓するのもよい、然る後尙ちに劫の味が殘つてをを輕く捨てに四子の白は徒に死ぬるものでない。或は（參考乙圖の如く）にとアテ黑ほの時へとちりぬると押し、更に轉じて一方△印一子の黑を攻める手段もよい。

問、如何なる場合も四線を這はしむるのは惡い、と聞いて居る、然るに乙圖の結果は黑をして優ほとりると高く四線を這はしめてをる、不利ではないか。

答、如何なる惡手も場合によつて良着となり良着も時に惡手となる事は出來ぬ、畢竟棋は活物である良否は一に場合による、必しも枸泥す乙圖の手割は丙圖の樣に運んだ結果と殆んど同一である、即ち丙圖の如く黑二に對して白四と單關した手の不利である事は一間夾の部に述べた通である、黑五以下手順を履み白十黑十一迄の結果白の不利である、而も白は十二の一手を拔いて他に着手した次で十三の黑一子を提つて居る、更に廿二の手で黑三を攻めて利を博する手順となる、已に初に言つた通り、乙圖によるも凡て場合の如何による事勿論であるが、假に乙丙圖の樣に運んだものとして、此の局部に就て黑の收め得た實利と、此くして得た白の利とを比較すると先着を布いた黑としては決して有利の位置に立つて居ると言ふ事が出來ぬのは明である。



（參考乙圖）

（參考丙圖）「白十二、手拔」

～～～～～（互　先　定　石）～～～～～

出頭一路ノ差勢力ノ消長ニ大関係アリ

（別種參考圖）黒九の手大悪手である、黒先着の隅であるにも關はらず一隅に屏息し、白は十六の掛粘ぎは少し緩いが外部に優秀な勢力を占める事となつた、是畢竟九と綽た罪である、

註、本圖は極初心者のため古書の中から撰み出して其の不利の着手を參考として示すのである、

「自分の學んだ通りの手順に對手が來ればよいが一手手順を更へられると忽ち其の應手に迷ふ」の

は初心者の常態である、本圖の如き其の好適例で黒七の時白は必ず、九の點に下るものと思つて

居る處、白は意外にも八と押して來た、黒は機乘ず可しとして隅の根據を顚すつもりで九と綽ね

た、是即黒が不利を犯した主因である、想うに白が八と行ひた時、黒に九と綽させて彼を不利の

地に誘致しやうと考たか如何かは問題であるが、白八の手を普通の考から忖度すると此の隅を普

通に應じて居ては飽迄先着の効力を握られて黒を攻撃するの位地に立つ事が出來ないから、寧ろ

四の一子と左側に多少の實利とを黒に與へ其の代償として此方面に勢力を造りおき、黒三の一子

に迫つて利を得やうとの策であらう、果して然らば黒九は白の策に陷つたものと言はねばならぬ

然らば白八の時黒は如何打てばよいかといふに辛抱して十三に行び白が十と押して來たならば其

時十四と綽ねるがよい、次で白㋑に綽返せば黒は尙㋺に行びておく、即行びるだけ實利を占め地

が出來るのである、此く黒が絶えず一路頭を先きに出して居るのと、本圖の通り白が一路先んじ

て黒を壓迫して居るのとは自他勢力の消長に非常な差を生じて來る、更に詳しく言うと、本圖の

樣に白が十四と行びて黒十三が一路後れて居る時は、一以下十三迄の六着の黒は只一隅に活たと

いふ外局面に向つて何等の勢力も持たぬ事となつて居る、即黒の不利といふ事は明である、

（解剖圖）更に之を示すと圖の通り白二から黒一を斜走に四と高壓したものと見て黒九、と行び白

下段危險ノ手

六の時黒に㋺と飛で一路先きに頭を出し中原利權の數に加はつて置かねばならぬのを、七と行び、白に八と行びられ以下黒九白十、黒十一、白十二、黒十三の手順を經て白に十四と掛粘がれたと殆んど同樣の結果である（此の解剖圖と（一）圖との差は（一）には四と五との交換があるに解剖圖には其がない此の交換の有無は、後に至つて白が十の一子を㋺と粘ぐ手順になるものと假定すると、次で隅へ白から先手の綽が利くや否やといふ極めて微細な侵合問題の差がある斗である）乃で此く解剖して見ると最初黒が㋺に飛ぶ可きを七に行びたのと、時機を見て打つ可き手で急に形づけねばならぬ所でない九以下十三迄を打つてしまうたのは確に黒の不利である

（白十四の掛粘は少し緩い此の手で黒二を攻めねばならぬ）初心者のため更に一つの陷り易い危險な手を示しておかう其は（參考第二圖に示す九の手である）白八の時黒は辛抱して十の點に行びねばならぬ若茲で綽ると忽ち白に十と截られ、以下圖に示す樣な手順となつて終に悲慘な結果を見ねばならぬ、扨白に十と截られた後黒が此の結果を避けやうとすれば勢非常な不利を犯さねばならぬのは是亦言ふ迄もない事である。

（別種參考圖の一）

（別種參考圖の二）

黒十五粘ヲ　白二十八は二十二の所へ打カク

（互先定石）

頂ノ意

手筋

黒い綽ハ注意スベキ

「頂」　頂とは白四の手を指す

（第四圖）白が四と頂つける其の時已に茲に勢力を加へておいていの方面から黒一を攻めやうといふ趣向である、此際黒は如何應じるか、いと外から綽るは普通の手である、ろと内から綽るは征の關係を考へた上でなければならぬ、單にはと引くのは次でいの方面へ一から二間拓しやうとの時である又趣向によつてははの點へ衝出す事もある是は白のためにはと抑へられるのを嫌うて白の眼形を奪はうとの時である。

「註」以上白四に對する黒五の手の應手四種の内、ろに綽込むとすれば白ははに截り、黒之をとアテ白ほに下り黒へに立つのが手筋と稱するものである、次で白とと盤つた時黒はいと綽ねて白四の一子を征に提るのである、其で此のろの綽込をする前に對隅に白四の助となる可き白の布石がありはせぬかと能く見た上でなくてはイケヌ、

（第五圖）黒は白四に應じ五と打ち六と抑へられて七と堅く粘いだのは隅一の黒は白の爲めに壓迫されても活さへ保てばよい、其の代に三、五、七と堅固な三子の勢力を以て此の方面に發展しやうとの考である、即此の五以下十一迄の數着は全然白の策戰通りに運んだ手であるが、黒は自ら先着の効力を頼んで此く維命維應じたのである、

黒九と尖んだ時白は十と其の出路を閉塞し、白十一と隅に活を計るに及んで白は十二と打つて堅く外側を鎖したのである、

白十二の手迄で此の定石は終つて居るのであるが、若黒がいと綽る事があると、其は白が手拔したならば、黒はろと衝出し白はと抑へた時にと截つで白が隅の黒を包圍した勢力を毀らうといふ手段である、之に關する一二の變化は次圖を以て示す事としやう、

「注意」古風の定石に黒十一の手で十二の點に行び白いの時黒十一と尖頂け白ろと曲る手順もあるが

手筋

白の外勢を益々盛ならしむるの外寸益なき惡手であるから矢張り輕く十一と尖頂けるがよい。

（第六圖）前圖の結果黒若いに綽れば、白はろに曲つて黒の出截を防ぐがよい、其時黒は手拔して他に着手するがよい、即手拔しても此の隅に活はある、何故なれば白若はと打込んだ時、黒にと白ほ、黒へ、白と、黒ち、白り黒ぬ、白る、黒を、白わ、黒か白よの時、黒たと一子行びて切となる手を防ぐのが手筋である次で白れ、黒そ、は言ふ迄もない手順である。

若又、白りの手を以てぬの點に粘がば、黒はりの點に粘ぎ、白る、黒ぬ、白わ、の時黒よの點に粘ぐ手順となるのである。

（第四圖）

（第五圖）

（第六圖）

（互先定石）

十五 氣ヲ付ル處

（第七圖）本圖の形も古棋に出て居るのであるが、白が十二と打つて三、五、七の黑に迫つたのは、無論場合問題である、即ち左上隅の星㋑邊に白の布石のある場合であれば、十二の一着は其の㋑の一子と相待つて恰好の拓きとなり、兼て三以下の黑三子を重くして攻め立てやうとの趣向も成立つ譯である、

黑十三以下本圖の通り運んだ結果は白の術中に陷つたもので、無論黑の方が十分不利益である、然らば如何したならば其の弊に陷らぬ樣に出來るかといふに、

黑十三の手にて二十三へ綽るがよい、然すれば白は十三の點に押へるより外しかたはない、其時黑は十六の點へ衝出し、白が十五の點を抑へた時、二十九の點を截つて戰ふ手順となる、此は前の第六圖說明の最初に詳述した所と同結果に歸するのである、

本圖の後白は三十の手で何の邊に打つがよいかといふと、先づ㋺位のものであらう、

（第八圖）本圖黑九の手は前圖迄の九と尖み白に十と出路を鎖されるのを嫌うて手段を變更し此く白八の肩側を衝いて斜走したのである、

本圖九以下の意味は「一間夾第五十六、第五十七圖の詳解を參酌されると明了する、つまり黑が十五と綽ね白に十六と一子を提らして手拍子で十七に綽ね白八の一子をゼロに歸せしめた手順が面白いのである、

「の勢力

形崩ノ俗手

若も白十六の手で㋑に粘いだならば、黑は十七と綽る手で㋺と夾み攻めるがよい、

（白に十四とアテられた時黑十五の手で十六の處を粘ぐは「形崩れ」といふ俗手である、

「注」前圖迄の尖みと此の斜走とを比較して何れがよいかと言うと大抵な場合此の斜走の方が好いのである、然らば如何なる場合が前圖迄の打方に適するかと言うと、其は具體的に一々此ういふ場合と圖解して示す譯にも行かぬが、先此隅を確に活きておいて、他の有望の場所若くは急を要する他の地點に先鞭を着けやうといふ樣な時は前圖迄の尖を用ゐるがよい、若も必しも此の形でなくてはならぬと言ふ樣な譯でもなく同一狀態の局面で扱前の尖と此の斜走と何れがよいかといふと、其は此の斜走の方が遙によい、何故なれば今迄にも屢々述べた通り一隅に屏息させられた子は全く局面と何の交渉をも持たぬ言はゝ世外に隱遁した樣なものであるに拘はらず、たとへ少しでも中原に向つて頭を出して居るものは、局面に多少云爲するの權利を保留して居るといふ樣な力がある是即本圖の方を勝れりとする所以である。

（第七圖）

（第八圖）

（第九圖）白が九と肩側に打つて來た爲め之を一隅に閉塞する事が出來ぬと見た白は、先づ十と打つて直に黒一に迫り隅の根據を奪うて黒を浮かして責めやうと試みた、

黒十一は勢力が重複する樣であるが白八の勢力を奪うて暗に黒一を援けた手である、

白十二と下つたのは前圖の樣に綽ねると黒に自然の調子を與へる事になるから、先ヂリッと下つて徐に一、九、十一の根據を覗うたのであるが、然し多少緩い手である、其の代り黒が十三と綽たのは（三の線にある八に對し二の線へ打つたのは）餘り氣の利いた手ではないから此の二着は相殺したものと見てよい、

「注」十二の時若も黒十三の手をはに夾む事が出來れば黒の利益は十分であるが、此場合白に八から十三に下られては十二の方へ盤がある故、黒は餘義なく十三と下から綽ねたのである、

白十二と黒十三との交換は先互角のものと見るが、前圖（第八圖）の數着を比較して見ると黒ちの時白ちと提らず十二と粘ぎし場合と假定して白とと黒へとの交換は黒の利益に歸して居るが、白ほと黒ちとの交換は黒の不利で此の四着はやはり相殺したものと見てよい、

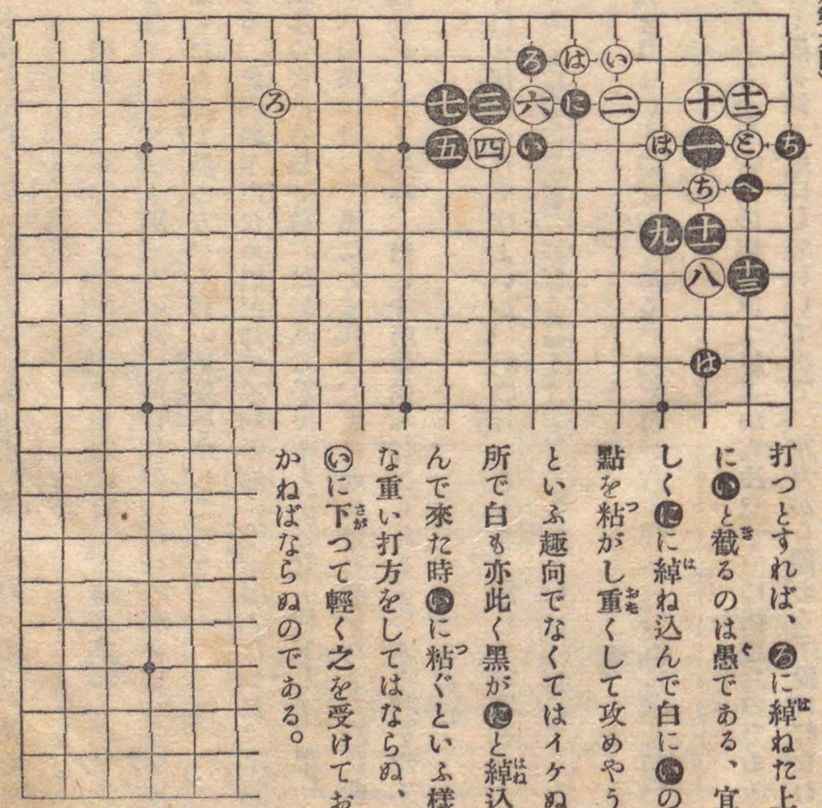
棋は畢竟相手仕事であるから、其の着手の善惡可否を道理の上から言へば善い手は何處迄も善い手で、緩い手は何處迄も緩い手に違ひはないが、然し得失の跡を考ると我着手は緩かつたが敵も亦之に劣らぬ緩手を下した我は惡手を下したが敵も亦惡手を以て之に酬いたとして見ると盤面の

得失は殆んど相當つて居る樣な事が屢ある。

黒十三と綽る手を以ていに截るか若くはるに綽る事がある其は隅の白に迫つて其の實利を奪ひつゝ自己の眼形を造つて、次に白に左上隅る方面から攻められても差支なき樣との準備と見ればよい。

「注」黒るは白にはと抑へさせてうとアテ更にへと粘がさうとの手である、乃で白は手拔きして他に打つがよい、白が手拔した時黒が直に玆に打つや否やは疑問であるが、假に

（第九圖）



打つとすれば、るに綽ねた上にいと截るのは愚である、宜しくにに綽ね込んで白にいの點を粘がし重くして攻めやうといふ趣向でなくてはイケぬ所で白も亦此く黒がへと綽込んで來た時いに粘ぐといふ樣な重い打方をしてはならぬ、いに下つて輕く之を受けておかねばならぬのである。

（互先定石）

以下第十、第十一の二圖は古人の打棋にて出て居る形であるから參考の爲に掲げるので、決して學ぶべき形として示すのではないから念のため注意しておく。

（第十圖）　白が最初四、六、と打つて黒の三、五、七と交換して居るのは決して利益ではない、のみならず少からぬ損害を招いて居る然るに、又十と隅三々の點に頂けたのは更に不利を重ねる所以であるが、本圖は黒の應手が良く無いため却て黒の方が不利の結果を來して居る、

本圖で注意す可きは黒十一の綽である、此の惡手のため黒が却て不利の地に陷る事となつた、手順を更へて解剖して見ると、白八、黒九の交換の無い前、白が八の手で十と頂けたと假定して、黒十一に綽ね白十二、黒十三の後、白が八の點に迫つて來たとすれば、黒は如何之に應ず可きか㋺に曲るか或はろに綽る手であつて、本圖の通り九と尖み、白に十四の點へ行びられるといふ不利を犯す筈はない、

本圖の通り打つて、次で十六の手で白は何處に打てばよいか、いの行であらう、然して時機を見て隅へはと激しく抑へて劫爭を開始する（勿論之は容易に打てぬ手ではあるが）着を白は保留しておくのである、

（第十一圖）　黒五は白に七の點へ夾まれまいとの趣向である、其で白が六と押へた時直に七と拓いたのである、

白八は學ぶ可らざる緩手である、此ういふ形が古人の棋に出て居るから注意までに掲げたのであるが、此の手を以て飽迄も九の點に押し黒を低く這はしておいて次で、左方から詰める手段に打たねばならぬ、本圖の樣になつては黒の勢力を旺盛ならしむのみで不利の甚しいものである。

（第十二圖）前圖の八は變更して本圖の通りに打つがよい、右下隅に若い、ろの黒二子の布石があれば八、十と押す手が尙好い即黒は十一の一子のみで事足る處に三、五、九の三子を添へて居つて尙後ににの邊に曲りを打たねば多少味の惡い氣味がある若又右下隅に黒い、ろの布石がなく却て白いの布石があつてろと詰られた時は黒ははの點を截るがよい、其の手順は次圖（第十三圖）で示す。

（第十圖）

（第十一圖）

（第十二圖）

（互先定石）

此打過ニ碁子フヘシ

第十三圖 囲碁ノ所多シ

（第十三圖）白が十二と詰るには無論白にいの邊の布石がある場合と見られる、黒十三と截つた時十四とアテ十六と掛け、次で二十二と下り、二十四二十六とキメ付て二十八と黒一子を提つた手筋は頗る面白い、黒二十九と飛び白に三十と粘かせ次で三十一を利かせて三十三と拓いた黒の手順も學ぶ可きである、（布石三子第四局參照）が然し本圖は只手筋を示すに止まつて結果は白の方あまり面白くない其で白は十二と詰める前に先づろと一着を加へて黒にはと應ぜしめて然る後十二と詰るがよい、其時黒十三と截らば白十四とアテ黒十五、白十七黒三十、白は、黒十六、白二十、黒二十一、白二十三、黒に、白ほと絞り黒六に粘ぎ白二十八、黒三十二白十八と粘ぐ手順である。

（第十三圖）

（第十四圖）本圖も亦手筋を示したもので黒に七と截られた時八と頂けるのが面白い手で、此の時黒若十の點へ行び出れば白の手段に陥るので即白八黒十の次白はいと七をアテ、黒ると行で白はと突出した時黒は七、六の二子を捨るか或は一、十の二子を敵の手に委ねるか何れか一は免れぬのである、本圖白は黒一を捕へ黒は白六を提る此くなれば先互角である。

（第十四圖）

（第十五圖）黒一、七の二間拓に對する白十以下數着の交換は古風の定石に出て居る形であるが、現今は白二の目外に對して黒一から七の點へ二間拓するといふ手が殆んど行はれぬため、隨つて此の形も稀により見られぬが本圖の場合此くなつた結果から見て、黒白双方の得失を比較するのも敢て無益の業ではあるまい、

古風の應接とは言へ兎に角此う打つものとして見れば白が、四、六、八と三着の勢力を費したのが稍閑事業の觀がある、何故なれば白十以下黒十五迄の手順を逐ふものとして見ると一方四以下九迄の交換は寧ろ無い方が働いて居る、已に四以下の勢力を費した以上は單に十の一着を加へただけに止めて十二以下を打つてしまはぬ方が餘韻があつてよい。

「註」白十の一着は黒いの截に對する準備である事は已に第十三圖に於て詳解してある通である、

（第十五圖）

（互先定石）

小目カラノ夫ハ場合ニ適應セサレハ緩キ手ナリ

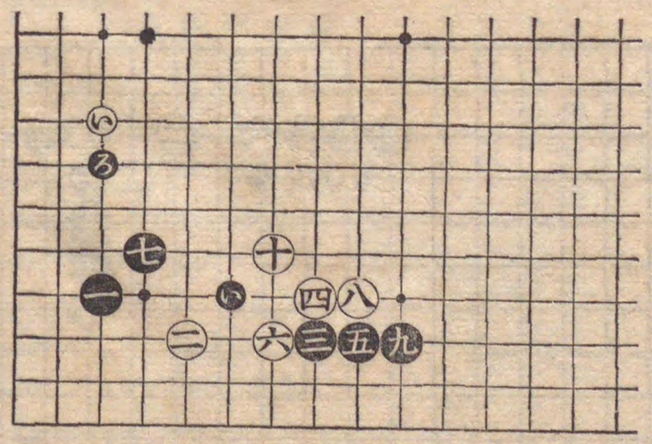
（第十六圖）黒七の尖は攻守の何れにも利かぬ手で實に不得要領の手であつて、次に白から㋺と攻られる順序になつて益々面白くない、元來此の小目からの尖といふ手は少し堅過ぎて緩い手であるといふ事は屢々説いた通りであるが、只其が塲合に適應しさへすればよい。

「註」塲合に適應するとは例せば、㋑の掛け、三若くは五の夾等を利かして其の機を利用して㋺方面に廣く拓かうといふ策の行はれる時である。

然るに本圖の塲合は此の尖の利用が絶對に出來ぬ所であるからやはり㋒と二間拓して堅く治つておく方がよい、何故なれば掛若くは夾を以て攻めやうとする白二は四、六と勢力が加はつて居て、今此く尖めば却て白から㋑と逆襲される結果になるからである。

（第十七圖）本圖黒十一の手は少し働がなさ過ぎる、此の手で㋑と飛んで四、六の缺點を窺ひ白をして㋒と粘がしめて然る後㋺と白十の頭を綽るといふ手段に出る方が働があつて面白い。

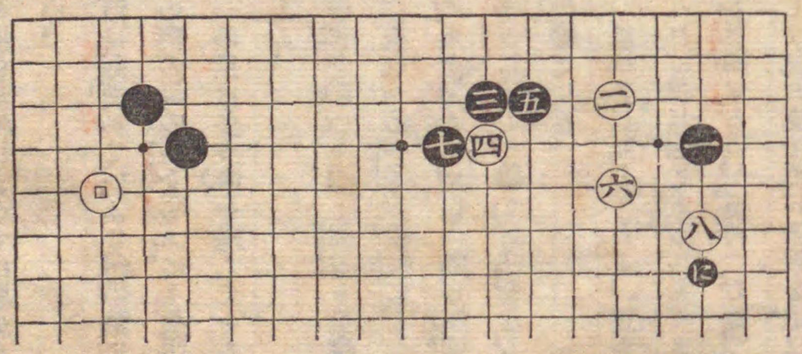
（第十六圖）



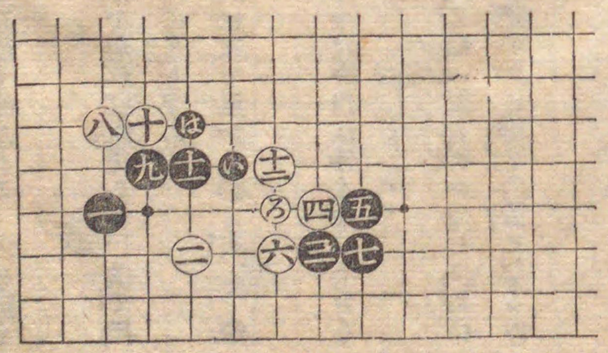
白六ヨリ外ニ手段ナシ

（第十八圖）黒が若圖の通り五と出て來たならば此塲合白は六と飛んで双方に利かせる手段に出るの外はない、次で黒が㋺の點に二間拓して黒一に備へて來た時は白は八の手で七の點に行び三、五の黒を低地に壓迫する手順である、乃で本圖の樣に黒が七と綽るのは左上隅に圖の樣な黒の布石がある塲合と假定して見なければならぬ、即黒は白に七の點へ行られて低く這ふの不利を感じた時此く七と綽るので其時白は八と外部を鎖して黒一を一隅に閉塞するのである。

（第十八圖）



（第十七圖）



「註」黒五は此の定石の初にも言うた通り白に抑へられるを厭ひ且つ白の根據を奪ふ手である。

～～～～～（互先定石）～～～～～

白八ノ時黒一活ナリ

枡形活

一間夾白六八撓手

（再掲第十八圖説明）八と打つた後、征の關係如何によつては黒からいと頂越す味がある、之を防ぐには白はろに衝き當つておくの外はない、

白に八と外部を鎖された時、隅の黒に活は如何かといふとへの點に飛んで居れば活である、其で黒がへと打たず若も手拔した時白から此の隅の黒の活を奪ふのも矢張りへの走りである、

即ち白八、黒手拔、白へと斜走しても一の黒は多少味を殘してをる、其は次で黒からはと夾んでいか若くははと上下の頂を覗ふといふ味がある、

乃で黒にはと打たれたならば、白は此の頂を防いでにと突當り黒りと立つた時白はちと飛んでおく位のもので、茲まで手を費さしたならば黒は一の一子を犧牲にしても決して惜くはない、

黒にはの方面に來られる味を防いで此の黒を捕るには白はろと突當り更にりの點に拘へておかねばならぬが白がろと打つた時黒が手拔せず直に應じてりと行びたならば此隅の黒は枡形の活となるのである、其の手順は黒り白ぬ黒る白を黒わとなる、

○問、白八の手をいの點に尖むがよいと或棋書に記してある、正否如何

○答、其ういふ手は斷じて無い、何故なれば黒にはと走られ易々として活きられるからである、

○問、一間夾の定石詳解の際に白が六と單關するのが不利であると說いてあつて其の理由は黒一からいと斜走に應じられて白は之を押して見た處で黒に四線を這はれ少からぬ地域を占められる譯

であるからとあつたか、本圖黒七の手でいと斜走に應じたならば如何、

○答、一間夾（參考圖）の時とは場合が違ふ、一間夾の場合は單に△印黒一子が輕く介在して居るだけであるから白はいろと勢力を加へておいて次にはから白に夾み攻められても捌きよいが、

本圖の樣に三、五と黒の重い子が存する場合に、若し黒の意が白に七の點へ行びられても苦しくない、一の一子の始末をしやう、と考へる時ならば白六に應じていと打つよりは單ににの點に二間拓する。

（再掲第十八圖）

（參考圖）

（四十九、互定）

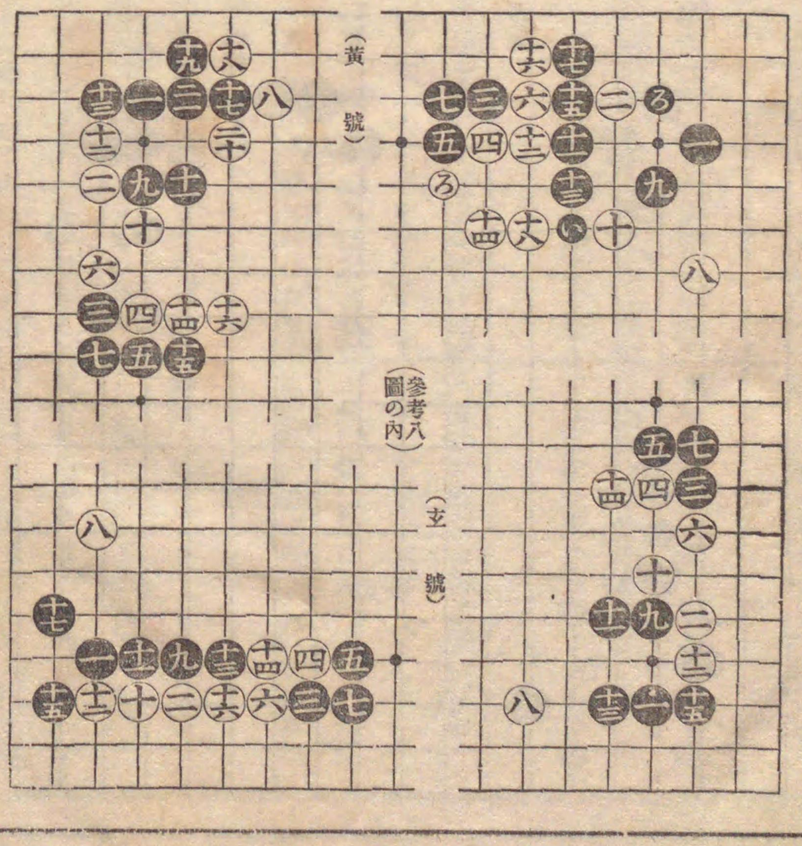
（參考圖八種）諸書より拔萃す

（天號）本圖の樣な打方は棋として無い形である、何となれば黑はろと尖頂く可き時に十一と打つて終に十八と外部を鎖されるは不利である、然し白の打方も本當でない、十八の手で三間（黃號八の點から）に詰め黑がいと出た時ろと綽る手である。

（地號）黑十三は無意味である且つ十五と後手して白に上方三子の黑を攻めさす機會を與へたのは太だ不利である。

（玄號）是亦三、五、七の三子が重くなるから面白くない。

（黃號）前三圖に比べると稍勝つて居る、然し九の頂は結局面白くない、尖んで包まれるのを嫌ふ手はさる事ながら敵に自然の手順を與へるから甚だよろしくない。



（五十、互定）

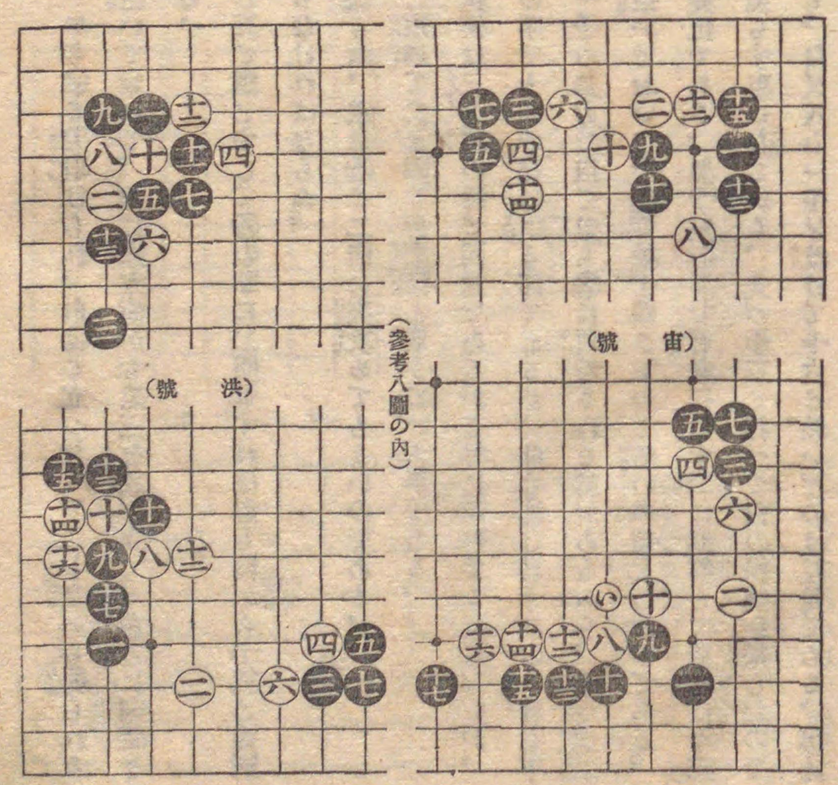
（字號）此亦九の頂がよろしくないため白大斜掛けの惡手をして稍成功せしめて居る

（宙號）本圖の結果は黑の方が少し利である、然し黑九の尖頂はよくない、やはり十一の點である、黑九の時白はいと行びるがよい十の手よりは働がある。

（洪號）本圖の樣に運ぶ事もある、十二の手で十七に綽込み黑を十六に下らしておいてから十二と立つてもよい、征の關係次第で黑白双方とも何樣にも打方がある、一間夾第十二圖第二十頁を參酌して其の應用法を考へるがよい、

（荒號）征の關係によつては劇しく此う打つ手もある、即對隅に黑の布石があつて、五、七、十一の三子の黑が征にかゝる患のない時である。

要するに二間夾に白より大斜掛は無理である、又黑からいふと已に、三、四、五、六、七の交換がある以上は隅は輕く打つておきたい。



（石定先互）

「二間飛」

（第十九圖）白が四と飛んだのは黒一からろと尖頂けられ、白はと立つた時黒に十二から煽られる手、若くははの點に頂けられるのを拒いでおいて、次に六方面から黒三を攻め立てゝ左方に利益を占めやうといふ策戰を含んだ手である、

全體黒は五に應じねばならないが若し五と應じずしてろの點に二間飛すれば忽ち白から十三と遮斷されて黒一は一隅に非常の困厄を蒙らなければならぬ、

白六は必ずしも此く一間に夾むとは限らぬ、或はろと二間に夾攻めてもよいのである、

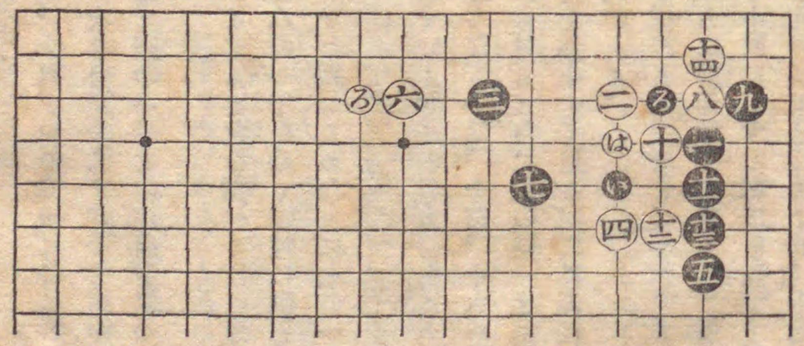
黒七を此く斜走に打つたのは次でいに頂越て二と四とを截斷しやうといふ手である、

白八、黒九、白十、黒十一、四着の交換は三々頂の時と同意であるから特に説明する要はないが、彼の三々頂の時の手順であれば十二の手で十四の點に下る譯であるが、此の場合若十二の一着を下さずに十四と下つたならば、黒七の一子の勢力で以て忽ちいに頂越される患があるから、先づ十二と打ち黒の缺點を衝いて先手で之を拒いでおいて、然る後十四と下つて活の準備をしたのである。

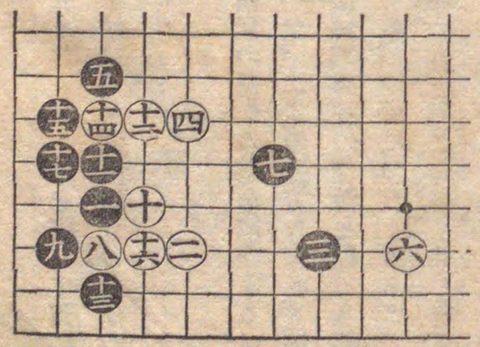
（第二十圖）前圖第十三の手からの變化である、黒十三の手で尋常に白十二に應答して居れば十三の點に下られて不可拔の根據を白に造らす事になるから、先づ十三と打つて白の根據を顚したのである、白十四の時黒は十五と盤を打ち、白又八の一子を救けて十六と粘いだのは互角である、扨此

の結果を前圖と比較して見ると何れが優つて居るかといふに、何れの手にも一利一害一長一短は免れぬ理で、黒が本圖の樣に十三と打つて白の眼形を先手で奪つたのは一見非常に利益の樣であるが、其の代り、白に十四と突出されて五の一子が極めて脆弱なものとなつて終つて居る之を前圖黒が十三の手で此の十四に捧粘ぎにして居るのと、本圖とを比較して見ると、五の一子の强弱の差は非常なもので、隨て其の勢力の左上方面に及ぼす影響も多大の相違を生じる。*

（第十九圖）



（第二十圖）



*然らば本圖の方の適應す可き場合は如何かと言ふと、根據を奪うて攻るの利を認めた時である、交換即ち隅で利をして側で損をして居るといふ譯合になる。

（第二十一圖）前圖第十五手からの變化である、

本圖黑十五は飽迄も側を手抜きして十二、十四と白の來侵に委せ、十五と白八の一子を抜いて初に十三と綽ねた主旨を貫徹して振り替り、次で白が十六と打つて黑の盤を妨けると同時に五の一子の勢力を奪つて終つた時、黑亦十七と綽ねて三の一子との連絡を謀つたのである、

本圖の結果は黑の方少しく不利である。

「註」本圖は何故黑の方が不利であるかと言ふと之を調べるには黑白相互の得失の跡を比較すると能く解る、即此の結果を見ると、白は八の一子を全く犧牲に供し十、二、二子の勢力を殆んど零とならしめて居るに對し、黑は五の一子を腐らしめた上に七の一子は何等存在の價値を認められぬ有樣に立到つて居る、然し是だけではまだ双方得失の差が十分解らぬが、更に詳しく言ふと、黑が專ら注いだ九、十三、十五、十七といふ數子の勢力は發展の餘地の無い隅に向つて多く費されて居るに反し、白六の一子は言ふ迄もなく十二、十四、十六の數子は前途發展の餘地がある側邊に向つて下されて居る、更に反面から見ると白は此の隅一手後れて打着したに關はらず八の一子を犧牲に供して黑が之に向つて勢力を集中して居る間に外部に勢力を逞うしたので、畢竟黑は白の策に陷つて不利を侵したといふ觀がある、

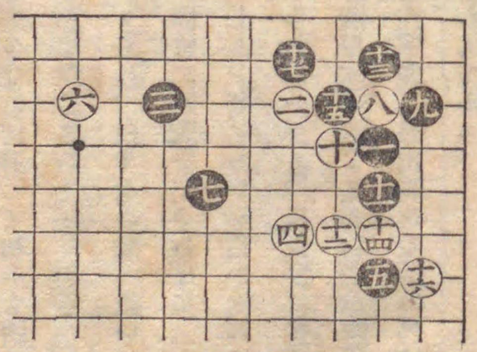
さは言へ黑が隅に植ゑた勢力は確固不拔のもので決して小サイものとは言へぬのみならず黑が既に得た隅の實利は既知數であつて白の方は未知數である上に、黑は敢て一隅に屏息させられたといふ譯でなく三、十七の呼應によつて中原に多少の利權を握つて居る點からいふと寧ろ黑の方が優勢ではないかとも思はれるが、然し此の結果已に黑十五、十七の二子のため白の二、十の二子

の勢力が零に歸した場合黑七の一子は殆ど存在の意義を失うて居るに反し之に代る白六の一子が依然として効力を保持して居る點から見て確に黑の方が多少の不利を蒙つて居ると斷言する事が出來る。

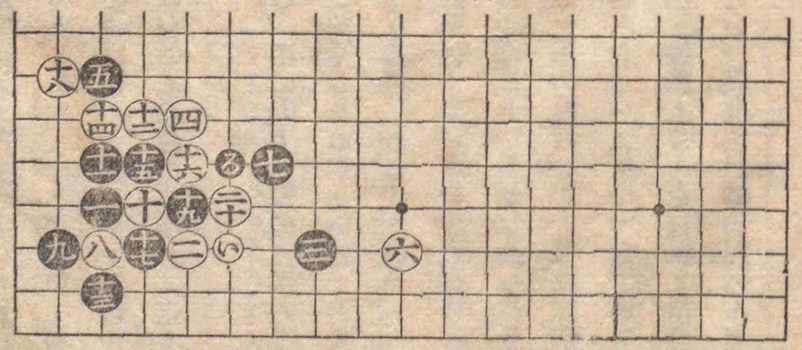
（第二十二圖）本圖は前圖の變形で唯古人の實戰に出て居るから參考のため示した迄で、決して學ぶ可き形ではない、即此の十五と出て白に十六と勢を加へさすだけ惡いので矢張り（振り替りを打つとすれば）前圖の樣に輕く打つ方が好いのである、

「註」極初心者の爲に注意しておくが黑二十一の次に白は㋷に粘ぐといふ樣な重い事をしてはならん若黑が㋺に提りるに截るといふ樣な手に來る事があるとも其は來るに委せ提るに任して此の部面に彼の勢力を傾注させておいて差支は無いのである。

（第二十一圖）



（第二十二圖）



（第二十三圖）本定石の應答は無論第十九圖に據るのが普通であるが、本圖は若も頂越の手になれば此ういふ結果になるといふ事を示した迄である、黑十九の手は必ずしも此く双關にするとは限らぬ此の手で隅二十の點に押して白の根據を奪つてもよい、其の時白はいの邊に走つて活を計る手順である、黑二十一は白にはと頂けられる手を拒いだのである、此の結果は白の不利益たる事言ふ迄もない、

「註」十三と頂越された結果は四の一子が浮いて終ふ、然るに此の四の一子の効力を犧牲に供して迄も先づ十二と下らねばならぬといふ場合ならば溯つて初から四と二間飛をせぬがよいのであるといふ理由があるから此の頂越される手は白が普通には打つまじき手と心得ておけばよい、白十六の手でにに綽込めば黑にほとアテられ、白十七の點へ拔いた時黑に十六と外部を閉塞されて初四と飛んだ意味が全く消てしまい非常に不利を犯さねばならぬから兎に角、前途に多少活動の餘地を存して此く十六と行びたのである、然しながら黑十九の手で二十の點へ押しても白にいと走られては黑は、之をろと遮斷する手がないから、（只大體に於て白不利といふ迄で）白を窮地に陷れる事は出來ぬ、其は即ち（參考圖甲）で示す通り白いの時黑ろと遮斷しても白にはと頂けられては二子の黑を與へるか無條件に左下側へ逸出させるかの外はない、假令黑がにと綽込んでも白にほと粘がれては別に手段はないからである。

（第二十四圖）黑七の手はいに單關してもよい其時白ろに飛べば黑亦はと飛んで居てよいのである、白十二は輕妙な手である、是はにの頂越を拒ぐ傍ら三、七を遮斷しやうと覗うた手である。

（參考圖乙）黑五は必ずしもいに二間するとのみは限らぬ場合によつては此く打つてもよい、即ち五と尖頂け六と立たせて七と飛んでおく乃で先づ此の隅は安全に治つて居る即早く隅の治をつけておいて後顧の憂をなくしてといふ意の時に此く打つ事もある。

（第二十三圖）

（參考圖甲）

（第二十四圖）

（參考圖乙）

三間飛第十圖參照

黒十三の味

「斜走掛」

（第二十五圖）白が四と斜走に掛けて黒一を低地に壓する意は前の二間飛と大差はないのである。

「註」若黒の三が來ない前ならば此の方面に勢力を加へておいて左上側方面に大地を造らうといふ趣向なのであるが茲では次で黒三を八の方面から攻める準備として四以下の勢力を加へておき其の目的は八、十の餘力を以つて左上隅方面に地域を造らうといふ趣意である。

黒十一は十二の截を覗うた手であるが此く打つた黒の眞意は白に十二と押させて自然の手順を以て十三の下りを打たうといふのである。

「註」黒十三をたゞ下つたならば白に十一の點へ飛ばれる、又黒が若も㋺と尖頂け白が㋩と綽ね黒㋻と抑へ白十二とアテ黒十三と粘ぐ順序に打てば隅の治りはつくが、次で白に㋾と掛粘がれる順序になつて、三、九の黒が薄弱を感じる樣になる、乃で黒が十一と先づ三、九の我石に多少の勢力を加へて白に十二とダメの粘ぎを打たせ然る後最後の目的たる十三の一着を下したのである、

何故黒は此くも此の十三の下りが打ちたいか、十三といふ一子には如何いふ策戰が含まつて居るのかといふと、此の十三は單に隅が大きいからといふので打つたのではなくほへとの出截られる缺點と十七、十九方面に及ぼす自己の勢力といふ關係から打つた手である、即ちほとの缺點がある以上は十三の下りを打つておかぬと白が十六十八と押して來た時之を十七、十九と二段綽する

巧妙な脫出

事が出來ぬ、茲に二段綽の出來ると出來ぬとは直に四、六、以下の白の勢力の消長に關し此の白の勢力の消長によつて三、九、の黒は痛痒を感ずる順序になり、其の結果は引いて八、十、方面に白をして任意の活動をなさしめるといふ狀態になるから黒たるものは此際一手の冗着をもせぬ樣に自然的の打廻しを以て目的を達する樣にする必要がある、

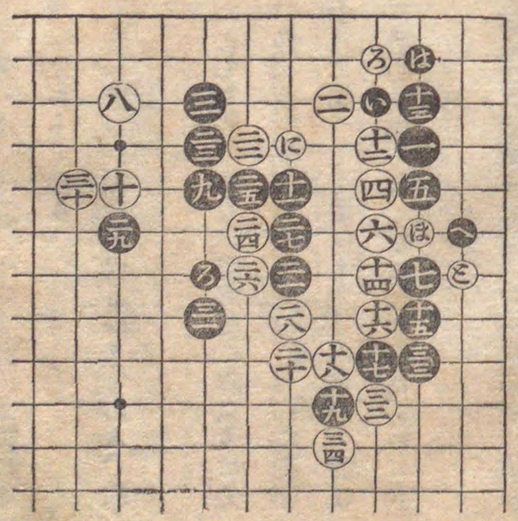
若も黒が十一の手でろと飛べば白は次の第二十六圖に示す通りの手順に運ぶがよい、

白二十二より二十四を導き二十六、二十八と黒を封鎖する勢を示しつゝ自己の缺點を補うて最後に三十二、三十四と中原に雄飛する資料を占めた手際と言ひ、之に應する黒が二十九と頂け三十一と窺うて巧に中原に逸出した手際は實に妙味津々たるものがある。

「註」黒二十九と頂けた時白綽ねずして三十と行びた穩健な手も味はふ可きである。

（此の形は安井仙角と本因坊道知との擲棋に出て居る）

（第二十五圖）



（第二十六圖）　白十の手で前圖の樣に二十の點から迫らずして先づ十、十二、十四と此の方面に手を着けたのは黒に十四方面を二段綽さるゝが面白くないと考へたからである。

「註」白が十の手で二十と迫れば前圖の樣に黒から運ばれて黒の勢力が㋺に加はるからである、即兩方一時には打てぬの嘆がある。

白十六の出截は先づ二十の手から打つてもよい、然し何れにしても黒の勢力が㋺方面に加はるに先立つて十六、十八の出截を打つの必要がある、何故なれば、後に至り黒より㋩と尖頂られ白㋒黒㋺白㋙黒㋺の交換の遂られたる後となつては、ヨシ十六と出十八と截つても黒は十九とは粘がずへより抱へる手順になり、隅は元より黒地として十分治り、りに黒の缺點もなくなる譯故白は爲めに利益を得る所も少くなるからである、

然るに本圖の塲合白十八の時黒若しへより抱へるとすれば白は十九と截り黒との時白㋺の點に頂け黒ちと曲り隅を白に締り付けられる結果となつて面白くない、乃で此く十九と粘ぐ手順であるが、此の結果に於てりに截味の殘つて居るのが白の利とする所である。

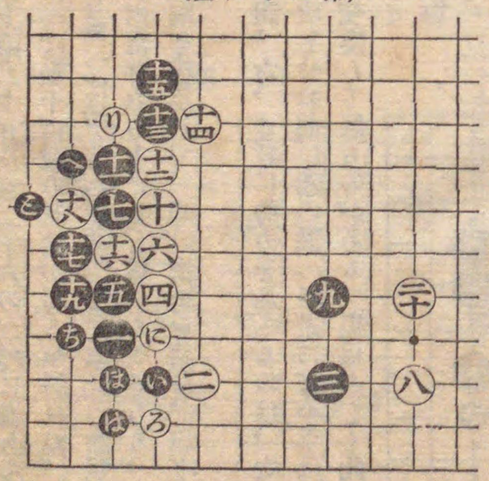
「註」本圖の結果に運んだ後、黒にいと尖頂けられろ㋺にはの手順を履むものとすれば其の利害得失の關係は如何であるかといふに其は單に右上一隅だけの關係になるから事が少サイ、即ち已に十九と黒に粘がした上ならばたとへ此方面を黒手で始末させてもさまで惜しくはない。

△問　白が十、十二と押しておいてから十六と出截るのと十、十二の手より先きに十六の點に出截るのと孰れだけの差があるか。

○答　先づ十六と出截り黒十七、白十八と打てば黒は必ずへから抱へて提らねばならぬ、次で白が十二と來ても已に十八の一子が提れて居て此の黒は確實に活きて居るから黒は敢て之に應じて十三、十五と打つ必要はない、然るに本圖の通り先づ十二、十四と運んでおいて然る後十六、十八と打てば、次で黒が十九と粘ぐとりに缺點が殘るさりとてへから提れば十二、十四が不用に等しい手になるといふ不利がある、即ち白に取りては必要缺く可らざる十二、十四の代償として黒は極めて價値少い十三、十五の兩着を下した樣な結果になる其の上隅は例の白㋺黒ちの手順で黒の利益は殺がれるといふ事になるから着手の前後によつて同じ石の働に大差を見る事になる。

以上二圖の意味は已に屢々詳說した所であるが初心者には一旦解つた樣で中々咀嚼し應用する事の困難な理があるから繁を厭はず更に解說したのである。

（第二十六圖）



定石ニナキ手

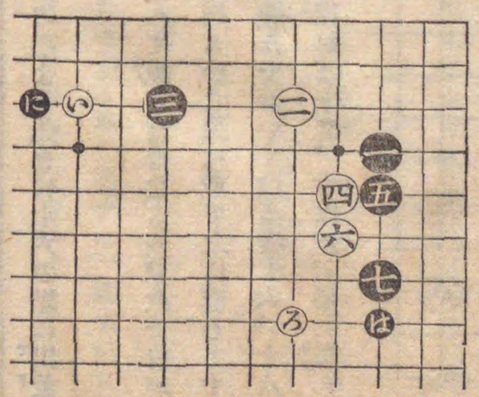
『絶曰』『二間夾の斜走掛』の手は着手の本義から言ふ時は以上第二十五及第二十六の二種に盡きて居ると言ふも決して過言ではないが、然し變化の數から言へば幾十百種の應接があるか料れぬ、即ち理を以て言ふ時は一、二に盡きては居るが形の變化から言へば殆んど無際限である、此の簡單なる理論を複雜なる變化の上に應用して誤らぬといふ事は相當有力の士と雖も難ずる所である、乃で諸書の中から、實戰に行はれ易い且つ興味ある者十數圖を拔萃して、師の批正を請ひ、以下參考圖として掲ぐる事とした、

（參考圖）「い號」既に前第二十五圖の註でも述べた通り白が四、六、と茲に勢力を加へるのは、次に（い）方面から黑三を攻めやうといふ手であるから、此の夾攻をせぬ前に（ろ）の點へ斜走に打つ手はツマラヌ或書には（い）の夾がなくて白の（ろ）と黑（は）の並びとが交換して居るのがある、黑は必しも此く並ぶとは限らぬ、白が（い）より前に（ろ）と打てば黑は直に（に）と二間拓するかも知れぬ、但し（い）の夾をした上で（ろ）に勢力を加へるは惡い手ではない。

（ろ號）此の形の時に白が（い）と頂けるのは元より定石にない手で、白が（い）、（は）と打つ間に黑に（ろ）（に）と打たれ三の一子と相待つて外面に優勢を占められる結果になつて甚だ拙い、

抑々白が（い）と頂ける主意は黑から（へ）に尖頂けられるのを嫌ふて打つ手であるが、本圖一から七迄運んだ此の場合は白は然まで（へ）の尖頂を嫌はねばならぬ所であらうか、又反面から見ると黑は（へ）の尖頂けを利と見る所であらうかといふ事を調べねばならぬ、

（參考圖い號）



二目夾ミト三目夾ノ差

白い惡手

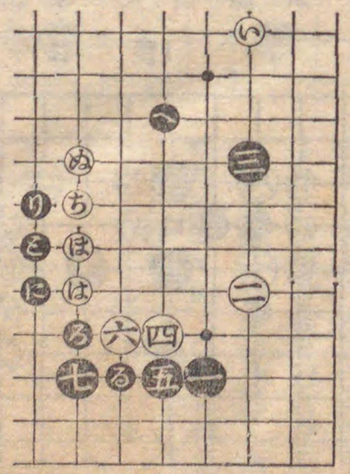
矛盾ノ手順

ろノツギニ注意

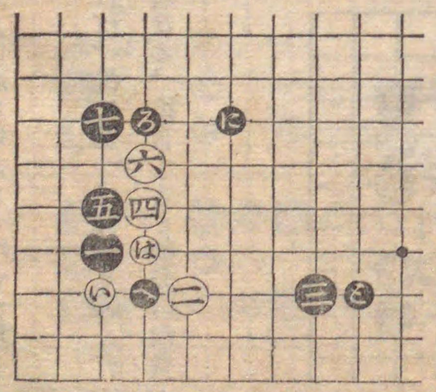
黑（へ）の尖頂けは白二の一子に勢力を附加するといふ事になるから、假令白二に多少の勢力が加はつても黑三が（と）の三間夾てあつて距離が遠くて其の影響を受けぬ時には黑は此の隅の始末をするために早く（へ）に尖頂けぬとは限らぬ、であるから三が（と）の三間の時には白も亦此尖頂を妨げ拒ぐため（に）と頂けるといふ事も意味をなして居る、然るに前述した通り三の二間夾の場合であつては黑から（へ）が不急であると共に白（い）も意味のない不急の着手で此の不急の着手のために其の代償として（ろ）（に）と打たれるといふ事は定石とする價値のない寧ろ惡手である。

（は號）本圖は白（い）の時黑（ろ）白（は）黑（に）白（ほ）となつて次に黑が（へ）へ斜走して居る手順が示してあるが此の手順は頗る矛盾して居る、何故なれば黑が（ろ）（に）と押す手の正當な場合といへば三の一子がなくて且つ左方に黑の布石があつて大地域を造り得らるゝ場合に更に（と）（り）と押して（る）と粘ぐ手順になれば好都合なのである、が本圖の樣に已に三の一子がある際は此の三を捨てゝ（と）（り）（る）と打つ手に出れば、不利ながらも意味は成して居る、然るに前後を考へず（ろ）（に）と押し更に轉じて（へ）と出て三の一子も援けやうといふ打方は頗る矛盾した着手といはねばならぬ。

（は號）



（ろ號）



（互先定石）

白いノ付黒ロノ一手アルノミ

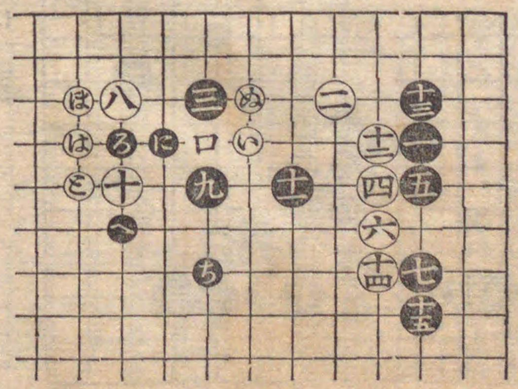
（に號）白いは適應の手である、此の時黒の應手としては如何打てばよいかといふと、唯ロと粘ぐ一手あるのみである。

黒るとゝ冲んで凌いだのは一見手筋の樣であるが面白くない何故なれば、後に至つて白からぬと打たれて黒は應手に困しむ事となる即形崩れと稱する極めて惡姿勢になる、換言すると勢力の浪費といふ事になるのである、

且つ黒る以下白と迄の手順で此の八はとと十と白をして非常な堅壁を造らしめた事になつて黒の不利益は少なからぬ結果に立至つたのである。

（ほ號）白はの手がよろしくない、此の手でちと押し黒り白りの黒るとと二段綽された時、白はをに掛粘ぎをしておく手である、此のをに掛粘ぐ手は黒からをに覗きを利かされるのを豫防した手であつて且つ中側五子の黒に威壓を加へる力がある、白は最初黒にるとと衝き當られはと三子連立して非常な勢力が造つて居るのであるから、敢て茲にほと行びて錙銖の利を爭ふ必要はないのである、然るにほの一着の打過ぎからして黒を

（に號）



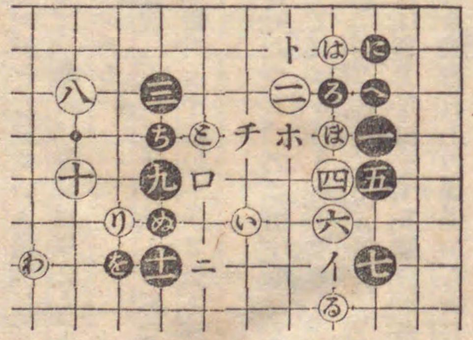
白い不可

盤ル！

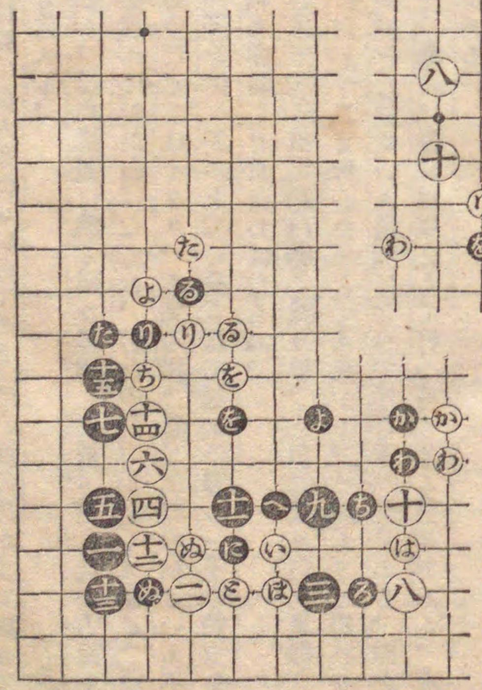
して白がとと勢力を得しむる結果となつたは白のため取らぬ所である。

（へ號）白いの飛は一面白くないやはり前二十五圖で說いた通り（イ）と押す手がよい（以下の手順は第二十五圖の指定の通り）要するにいは緩慢である、黒はぬと粘ぐ手で（ロ）と曲り其の時白若し（チ）と打てば黒は（ニ）と双關しておく、之で可なり働いて居る若又黒（ロ）の時白が外へ打つたならば、後に（今直にといふ意ではない）黒（ホ）と截り白（チ）の時（ト）と打つて盤る味が殘つて居る。

（へ號）



（ほ號）



或書に載せてある（へ號）手順は白い黒る白は黒に白ほ黒へ白と黒ち白り黒ぬ白るとと飛んだ時黒をと曲り白わと斜走した手である。

（六十五、互定）

心得肝要
いゝ手アレ、

（と號）白八の二間夾も㋚の一間夾と趣向に於ては大差はないのである、唯二間の方が少し緩んで居るだけ攻められる三、九の黒が樂なとも言へる、

本圖で批難す可き着手は黒㋩以下の手である、從來諸圖に就て屢々詳述した通り若し此の方面を二段綽しやうと思へば㋑方面に黒の勢力を加へておかねばならぬ、若此の勢力がなくて㋩と二段綽をする時は一、五の二子は捨てゝ打つ考でなくてはイケヌ、本圖の様に㋭と二線の粘といふ不利を犯し更に㋑とキメツケられ㋭と㋚の一子を抱へ其の上㋬と截られて最初の㋩の一子の効力を犠牲にするといふ結果に至つては其の不利も亦甚しと言はねばならぬ、

本圖の結果を手順を換へて言うと白十二の手で㋬と出黒㋭白㋭と截り黒（イ）白㋚黒ロ白㋑黒㋭となつた結果と同し事である此ういふ場合に白が十二と押したとしても黒が十三と綽るさへ餘計な事であるのに白十四に應じて更に㋩と二段綽をしたといふ道理になつて居る不利益である、即之の右側白㋬以下の交換が行はれた後黒十三、㋩の二段綽は棋として打つ可らざる惡手である、本圖は手順を逆にして此の惡手を犯した譯である。

（ち號）前圖即（と號）㋩の手の説明に隅一、五の二子を捨てる考ならば㋩と二段綽をしてもよいと言つたが、其は全く場合問題なので只捨てゝ十四の一子と振り替はるばかりがよいといふ譯のものではない、

乃ち左上隅に㋭、㋬といふ様な黒の布石があつて、之と相呼應して白十四の一子を提る手が非常の大模様を造り得られるといふ際に始めて行はる可き着手である。

「注意」本圖白十四の一子を黒が四ッ目殺の形に打ち拔いた手即ち中原に向つて一子を打ち拔くといふ事は非常に大キイ手で提られた方は莫大な損をする場合が多いといふ意味は曾て實戰講評の場合に屢々説く所であるが、然し其は全然布石上の關係から論じるので今定石といふ局部の問

（六十六、互定）

題として一子打拔の大小を議するのは少し論じ過ぎの嫌があるから玆には單に左上隅布石との關係に對する此打拔の價値を論ずるに止めておく、

勿論此場合否多くの場合に附近の布石關係から及ぼして定石の可否得失を説くといふ事も實は動もすると埒外に飛出して居る様な感じがして如何かと思ふ時も多い、が然し定石を單に定石として説くと死物になり易いから之を活用するの好方便として常に密接の布石關係だけはのがさぬ様にして居るので、此の點は本因坊師を待つて始めて犀利の斷案を得る譯で即ち編輯の苦心も些か玆に存して居る次第なのである。

（と號）

（ち號）

（六十七、互定）

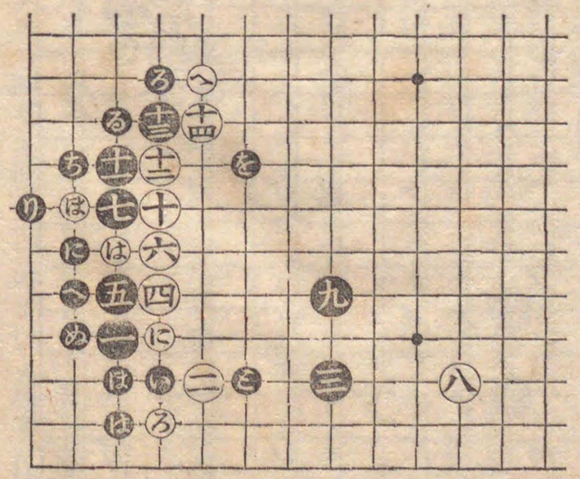
要領ヲ得タ手

（り號）白十四の次に黒がりと尖頂けたのは稍要領を得て居る手である、何故なれば本圖は前の第二十六圖の時とは少し違つて白八の一子が一路緩んで居る（一間でなく二間であるだけ）のと又とと夾の利く味もあるからである、

黒が此の隅を此く尖頂けて始末する考が無ければ其迄の事であるが苟も尖頂けるつもりならば今此の白が十四と綽て來た時に行はねば機會を失ふの惧がある、何故なれば若黒りと尖頂けずにろと行びたと假定し、其の時白はに黒に白はと截つた時黒がへと粘ぐものとすると此のへに一子を費す位ならばりと尖頂ける要もないので（黒がりと尖頂けるのは茲に勢力を加へて白出截の備へとしたのであるから）此のへとりとは稍勢力重複の嫌がある、乃で今度は白はをちと抱へ白がへと截つた時りと提り次で白はほの點に頂け黒ぬに曲るといふ手順になつて是又りの尖頂はツマラヌ手となるのである、

白がへと行びた手は黒にをの窺きを利かせまいといふ手である（即るを截つて十三の一子を提る手があるから）此手でるとアテ黒をるを粘がして（へを粘いでをる手も小サクはないが、やはりをとノゾかれる。

（り號）



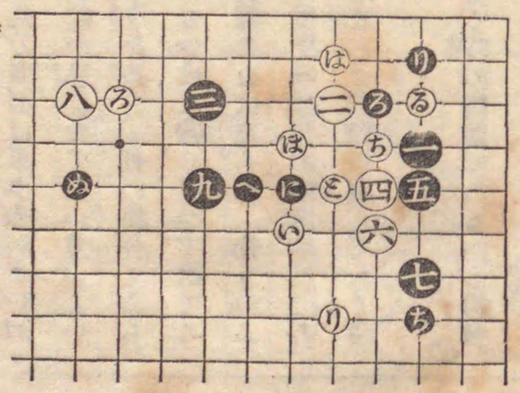
（六十八、互定）

（ぬ號）白八が一路近くろにある時はいと一間飛する手の面白くないといふ事を前に述たが、茲は八と一路緩んで居るから差支はない、然し緩着といふ誹は何處迄も免れぬ。

白がいと飛んだ手には次でると頂けやうといふ手を含んで居る黒るの尖頂は其を拒いだのである、

黒がにと頂けて二、四の連絡を絶たうとした時はと夾み黒をへと粘がしてとと連絡したのは面白い手筋である、白との手をちに打つても續げはす*

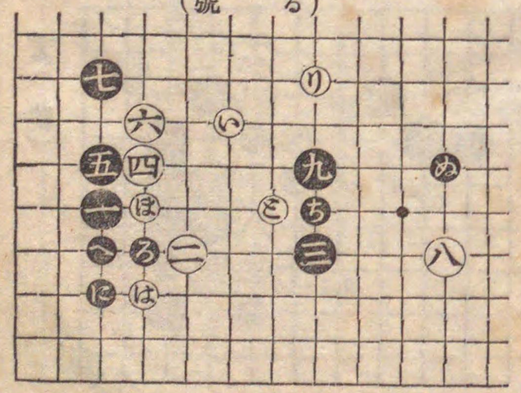
（ぬ號）



るが黒に手拍子でりと掛粘がれはから隅へ飛ぶ味を無くして終ふばかりでなく黒にとへ出られると上下兩所に缺點が出來るの恐がある。

（る號）白はは不利の手ではあるが茲に先手を取らうといふ策なのである、白りの手は黒に迫られるのを拒いだので此の手でぬと飛んで黒にりと飛ばれては此の七子の白が薄弱になるからよろしくない。

（る號）

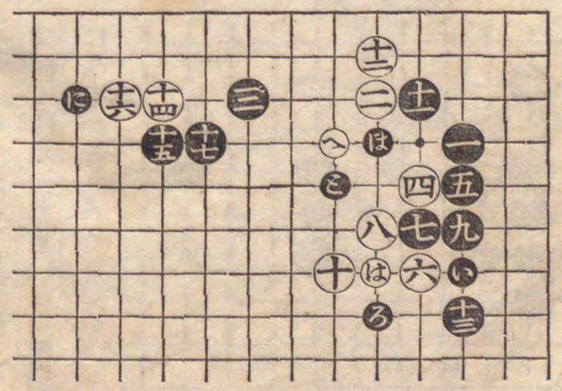


（六十九、互定）

三ノ手ヲ捨テル場合アリ

（を號）白が六と飛んだ趣向は黒をいに飛ばすまい九と行びさせて自分は絶えず一手づゝ先きに行かうといふ手である、黒七は多少白の策を破つたのである、黒が十一と尖頂ける手でろと窺きはと粘がす手があるかも知れぬ、然し此のろはの交換は問題である、打つてあるのが善いか悪いか分らぬ、何故なればろに一着黒の石があれば此の方面は多少味がよいが其の代りほに綽出した時分には白はが粘がせてない方がよい黒十五はにの點から夾んで三の一子を捨てゝ打つ場合もあらう、十五、十七と打つて三を援けるか或はにと打つて捨てるかは一に左上隅布石の關係から打算せねばならぬ（此ういふ時の左上隅の布石關係は今迄已に幾度の類型が繰返されてある所であるから講習諸君の練修用として宿題に殘しておく事にしやう）

黒がほ、とと二段に綽出すのは全く時の問題であるから機會の到來する迄保留しておく方がよい溯つて白十の手は働かして打つた手ではあるが本來言うとはと堅く粘いでおく方が確かであつたのである。



（を號）

（七十、互定）

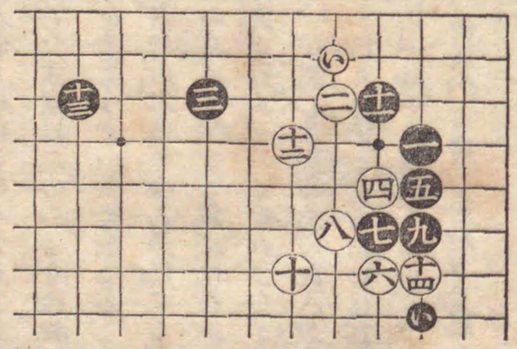
注意十二ノ手

注意書出切ノ手ヤリ

黒十三ノ手

黒七白ノ術中ニ入ル

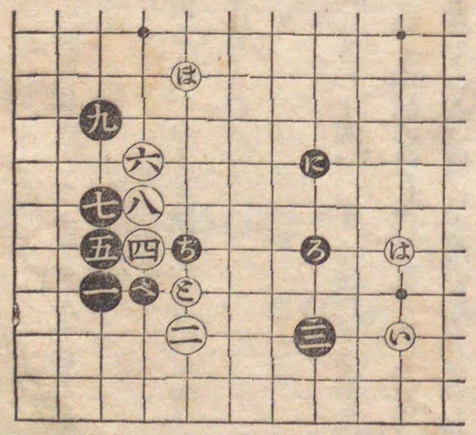
（わ號）本圖の通り白が十二と尖めば前圖の様に後に黒から綽出される患はない其の代り隅を消す手も殘らぬ、實に一得一失である、若黒が十三の手でへに飛べば白は十三から攻める手になるが、已に白が十二と打つて此の處の連絡を鞏固にして居るから之に接近した三を援けて黒が十三と打つのは當然の手である、且つ白がへと下つてないから隅が安全であるため白に十四と押へられても甚だしい苦痛は感せぬといふ意もある。



（わ　號）

（か號）黒七は白六の策に陷つた形がある、然し八の點へ綽込むと其だけ白の勢力を増さすの恐がある、白は十の手でい黒ろ白はに黒にの後はと走る位の者であらう。

『注意』二間夾斜走掛に五の手でへに出てとと抑へた時ちと截る手があるが、定石の部に編入するのは問題であるといふ譯で且く保留して他日の機會を俟つ事とした尚之に就ては餘論を參看せられたい。



（か　號）

（七十一、互定）

「一間夾返」

（第二十七圖）此の一間夾返しは一間夾の時と大差ははない、唯一間夾に比して一路緩んで居るから白はとに打つて白二を出やうといふ味がある位のものである。

「註」但し此はとに打つて必ず白が出るといふ譯ではない、唯出る味があると斷つておくばかりで、若し實際に出るとすれば大抵な場合は非常の不利を犯さねばならぬ。

白八は更に一路九の點に押して然る後八若くはいと打つ方がよい。

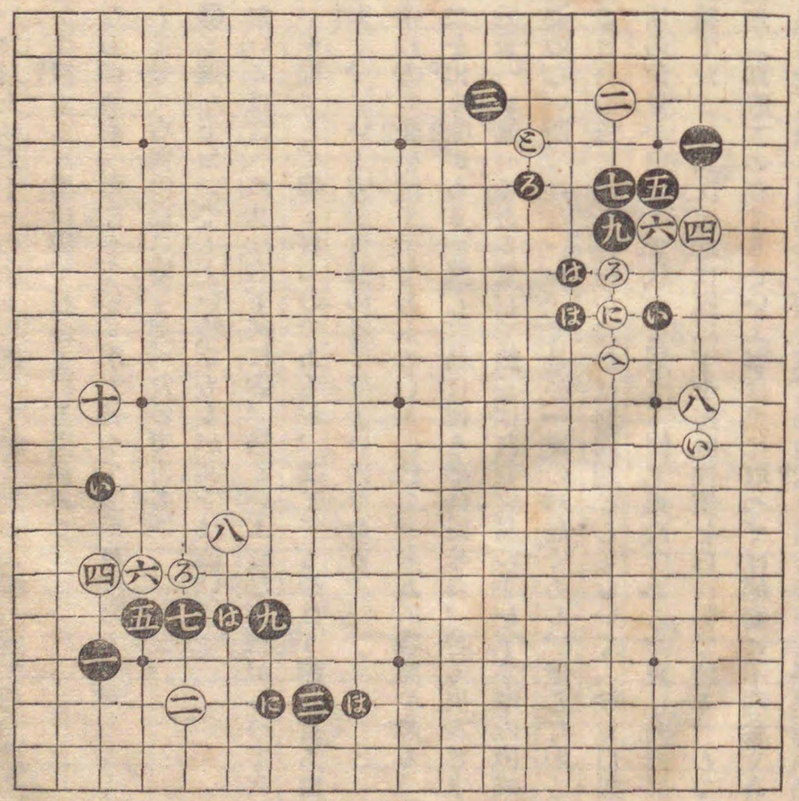
「註」抑白が最初四と狹く一間に夾返した主意は二の一子を犧牲に供して四、六、九と茲に勢力を加へておいて次に八の方面へ廣い地域を造らうといふ策戰であるから本圖の樣に黑に九と曲られて此折角の地が手薄くなるといふ事は當初の志望と少し矛盾する譯である、假に本圖の通りなつたとしても、前述の理由からして黑九の時は手拔する譯には行かぬ必ず之に應じてろと綽ね黑白にに黑白へと運ばねばならぬ、必然此く運ぶものとすれば白が八にあるよりは更に一路廣くいにあつた方がよいといふ道理にもなる、が然しながら此の白八が此く三間拓である時さへも場合によつては黑が九と曲る手でいと打込み白九黑ろとならぬとは言へぬに、マシテ八が一路廣く四間にいと拓いてをる際は尙更黑いと打込がないとは限らぬから、やはり前說通り當初に於て白は九に一勢力を加へておく必要がある、尙又いと廣く拓かうと思へば附近の布石關係をも能く調べなければならぬ。（以下の諸圖と參照）

（七十二、互定）

（第二十八圖）一間夾の場合であれば、白が此く八と斜走した時は先づ此斜走の一手を悉に歸せしめる爲め九の手を以ていと打ち白にろと應じさせて然る後はと行びておく手であるが（詳細一間夾の一間夾返の部參照）

本圖は二間夾であるから單に此く九と飛ぶのもよい或はいと打込み白にろと打たせてから九に打つても惡いといふ事はない。

「註」黑三がにの點に一間夾の場合は白八（若くはいろの交換の後）に應じ黑はと行びるが、二間（本圖）若くは三間はの時は此く九と飛ぶ手が理である



（第二十七圖）

（七十三、互定）

（第二十八圖）

（第二十九圖）　白が已に十と廣く拓いた以上は黒十一の曲りに應じて㋑と綽ね黒㋩白は黒に白ほの手順を履んでおかねばならぬ、若玆を手抜すると黒に㋺と打込まれる患がある。

「註」黒十一の時白若し手抜する考ならば無論一路控へて㋥と窄く打つて置かねばならぬ。黒十一は㋩と白から出られる味を消して兼て右側の白に響を與へたのである。

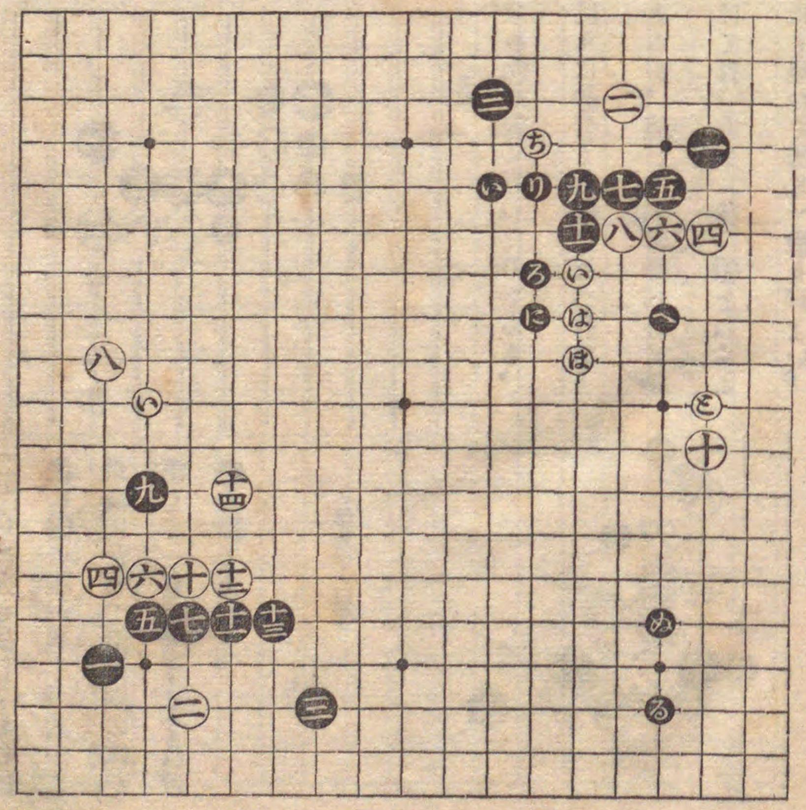
「註」單に㋩の味を消すだけならば㋑と飛んでおいてもよい樣であるが其では緩い。黒十一と打つ手で單に㋑と打つ理が無いとは言へぬ其は右下隅に㋭、㋬といふ樣な布石があつて次で㋺と打込まうといふ策戰の時に其が準備として㋑と打つのであるが、其とてもやはり㋺と打ち白に十一へ行びさせて手順を以て㋬を塞ぐ、といふ方が自然の着手でよいのである。

「註」十一の曲り若くは㋬、㋑の着手は㋩の味を消す手であるといふに就て、素人的疑問が起る、其は既に前圖の説明で「白は此の二を出る味があるが然し容易に出る事は出來ぬ、若も出るとすれば非常に不利を犯さねばならぬ云云」と述べてある果して然らば白の容易に手を下す事の出來ぬ點は黒も亦急いで備へをする必要のない所ではないか、と是亦一應の理屈である、然しながら彼我の立場といふ事から考へて見ると白が急に動くか動かぬかは別問題としておいて（玆は白黒といふ立場を言ふのではない此の所の位置が白と黒と代つて居ても同じ道理である）兎に角白二は已に捨てられた石である、已に捨てたといふ反面には四以下十迄の代償を白は得て居る、して見ると苟も此の白二が動き得る餘地（即味）の存するといふ事は黒に取つては絶對に不利益である、便ち此處一局部の定石として黒は能ふ限り自然の手順を以て此の味を消すといふ事は極はめ

て重要である。

（第三十圖）白が十二と打つ手で八から㋑と尖んだならば、黒は十二の點に曲つておくがよい。

「註」白十四に應じて黒は如何打つか、若此の九を動く要があれば㋑の點に（白八の肩）打つて出るのであるが、其は全く場合問題で、ヨシ動き得らるゝ餘地があるとしても動くが利か不利か、若し動くとすれば其の影響を如何う受けるかといふ事を能く考へた上でなければならぬ。



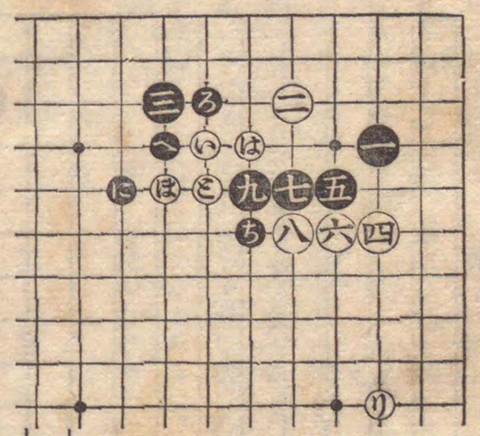
（第二十九圖）

（第三十圖）

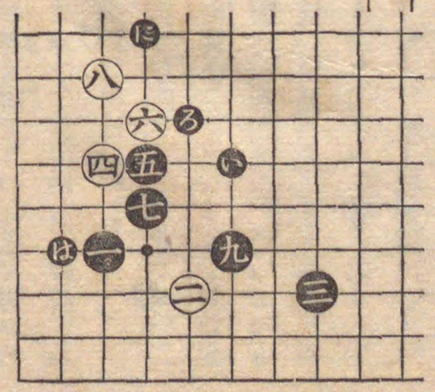
（第三十一圖）白が㋑と打つて二の一子を逃出さうといふ手は右側㋥方面に白の勢力があつて黑㋒の曲りの影響を受けぬ時でなくてはイケヌ、然し其とても本來は此の逃出さうといふ手はよくない、其は前二圖で説明した理由に基くのである。

「註」是は只（若出るとすれば）此ういふ手順になるといふ事を示したに止まる。

（第三十二圖）黑五は八の方面に前圖迄の樣な大地を造らせまいといふ趣向で白を低くからしめる*ため此く頂て打つたのである、黑九は㋑若くは㋒と打つ打方もあるが、然し本圖の樣に九と掛けて打つ方が（後に㋙をねらふ味も殘つて居る）治りがよい。



（第三十一圖）



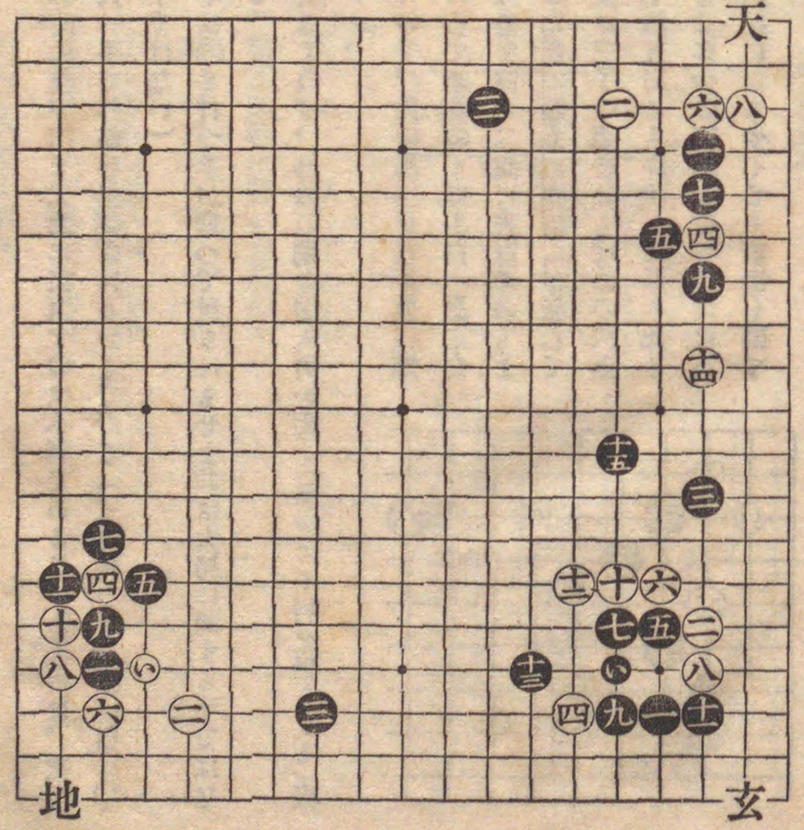
（第三十二圖）

「註」單に九と掛けておけば後に㋙の覗が利く、其から最後になつて黑が隅の味を消して一着を費すとすれば㋚の點であらう。

（參考圖天）二間夾若くは三間夾の時は白は此く六と頂けて打つ事もある、其は振り替つて先手で隅の活を確にしやうといふ趣向の時である、黑七は棋の理から言へば九の點から提りたいものである。

（地）白十の手で㋑と綽れば黑は十の點へ抑へておけばよい、然し以上二圖は變化が多いから好んで打つ可き手ではない。

（玄）黑が五と頂けるのは要するに紛爭を招く因である、此うなつては棋が六ケしくなる、やはり㋑と尖んでおくのが一番解り易くてよい。



（參考圖天）

不利

利不利は立場に依り異る

「一間夾返」

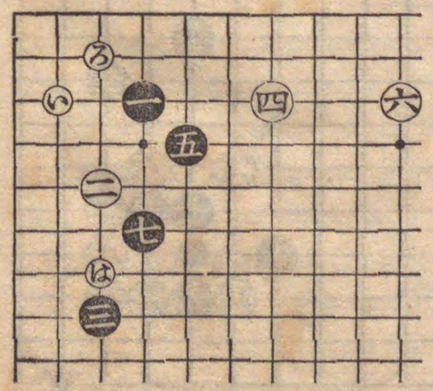
（第三十三圖）一間夾若くは二間夾の時に白が四と二間に夾返すのは不利であるといふ理由は、次で黒五、白六の交換を遂げた後七と只一手で外部を封鎖されるからである（三間夾の時なれば白はは と飛んで容易に活られるから悪手ではない）

「註」ヨシ此の二間の場合はいの若くはろと打つ手が殘つて居るにもせよ其は大局に關する手ではない、言はゞ侵分に等しい手である。

一間夾及二間夾の場合に白が此く夾返すのは、特殊の場合即ち何か此く（多少の不利を犯しても）夾返すを必要とする際でなくてはイケヌ、

然し此は白としての立場から言つたので、此の應接が若も黒白地を換へて居たならば、大に趣を殊にして來るので即ち白一黒二白三と二間に夾んだものとすれば黒は是を四と二間に夾返すのもよい手となる、何故かと言へば、黒は先着の効力が盤面に存在して居ると見なければならぬ或は二子或は三子の場合ならば此の夾返しが益々よい、其の理由は布石三子第五局にも詳説した通り此く交換する打方は此の局部に就て見ると多少の不利を蒙る譯ではあるが、棋が早くキマッテ解り易い結果になる少くとも紛擾を釀すの患はないからである。

（第三十三圖）



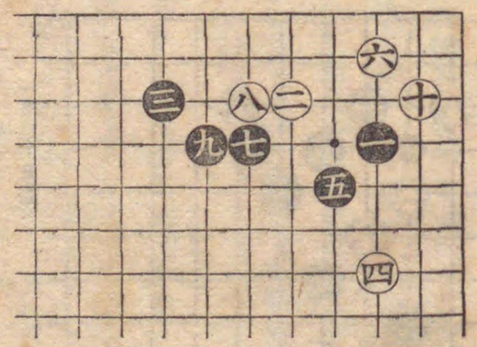
白六ト隅ニ走ル場合

（第三十四圖）黒が六と隅へ走るのは右側下方面から黒に夾れる手ありや無しやと調べた上でなくてはイケヌ、即白四が苦しむ氣遣ひのない時に黒の根柢を奪うて攻る手である、然し其でも尚三間夾の時よりは此の方が悪い即ち九と先手で樂に鎖されて終ふからである。

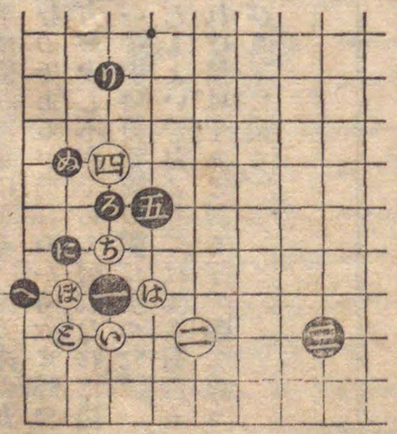
『參考東、西兩圖』此の二圖とも着手の理由手順等凡て一間夾と大差はない、（一間夾二間夾返しの部參照）

「註」（西圖）の時、白いの黒るの白はは黒にの白ほの黒へへの時白がとと粘げば黒はりから夾んで打つ、若又白とと粘がずちと提れば黒はぬと下から綽て打つ手は「一間夾の時と同斷である。

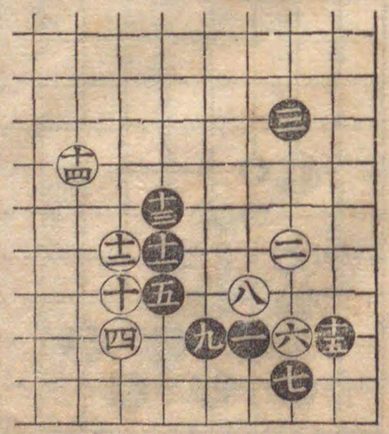
（第三十四圖）



（參考西圖）



（參考東圖）



西圖ニ於テハ第八圖參照

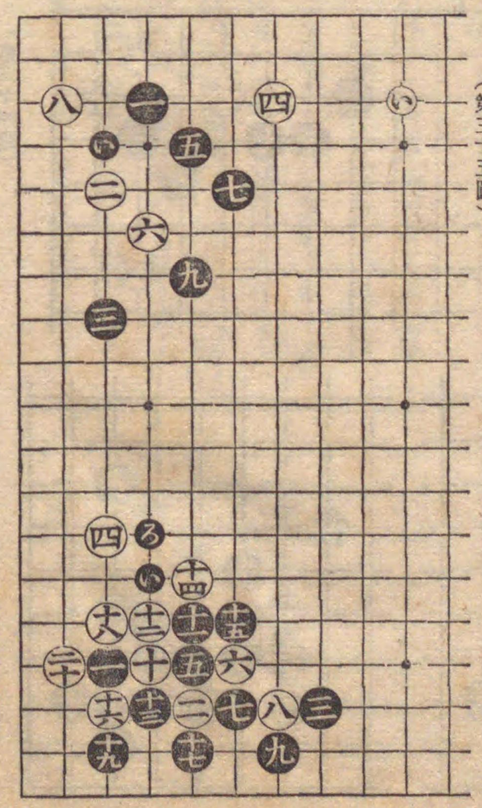
（第三十五圖）白六を直に此く打つは無理である。

「註」白四から先づ㋑と二間拓して此の石の姿勢を整へておいて然る後に行く可き機會があつて六と出るのならばよいが、若し然らずして附近の關係をも考へずに、尖出すのは善くない、何故なれば五、七と玆に黑の勢力が加はるだけ其だけ白四が壓迫を感ずるからである。

白八の手を若し九の點に來れば黑は㋑の點から白四を夾攻めるがよい、若又已に㋑の點に白の二間拓がある後であれば黑は㋑と尖頂け隅の根據を造ると共に白を浮かす手段に出るがよい。

（第三十六圖）黑が五と頂ける手は征の善惡による、征で此の五を提る事が出來れば十と綽込むのである、兎に角本圖は白の方が少し不利である何故なれば黑の一子を打拔いた結果四の一子が勢力重複の弊に陷つた。

「註」黑白地を換へればまだしもよい、白としては頗る面白くない（若此場合白四がなければ黑は十九と綽る手で㋑と截り白が二十と提つた時㋺と行びる手に出る）



（第三十五圖）

（第三十六圖）

「三間夾返」

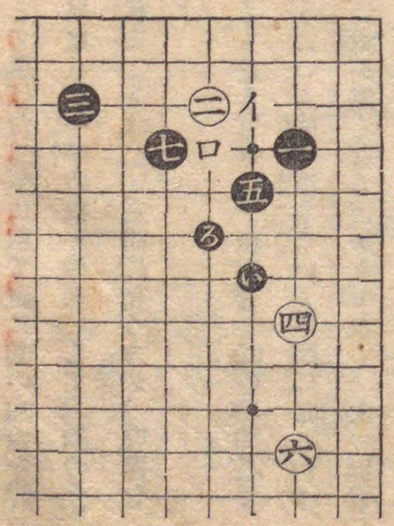
（第參拾七圖）白が四と三間に夾返した時黑は五の手を何う打つかと言ふと（イ）と尖頂るか、（ロ）と頂けるか或は本圖の通り五と尖むかの三種であるが、（イ）、と尖頂或は（ロ）、と頂けられた時の應接は後章に詳解する）其内（イ）若くは（ロ）の二通りが比較的良い手で、五の尖みは稍緩慢である、黑七の手で㋺と白四の肩側から打つ事がある、其は前の「二間夾返」の時に七と掛ける手で㋺と雁行したのと稍同樣の策を含んだ着手である。

此の「三間夾返」と前に說いた「二間夾返」とには何程の相違があるかといふと、夾返すといふ主意に於ては大差はないが、強いて其の差點を求めると

一、夾返した白からして、後に（一旦捨石とした）白二を利用して隅へ打込む其の味に多少の相違が出來る（盤らうと思ふ時に二間夾返より一路遠いだけ不便を感じる）

一、黑一、五、七、と此く堅固になつた結果白四が二間にあるよりは三間にある方が（堅固な黑に接近せぬだけ）白の利益である、

（第參拾七圖）



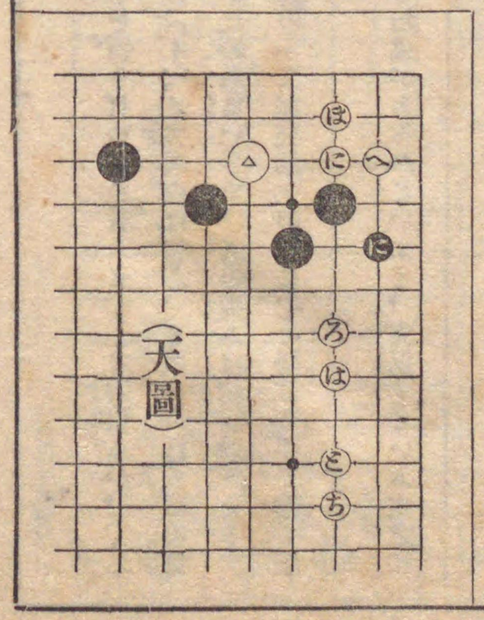
——（互先定石）——

に ノ一着ノ最初者イ二間夾返レト三間夾返ニ依リ異ル

（參考天圖）　前頁に「二間夾返」及「三間夾返」の差點として擧げた二項に就て更に其の理由を詳述すると、二間にもせよ三間にもせよ已に白が夾返した結果は△印一子の白を捨石として本圖の如く黑の形が鞏固になる結果、夾返した白一子が㋺と二間に在るよりは㋩と三間に在る方が、堅固な隅の黑に接近せぬだけ其だけ働いて居ると言ふ意味になる、

次に「二間夾返」より「三間夾返」の方が白に取つて便利とも見る可きは、白が若し㋺の二間夾であれば、黑は時機を見て㋑と一着を備へ白から隅に打込まうといふ味を消すといふ手順になるかも知れぬ、其の時㋑の一着のため△印から動く白の有する隅の味が無くなるばかりでなく、其の影響は引いて多少の感じを㋺、㋩の二間拓きの白にも及ぼす事になる、

然るに白の夾返しが㋩の三間であれば黑からよし㋑と打つても其の響を受ける度が薄い、隨て黑も亦、單に自己の備のみに偏つて白に響かぬ緩い㋭の手は容易に打てぬ、といふ趣がある、と同時に白から隅に（㋑、㋩、㋭、の三點の何れかへ）打つ味も（殘つて居る）消えぬといふ意味合も存する譯である。



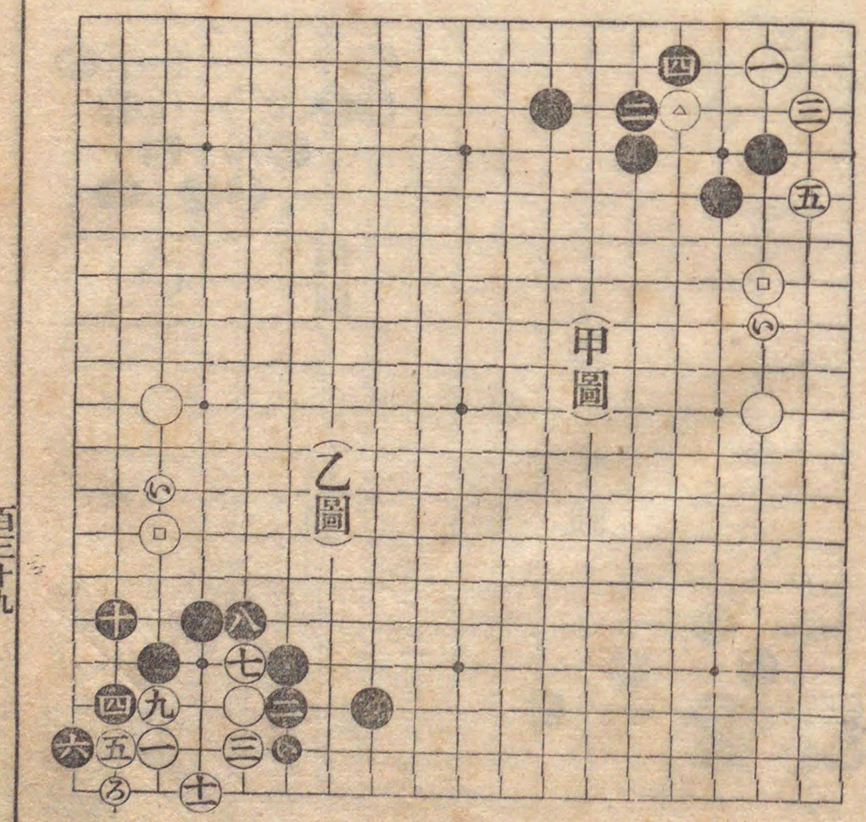
（天圖）

此差異ニ注意

「註」　前圖で說いた打込みに就て以下數種の參考圖を掲げて其の手順の大略を示して置かう。（二間夾返及三間夾返）

（甲圖）　白が一と走るのは活きやうか、盤らうかといふ手である黑が二と押へて來た時三と尖むのは盤る手である本圖の如く二間夾返の時は是でよいが若（□印）白が一路遠くいの點に三間夾返であれば三の手は宜しくない、即次圖の通りの手順で活ねばならぬ。

（乙圖）　白十一の後黑がいから來ればろに、若ろから來ればいに活るのである、然し此の二間夾返の時には、やはり前圖の通り盤る方が利である。



（互先定石）

（丙圖）白一の時圖の通り黑が二と打つのは白を盤らせまいといふ手である、其の時白は止むなく本圖の手順に運んで活るの外はない、但し此の手順は「夾返」の二間たると三間たるとに關せぬのである。

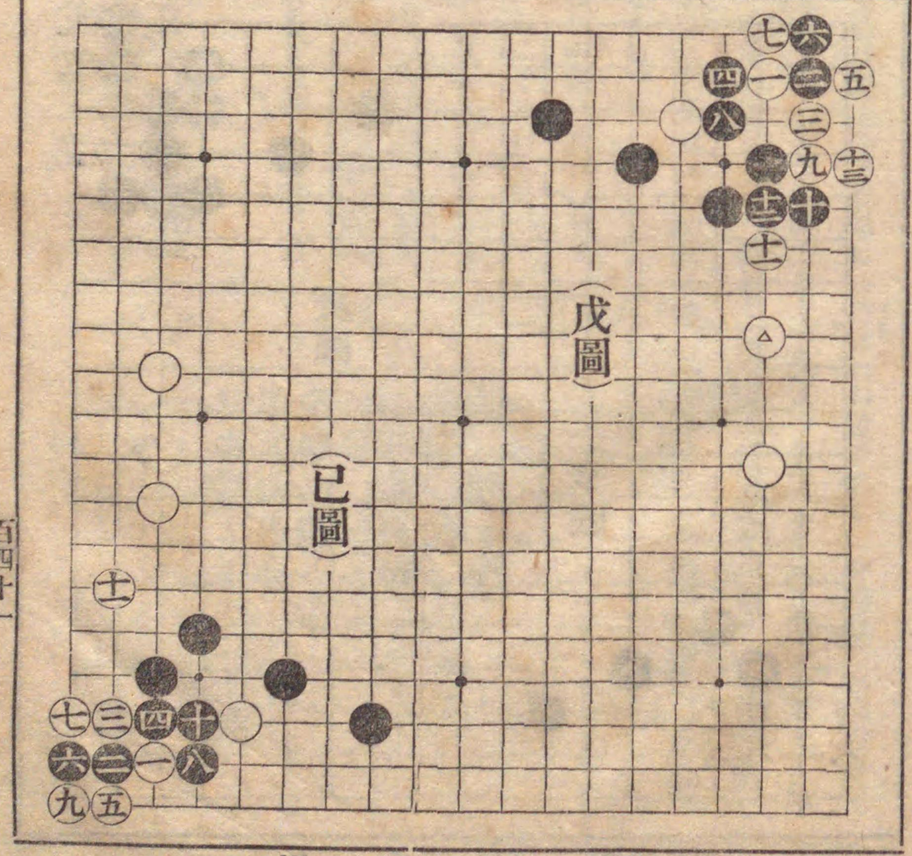
（丁圖）黑が圖の通り二と酷しく頂けて來るのは、玆に犧牲を拂つて白の盤ると活るとに拘はらず△印の一子を取込めて地を造らうとの意である。

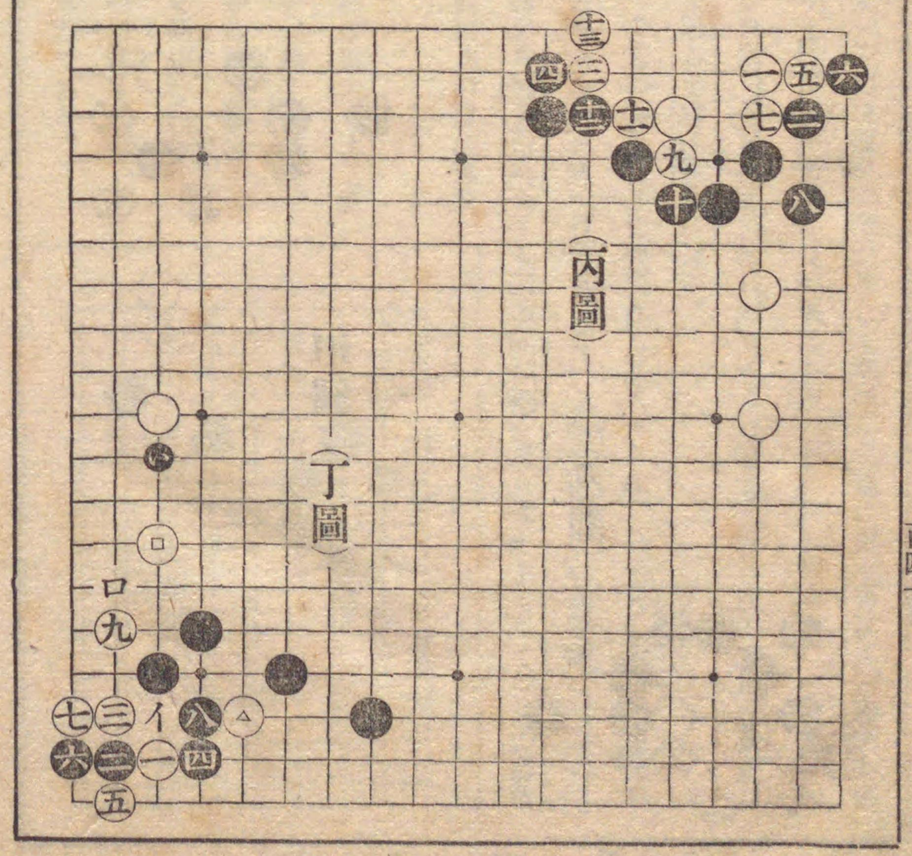
（戊圖）本圖の通り三間夾返しの時に白一、黑二、白三の次黑が四と夾んで來た時は圖の如く運んで活るの外策はない、但し△印の距離が二間夾返に比して一路遠いだけ十一と覗く手が出來て多少働いて居る。

（己圖）圖の通り黑が四と截つて來た結果は尙且前戊圖の通り活る手もあるが盤りが出來る理であるから黑二、六の二子を提つて十一と盤る方がよい。

黑四の手の說明

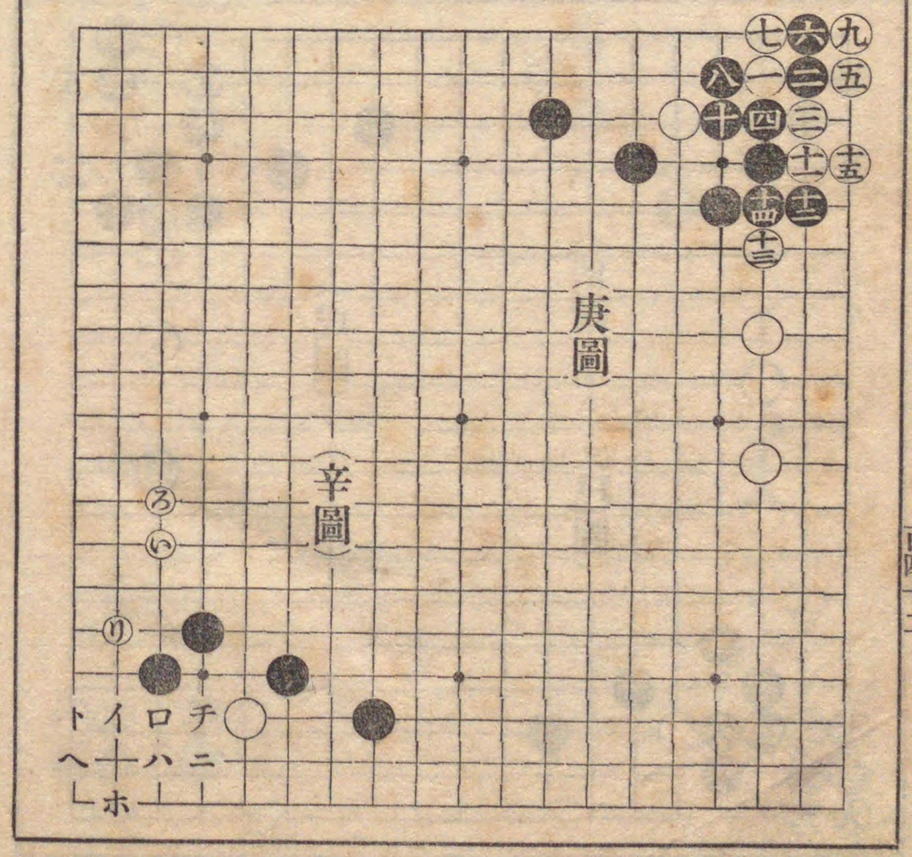
丁圖及戊圖の樣に黑が四と夾んだのと、己圖の樣に四と截るのとは果して何れだけの差があるかといふに、先之を二間夾丁圖に就て言ふと黑四の手で（イ）に截つてあつて二、六、の黑二子が提れた後であると白は（□印）から（ロ）と尖んで盤る事が出來るが本圖（丁圖）の樣であると此の（ロ）の尖が利かぬ即九と盤らねばならぬ、此（ロ）の尖と九の斜走には後に（△）邊に味の殘る差がある）して見ると黑が四の手で（イ）と截らずに四と夾むのは、二間夾返しの時なれば尖み盤りをさすまいといふ手、又三間夾返の時なれば盤らすまい、隅に活かさうといふ意である。





（庚圖）　前圖でも說明した通り黑が此く四と截つて來た以上は白は本圖の樣に活るとも又は五の手を六の點から打つて前圖の如く盤るとも隨意であるが、大抵は盤る方を利と心得ておけばよい、然し活るとすれは二間夾返の時よりは此く三間夾の時の方が、後に十三の飛覗きが利くだけワリ合がよい。

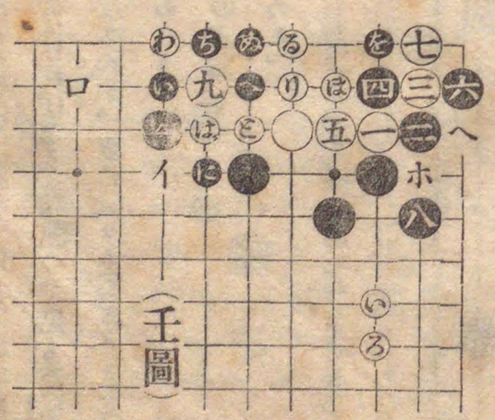
（辛圖）　白が（イ）の點から打つのはいと二間夾返の時に限るので以下應接は符號の示す順序通りであつて結局（り）と盤るのであるが、此がろの三間夾返の時であると（イ）は絕對に不可と心得ねばならぬ。



（壬圖）　白が本圖の通り一と頂けるのは考ものであるから容易には行はれぬ策である（詳細は三間夾の條下に讓る）黑が四の手で五の點からアテ込んで白四、黑ほ、白（ホ）黑八、白（へ）と隅に活かす手は△印黑が此く二間夾の場合は黑の不利と心得ねばならぬ、黑が本圖の樣に四と截り六と綽ね八と掛粘ぐ手は白の夾返しのいであるとろであるとに關はらぬのである、白が九と走つた時黑は附近、殊に左方の關係を見た上、手を下さねばならぬ、

（イ）の截り及（ロ）の方面の關係上白に有利と見れば黑はいと抑へる手でをと押へて三、七、の二子の白を提つておくが現在の利益である、然し左方の狀態が（イ）の截も恐るゝに足らず、結局白はへぬちの三子を提つても眼を造る餘地がない、と見極めた時は白九に應じていと酷しく抑へ白は、黑に、白ほ、黑へ、白と、黑ち、白ぬ、白る、黑を、と運ぶのである、

此に至つて白は、溯つて最初一と頂ける手は左方の相互の勢力關係をよく考へた後でないと容易に打てぬ手であるといふ道理が解るであらう。



要するに夾返した後、一子の捨石を利用して隅へ打込む手は、決して急いで着手す可きものでない只之を實行するの時機、之を利用するの機會といふ點に注意しなければならぬ、隨つて黑も亦機を觀てろの邊に備へて此の味を消すといふ事に注意せなければならぬが、更にヨリ上の手として、打込んで來たならば其を利用して手段を講じるといふ工夫もあらう。

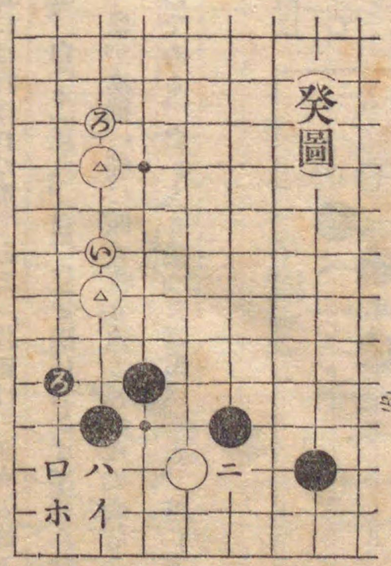
（癸圖）　乃ち前の諸說を概括すると白第一着點は（イ）（ロ）（ハ）の三點

◉白（イ）の後黑の應手は（ニ）の押し（ロ）の尖（ホ）の頂の三種である。

◉白が（ロ）と初に來た時は、黑は（ハ）と押すの一手である、但し是は二間夾返の時に行ふ可き手で三間の時は不可である（切にするより途がない、殊更好んでかゝる損失を犯す要はない。

◉白が（ハ）と頂ける手は二間夾の場合は先づ行ふ可らざる手である。

最後の注意は、ろ邊に勢力の加はつた結果は（△印）若くはいろの二間拓の方面に不利の影響を及ぼして、隅で小サク後手活位した利益と引あはぬ樣な事があるといふの一件である。



（癸圖）

○（第參拾八圖）　黑が五と尖頂て六と立たしたのは彼の根據を奪つて自己の地盤を堅固にした手である事は言ふ迄もない、黑に尖頂られて白が六と立つのは是又普通であるが、場合によつては白は六の手を手拔する事もある、此等は已に屢々布石其の他で詳述した筈である、

黑七の手は時として㋩と尖む事もある、其は次の第參拾九圖で詳解する通りである、本圖の樣に七と一間に拓くのは地域を定めて一隅の治りを決めて置かうといふ趣意である、此く七と治つておく時の附近の布石關係は如何かといふと、多くは左上隅（此の定石が圖の通り盤の右上隅に行はれた時と見て）に黑の備へがある時に此く打つので、其の趣向は白に八と掛けさせて三の一子から㋩とでも飛出さうといふのである。

（一、二、三、四、五、六、七、となつた次は、大抵の場合白は八と掛けるのが定石となつて居る）

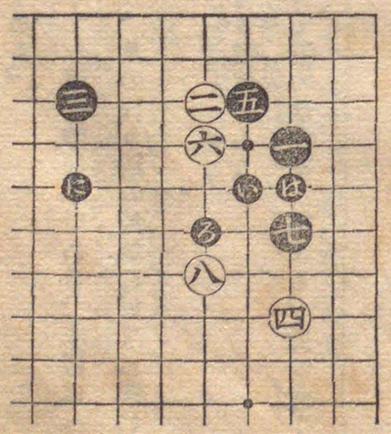
△問　白に八と掛けられた後黑からろと頂けて出る手ありや、

○答　此の處は白から㋩の點へ尖み黑が㋩と粘いで居る處と見ればよい、已に白㋩黑㋩の交換があるものとすれば黑からろに頂けて動く手はない譯である。

△問　白八の意は黑三を攻るにあるか、

○答　黑三を攻る考ならば初より四と夾返すの要なし即四の手を以て㋩の點に掛ける例の手によるのである、此の手は三子の黑を隅に封鎖すると同時に二、六の二子の備へとしたのである

（第參拾八圖）



○（第參拾九圖）　黑七の尖みは左右兩方の白に利かして打つ手である。

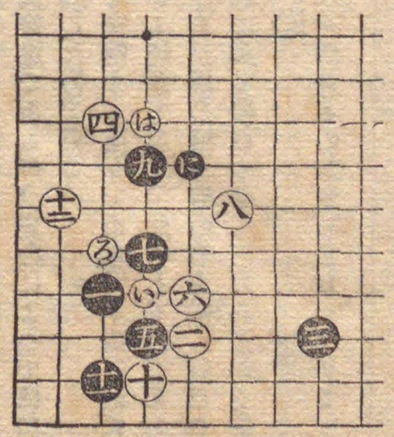
「註」　前の第三十八圖の七の手は專ら己を堅くして地域を確守する消極的な手である、本圖は一方四の白に響かし一方二、六、の白を攻る積極的の方針に出た、其の代り隅の地域に於ては明に損をする順序になる、是又一得一失致方はない。

白が十と綽ね黑に十一と抑へさせて十二と走つた手順は注目す可き價値がある。

「註」　白十の綽によつて㋑のアテが出來、白十二の走りによつて㋺の截斷點が出來る、此の先手を利用して黑地を削り、一方は八の斜走によつて二、六の凌ぎとし、又一方には十二の走りによつて四の一子の凌ぎをつけた手順は寸分も隙のない打方である、但し黑五以下十一迄の應接も正々堂々たるものである。

（後に至つて白からはと押し、黑ににと行られる手は考ものである、即此のはにの交換は塲合と策戰の如何によつて利か不利かは容易に斷言の出來ぬ處である。

（第參拾九圖）



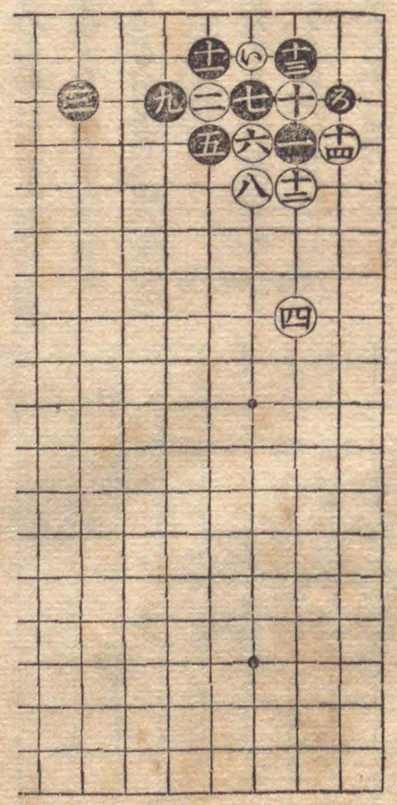
○（第四拾圖）

「註」　尖頂けた後の應接は前二圖の通りであるが若黑が頂けて來た時は白は如何之に挨拶す可きか、以下示す五圖は之が解答である、白が六と綽込むのは五の一子を征に提り得る時に限る事は已に屢々陳べた所である。

對隅征の關係を見て此く白が六と綽込んだに關はらず黑が八より抑へずして七と截るのは九からアテて二と一との「フリカハリ」を打つ趣向の時である白は十二の手を以て切種の如何によりては㋑と打つ事もある、其時黑はろに綽ねて飽迄爭はねばならぬ、本圖は互先としては黑少しく不利である、二子ならば是でも可し。

「註」　即此くなつた塲合白に㋑と切に來られ二の點を粘がねばならぬ樣なれば初から七と打たぬ方がよいのである。

（第四拾圖）

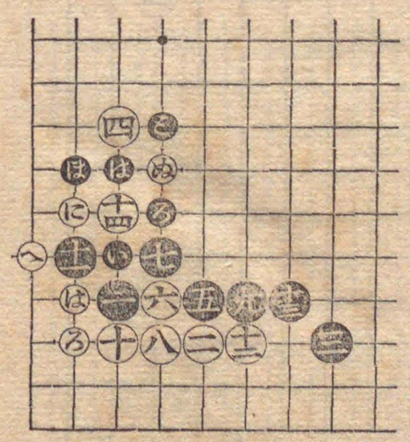


——（互　先　定　石）——

○（第四拾壹圖）　本圖は「一間夾」の部の三間夾返しの條と同趣向であるから彼條を參看されたい乃ち白十四の手は黒に㋩と粘がせて㋣と下らう、十一の一着を愚に歸せしめやうとの手段である、黒は白十四に應じて㋩と粘ぐか㋣と行るかの二途である、唯茲に注意す可きは、白十四の手を以て㋪とアテルの事は太だ善くないといふ一事である、何故なれば㋪とアテ黒㋩と粘いだ結果は茲に黒の鐵壁が築けた譯で此の堅壁に接近して居る四の一着は黒の堅壁に對しては何等の感じも及ぼさず白四自身が却つて危險を感する狀態に陷るからである。

「註」　本文にもある通り一間夾の三間夾返しと殆んど同樣であるから重複の嫌はあるが、便宜上要を摘んで言ふと、白十四、黒㋣、白若㋩の點を截らば黒は㋫とアテ込み白に、黒㋬、白へ、黒ととなつて四の一子が腐つて終ふ、若又白十四、黒㋣の次に白が㋬と綽れば黒はにの點へ行び、そこで白は㋣と下らねばならぬ手順となる、（白十四は粘がさうと打つ、黒㋣は粘ぐまい截らさうと打つ白又㋬と綽ねて截るまい、と行く此ういふ處は實に妙味津々たる處である。）

（第四拾壹圖）



○（第四拾貳圖）　白十二の時黒が十五と行びる手を拔いて十三と隅へ綽るのは全く塲合の手である

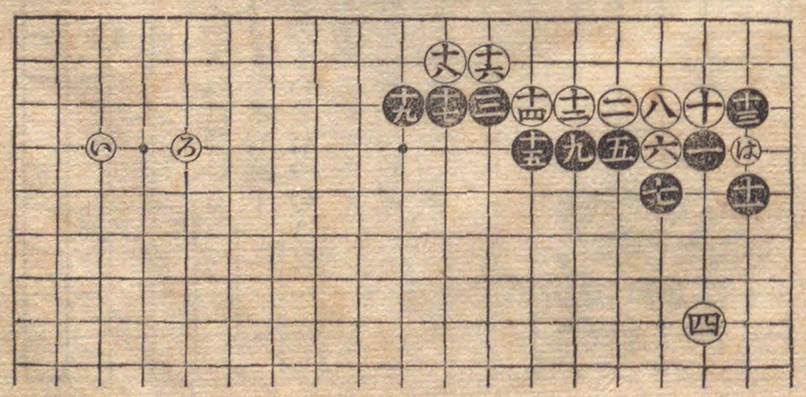
「註」　黒十一の時若白がはとアテるか十三へ下るかすればよし、さも無くば都合によりて何時でも十三に綽ねやうといふ意を含んでをるのは明瞭である。

若し左上隅に白い、ろ、の如き布石がある塲合本圖の樣な結果となつて黒の鋒が十七、十九と加はるだけ左上隅の勢力が減じる譯で、若又左上隅の白が位置低く拓いてをる塲合は此の位置低き活石の連絡は太たしき愚である。

「註」　活石と活石との握手は碁に於て最も無意味である。若し又左上隅に黒の配石がありとすれば此の十七、十九、と相待つて黒の勢力益々雄大を加へる事になる。

「註」　白十二の時黒が十三と打つの面白からぬ塲合は、と言へば左上方面が黒の地になる見込の時である其時は即十三の手で十五と緩めて打たねばならぬ。

（第四拾貳圖）

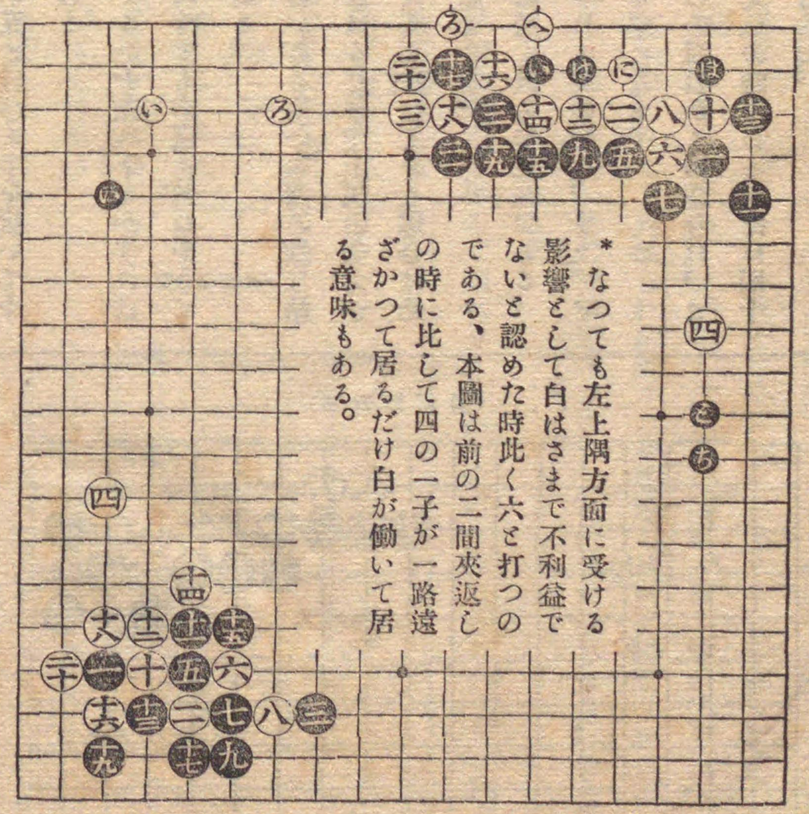


——（互先定石）——

○（第四拾參圖）前圖の變化として本圖十七以下の樣な打方もある、即ち十七と二段綽して白の勢力を重複せしめ先手を取つて㋺若くは㋩から白四を攻る手順になる。

「註」黑十七以下の手段は左上隅に（圖の如き）白が低くある時に限るのである。

○（第四拾四圖）白六と打つ事は必しも四の一子の有無に拘はらす、又十と綽込む手の有無に關せぬので唯此く綽ねた上は黑から七以下の本圖の如き手順に運ばれる事は覺悟の上でなければならぬ即ち此ういふ結果と＊



（第四拾參圖）

＊なつても左上隅方面に受ける影響として白はさまで不利益でないと認めた時此く六と打つのである、本圖は前の二間夾返しの時に比して四の一子が一路遠ざかつて居るだけ白が働いて居る意味もある。

（第四拾四圖）

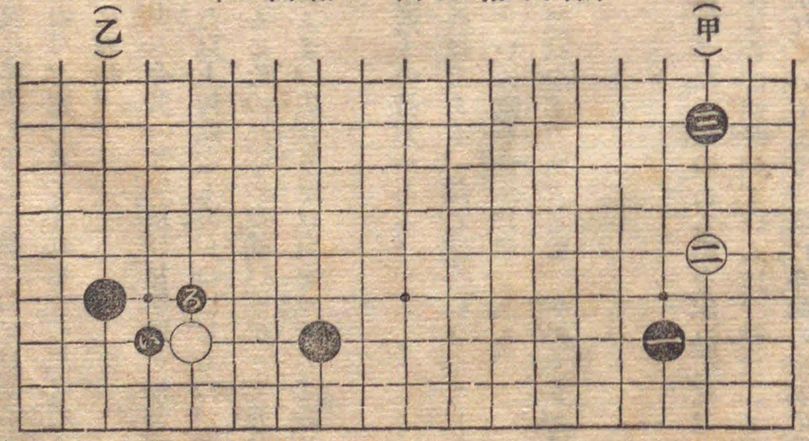
黑ヨリ白ヲ攻ルニ二途アリ

「手拔」の部

「註」（甲）の黑小目の一、白目外の掛二、黑二間夾の三、以上の三着を數字で示さずに之れを（乙）の如く○㋺等で示した理由は是れは（一間夾の時にも一寸言うた筈であるが）白が手拔した時直に黑から攻掛るもの、との誤解を防ぐための注意として、唯此ういふ風になつて居る時（即手拔の形の時）黑からは此く打つ可きもの、白は又此く應ず可きもの、といふ定則と其に含む道理とを示したのである（直に打たうとも又他へ着手して便宜自分の手番となつて打たうとも其は一に黑の任意である）黑白地を變換しても亦道理は一つである。

本圖手拔きの形の時黑からは圖の通り㋺と尖頂る手と㋩と頂ける手との二途である、尖頂るのも、單に頭へ頂けるのも、白を攻るといふ事は同樣であるが、此く㋺と尖頂るのは白の根據を奪うて之を浮かして攻立てやうといふ趣意の時である。

（第四拾五圖の附圖二）



白二、黒三ハ常形ナリ

白二ト立テタル上ハ凌ク捨ルナラハ一目ニテ捨ツクシ

白四ノ手三通

九良好

イノ頂越ニ注意スルヿ

○（第四拾五圖）　黒から一と尖頂られた時場合によつては白は更に手拔して之を捨てぬとは限らぬ之は布石法の部でも屢々詳解した意味であるが、大抵は應じるので、應じるとすれは先づ二と行るが普通である、白二の時、黒は必ず三と酷しく煽つて攻めねばならぬ。

「註」　此の手を緩めて㊀と拓くといふ樣な事は、當初二間に夾み今又一と尖頂けた趣旨を沒却するもので矛盾も亦甚しい不條理の着手である、白は二と立つた以上何處迄も凌がねばならぬ、若し捨るのならば、初一子の時捨るがよい、二と立つた後であると此の二子の取捨は關係が非常に重大になる、之を指して「重い」と呼ぶ、即ち黒の方から言ふと、尖頂る手は白を重くして攻め立てやうといふ手である。

黒三と打つた時白は如何之に應じるが良いか、いとろとはと三通りの打方がある。

○（第四拾六圖）　白が四と來た時五と頂け以下圖の通り運ぶが普通である、然し場合によつては黒五の手を㊀と尖んでおく事もある、其は次で六の點から煽らうといふ意を含んだ手である、

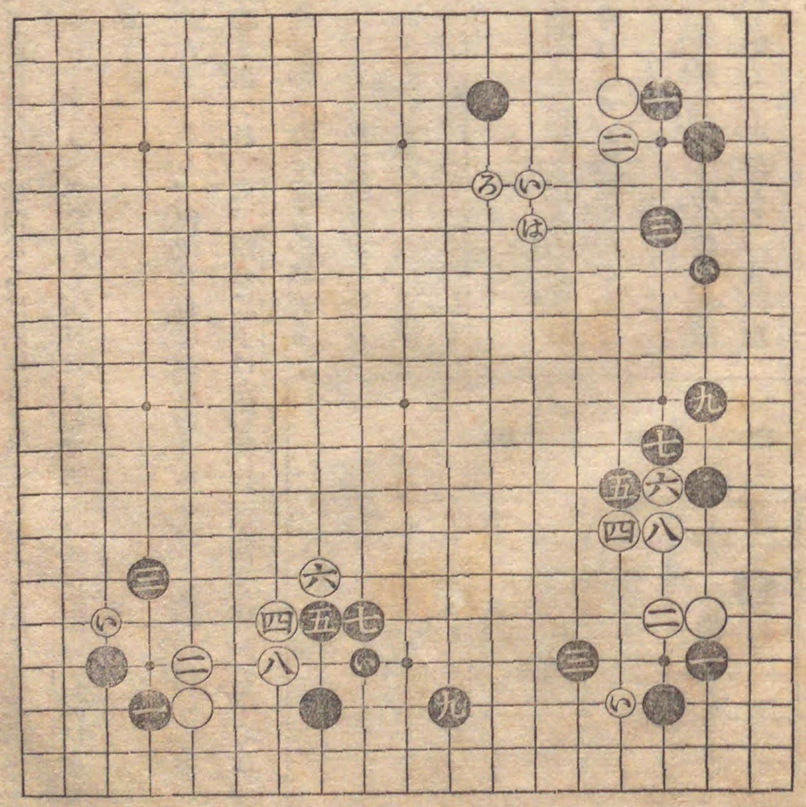
○（第四拾七圖）　白若六の手を圖の通り綽込んで來たならば、黒は七と打ち九と堅く掛粘ぐが好良の應手である。

「附　說」

○第四拾六圖及第四拾七圖の樣な形になつた後、白からいと頂越される味のある事を忘れてはならぬ、然し今此の兩圖の樣な場合に白が直にいに頂越して來たならば如何かといふに、茲は二と立つた白に四、六、八と勢力が加はつた爲いと頂越す味が出來たといふ迄で、單に今此の形其の儘で直ぐ頂越して見た處で、黒が應接さへ誤らねばさして不利を蒙る筈もなく、白としても餘り面白い結果は期待する譯にも行くまい、唯頂越す味が出來ると始終白に其を見て居られるといふ事に注意せねばならぬ。

△扨白に頂越された後黒は如何應じるか、白は如何に運ぶかといふ事は此の場合變化極めて多樣であつて、短紙筆に竭し難く又編輯の事情も之を許さぬ都合があるから此の「頂越」の一條の詳解は之を挿入す可き適當の機會の至る迄保留しておく事と諒知されたい。（絕）

イノ頂越ニ對スル應手ハ他日ニ譲ル



（第四拾五圖）

（第四拾六圖）

（第四拾七圖）

白四ト冠シ来ラハ酷シク之ニ迫ルベシ

黒七ノ手ハ二通

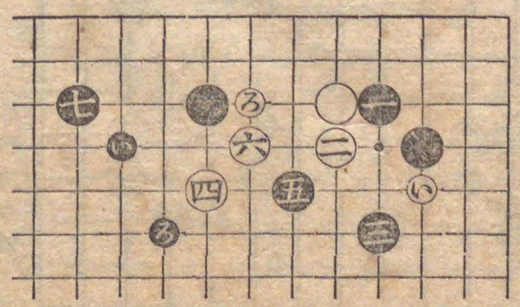
○（第四拾八圖）　本圖の様に白若四と冠に打つて來たならば黒は五と斜走に打つて酷し〳〵之に迫るがよい、其時白は六と姑息な緩慢な手を下すより外に致し方はないのである、次に黒の着點は七を場合によつては㋑と斜走に受けるのもよい、

「註」　白六の手は如何にも氣の利かぬ手である、何故なれば黒五のため一方には㋺の頂越の手が消えてしまひ、他方では七若くは㋑と拓かれて六、四の二子は左右何れの黒にも響かぬ手となつた、黒七の手を此く二間にするか或は㋑と斜走するかは專ら場合の問題で、是と同一揆の説明は布石の部に屢々出てをる即ち隣隅（左下隅）に於ける自他布石の關係上㋺と打つても敢て後始末に困らぬ場合は㋑と打つ、此の㋺は次で白に對して㋺の煽りが利いて居る、

然しながら若も左上隅にある敵の布石の關係上㋺と裾を明けて高く打つ事が不安であると思ふ時は七と二間に治つておく方が堅固である。

本來黒五は白を六と打たす趣向である、乃で白は此の緩慢を避けるために六の手を㋺に頂けて手段を廻らす事がある、其の應接は次圖を以て示す。

（第四拾八圖）



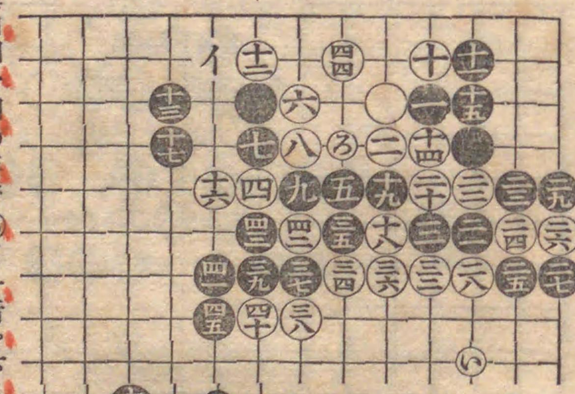
白六ハ手段ノ手

黒十三ノ受方

○（第四拾九圖）　白六と頂けて來た時黒の應接は圖に示す通りである、黒十三の手を何故（イ）と押へぬか、押へれば切に受けられる、白十六は十八と頂越す準備である、

黒廿一の手で何故二十二の點を押へぬか、押へれば少からぬ不利を招く其の次第は「次圖」を以て示す、白二十二、二十四、と出截り、二十六と行びて二十八と截る手段は頗る巧妙である、黒二十九の手で三十二へ出れば忽ち五、九、十九、の三子を提られる、黒三十五とアテて出ねば直に門して捕とされる、白四十二は黒を「ダメヅマリ」に陷れる手段である、*

（第四拾九圖）

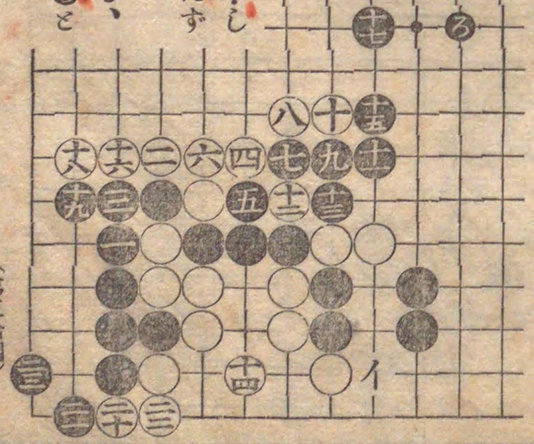


白廿は廿四ヘ打カク　廿一は廿六ヘトル　廿三は廿四をツグ

*白四十四の手で㋺と一着を下しておいてもよし、又敢て打たずともよい、

黒四十五の曲りは要點である、次で白が㋑と飛べば黒も亦㋺と飛ぶがよい。

○（第五拾圖）　前圖黒二十一の手で本圖の通り直に一と押へると圖の様な結果になつて一方十八と先手で裾を始末され次で二十、二十二と綽粘ぎせられ結局（イ）の抑へが利かぬ事になる。



（第五拾圖）

——（互　先　定　石）——

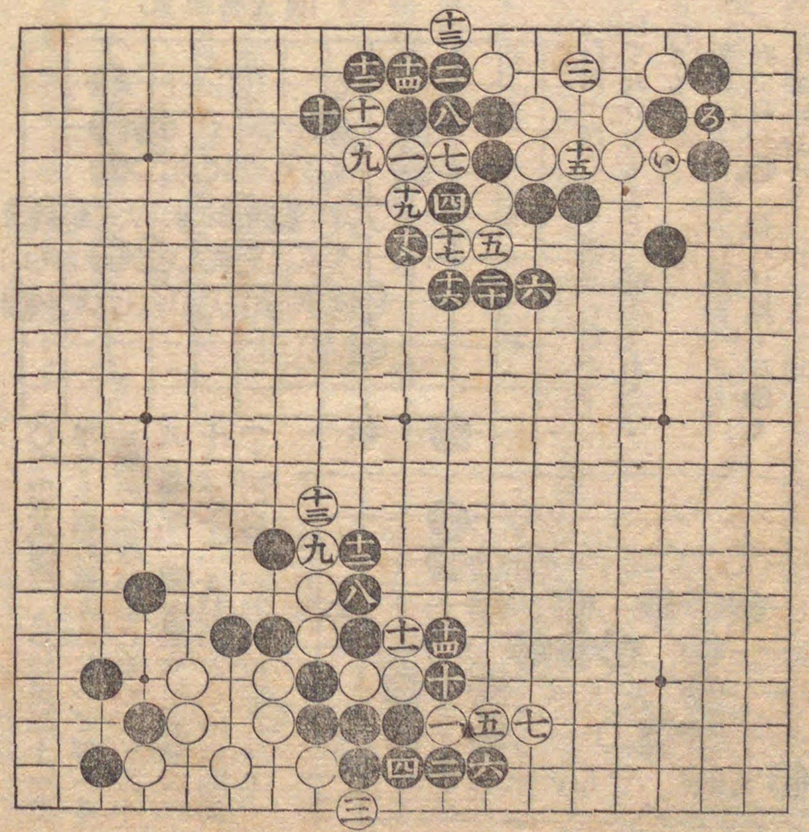
常用の絞手

○（第五拾壹圖）　本圖は第四拾九圖中の第十六の手からの變化である、白の趣向は左方の黑に急迫して始末をつけやうといふのであるから㋑、㋺、二着の交換はなくてもよい、

黑が四、とアテ六、と飛んだ手は白の形を崩して左右の黑を凌いだのである、

黑十六は常用の絞り手であつて、「白は何處迄も「ダメヅマリ」の形である、

○（第五拾貳圖）　前圖白九の手からの變化である白若十三の手を十四に打てば黑は十三と打つて三子の白を捕るのである。



（第五拾壹圖）

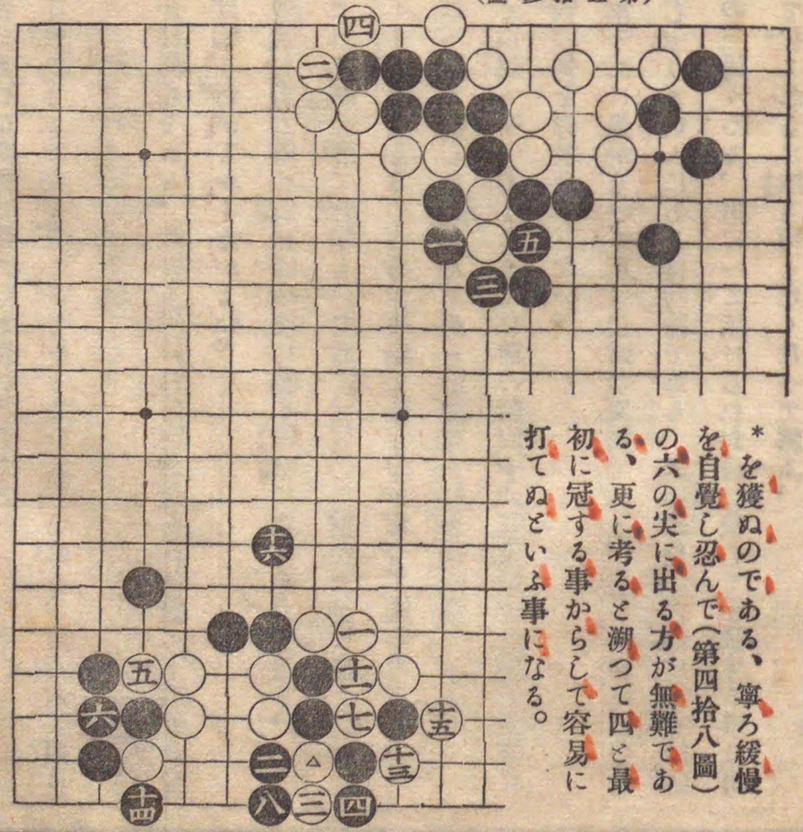
（第五拾貳圖）

要スルニ白六ハ無理手段ナリ

○（第五拾參圖）　前圖黑六の手からの變化である場合によつては圖の通り一と打ち白を盤らして打つてもよい、黑は絞られて愚形にはなるが大勢は黑のものである。

○（第五拾四圖）　本圖は第五拾壹圖の白第三の手からの變化である、此くなつて白は十子近い石を失うたが其の代償として何等得る處はない、實にツマラヌ結果である。

「註」　要するに白が（第四十九圖の）六と頂けて策を廻らしても其着點が無理であつて結局勢力を挽回するの機會*を獲ぬのである、寧ろ緩慢を自覺し忍んで（第四拾八圖）の六の尖に出る方が無難である、更に考ると溯つて四と最初に冠する事からして容易に打てぬといふ事になる。



（第五拾參圖）

（第五拾四圖）　九△印打カキ　十、三、にトル　十二△印ツケ

白四ニ対スル黒五ノ手良

黒九ノ手ハいカろカ問題ナリ

黒ノ目的ハ白ヲ塗リ込ミ大勢ヲ制スルニアリ

白二ノ手三通

○（第五拾五圖）　若白が本圖の通り四と來れば黒五と飛ぶのが良い手である、此の五の手は㋺の截を覗うて白にいと窺かせるか六と頂けさせやうといふ手である、白若六と頂ければ自然の調子で七と行び、茲にろと頂越される缺點は消滅する、

白八の時㋺と三間に拓くかろと行るかは問題である、若左上隅に白の布石があればいと三間拓して之に備へてたく、若黒の勢力があればろと行びておく方がよい。

○（第五拾六圖）　前圖白四、黒五、の次白若しろと窺けば幸便にはと棒粘に之に勢力を造る、解剖して見ると白が黒の肩へ狹くろと打ち黒にはと行びられた時（△印白）と飛んで黒にいと行びられた形である、白は極めて狹隘な處へ子數を費しながら勢力薄弱で黒の方が却つて優勢である、要するに双方の勢力に懸隔がある、即一手手抜した處であるから是亦萬止むを得ぬ譯である。

◎（本圖㋺、ろ、㋺の交換の後白がにと頂越す味のあるに就ては前の第四十六及第四十七圖の末項に附記してあると同意であるから、彼の條を參看せられたい。

○（第五拾七圖）　本圖以下は手抜の形の時に黒から一と頂けた時の應接である、黒一の目的は白を塗り込んで小サク活かして大勢を制しやうといふにあるは勿論である、其の時白の應接はいと綽込む手とろと綽出す手とはと行る手との三通りある、黒に一と頂けられた時は決して手抜する事は出來ぬ、若手抜すれば直にいから押へて提られると味も何もなくなつて終ふ、

ろノ綽出ハ白手段ノ手ナリ

四十四図参照

はト行ルハ征ノアレキ時

白がいと綽込むのは征の關係（即ち黒一を征に提り得らるゝ時に限る）といふ事は從來屢々説いた通りである、ろと綽出すのは征の關係の如何に關はらす白の趣向として打つので「三間夾返の部」第四拾四圖の樣な應接になるものと見ればよい、はと行るのは征の惡しい時即いの綽込が功を奏せぬ時であるのは是亦「一間夾」以來屢説いた通りである。

（第五拾五圖）

（第五拾六圖）

（第五拾七圖）

（八十七、互定）

（互　先　定　石）

白ニト綽込ミタル時黒ノ應手

八ニ先チナトアテルハ禁物ナリ

此處巧妙ナル策戰ノ存スル所一着怨ニスベカラス

○（第五拾八圖）征の關係が有利と見て白が此く二と綽込んで來た時黒は如何應ず可きか、若之が三間夾返しで㋑に白のある時なれば三と押へやうと、四から截らうと任意である、即ち四から截つても、白が三へ行びた時六を粘ぐ手ではなく八からアテて、「三間夾返」第四拾圖の樣な結果に運ぶのである、㋑の白が無い時は三から抑へる一法である。

「註」何故㋑の一子がある時は第四拾圖の樣に打つてもよいかといふに、彼の圖の樣に運んで振替つた結果隅の白は黒一子を打拔いて極めて堅固なものとなる、其のため㋑の一子の存在は必要がなくなる、乃ち㋑の一子の功力を大部分空に歸せしめるといふ利益があるから黒は此く打つ事もある、が然し本圖手拔の形即㋑に白のない時は尙且三と押へて隅に活かす方が利である。

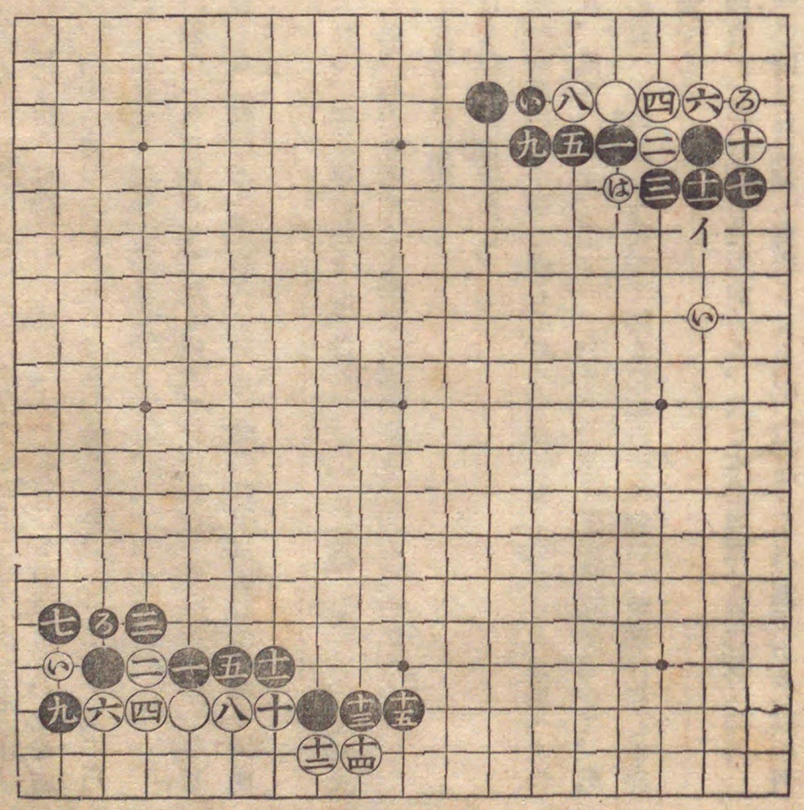
白八の行は、黒が九と引くか㋺と突當つて來るかを見て居る手である、若黒が九の手で㋺と來れば白は十とアテル手を以て單に㋺と下つて、㋩及び九の點の截味を殘して機會を待たうといふ考である、であるから白は八の手に先だつて十とアテルといふ事は禁物である、若八より先きに十とアテレば次に白が八と來た時黒は決して九とは緩めない必ず㋺と突當つて來る、此くては白は㋺と粘いでも外部の黒に缺點が少くなつて居るからツマラズ、其の時後手を取らぬ樣手拔すれば黒から㋺の點へ先手の一子提りをされ後々迄も先手利をされる不利がある。

「註」此の八、九、十、㋺、㋺、の諸點は黒白共に巧妙な策戰の存する點で一着と雖も忽にする事は出來ぬ大事の處である、又茲に注意す可きは若㋑に白のある塲合は白は斷じて十とアテル事は出來ぬ、若十にアテレば後に㋑から一間飛んで（イ）と窺く手を無くした上、此の黒の堅壁は直

に㋑の白に迫害を及ぼす事になる、之は三間夾返の部で注意はしておいたが尙繰返しておく。

○（第五拾九圖）白八の時黒は前圖の通り十一の點へ引くのが普通であるが、白から㋑とアテられ㋺と粘ぎ先手を取られるのが面白くない時に此く九と綽るのである、大體は「三間夾返」第四拾貳圖と同意味である、同第四拾參圖で說いた通り右下隅の配石の塲合によつては十三の手で十四の點へ二段綽をして白の勢力を重複せしめ先手を取るのもよい。

（第五拾八圖）



（第五拾九圖）

○（第六拾圖）　前に說いた通り、三と綽込んでも黑一を征に提る事が出來ぬ時（即對隅＝左下隅に黑の布石があつて自然に征待となつて居る時）は餘義なく圖の通り二と行びるのである、之を前圖迄の樣に綽込んで外部の黑に二ヶ所の斷點を造つておくのと、本圖の通り●、一、三、と黑の三子を棒粘にさせ無缺點のものたらしめるのと其の損得は非常な差である、

白が先づ四と頂け六と粘ぎ、黑に七の點へ一着を費させて然る後八と打つのと、此の四の手で單に八と押しておくのとは損得に大關係がある（四の手で單に八と押した時の結果は次の參考圖で說明しやう）

黑若七の手でろと粘げば白にはと綽られる、即本圖の通り七と堅く角を粘げば玆に白の勢力を喰止めて一隅に閉鎖し、九の先手を利かし此の勢力を利用していに大塲の利を占める事が出來る、

△問　白六の手を以てろの點に割出したならば如何

○答　後日一手の切種を無くする樣なもので無益である。

○（參考圖）　前圖四の手を打たずに單に本圖の樣に四と押して打つた時は忽ち黑から五と抑へられ白六の時黑七と二段綽をし、以下白八、黑九、白十、黑十一、白十二、黑十三の結果となつて、外部の黑は金城鐵壁となり、其の上いの點への截提りも殘つて居るため白の不利は、前圖に比して非常の差があるのは一見して明瞭な事實である。

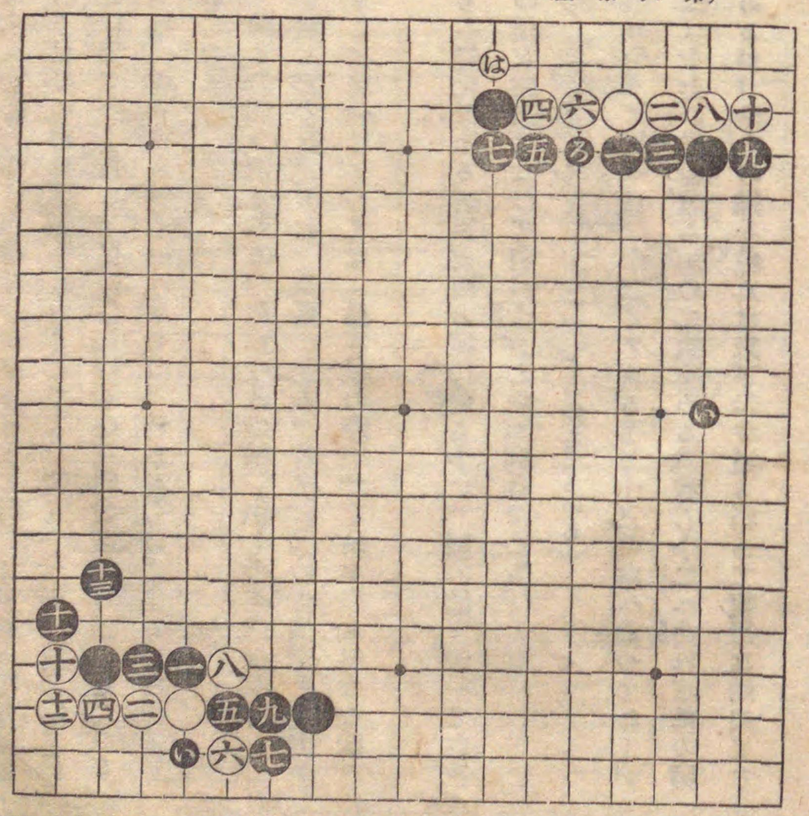
△問　「一間夾第六十四圖」（第七十四頁）に此に類した形がある、其と本參考圖との比較は如何

○答　一間夾（第六十四圖以下兩三圖）の時は白は側へ突張るとも、隅へ押すとも任意である、其の何れにしても、已に形が一間夾であつて結果は如何しても外部の黑の堅固になる處であるが、此の二間夾の塲合であると（第六十圖）の樣に四と側へ突張つておけば、此の（參考圖）の樣になるよりは外部の黑の堅固さが餘程違ふ、

乃で先づ此の形（手拔）の時は大抵な塲合は必ず（第六十圖）の樣に四と突張るものと心得ておけばよい。

◎但し此の參考圖の樣な形になると黑が後手ではあるが白の不利は言ふ迄もない。

（第六拾圖）



（參考圖）

（互先定石）

○（第六拾壹圖）　本圖は征が惡いため六へ綽込む事も出來す、サリトテ九と行びて前圖の樣な結果になるのも面白くないといふ時か、若くは征の結果は惡くないとしても、第五十八圖の樣な結果になるのを嫌ふ時、白は本圖の通り二と綽出すのである、二間夾返若くは三間夾返の時は手はないが本圖の樣に下側方面に白のない時は、黑は必十五と截らねばならぬ、若し截らぬとすると白に㋺と押され彼に非常の勢力を加へさせる事になる、

白若十八の手を打たぬ時は黑から忽ち㋩と急所を刺される、白は十八の後、機を見て㋺と押すがよい、次で黑若し㋩に綽ねれば白はにと飛んで十五、十七、の黑に迫る、若又白㋺の時黑十七の方から動けば白は㋩の點に行びておく、すると塲合によつては（黑手拔の際）㋩と粘ぐ手も出來る味がある。

○（第六拾貳圖）　前圖黑十一の手からの變化である若黑前圖の樣に曲らずに、圖の通り十一と白を拔いた時白が十二とアテれば、本圖の樣な結果となつて白は太だしい不利益である。

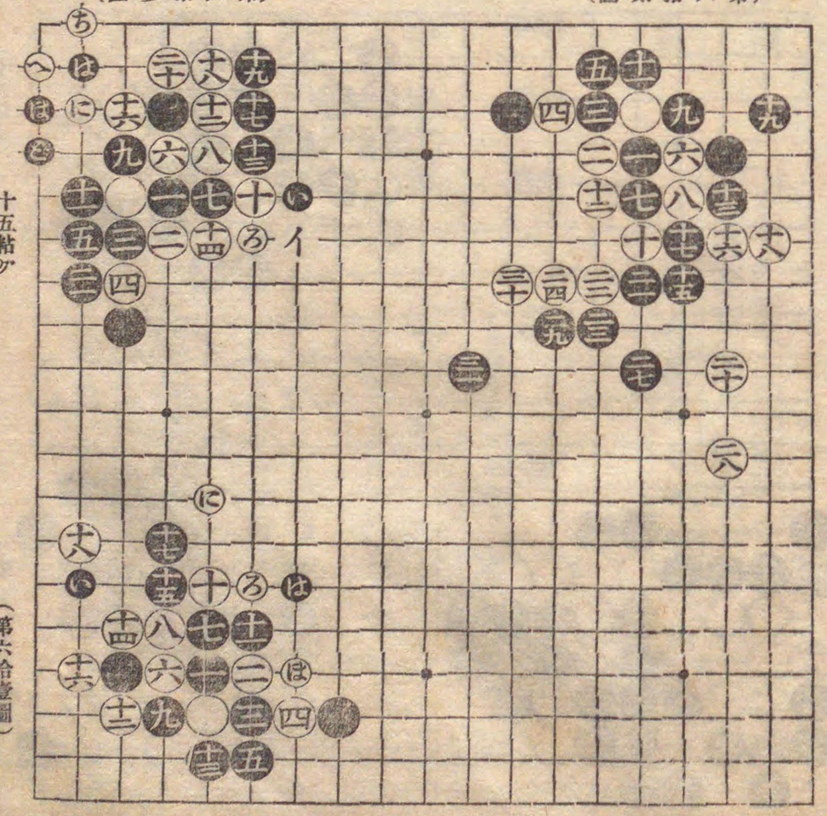
（本圖の中で黑の注意す可きは十三、十五、十九、及二十一以下の數着である）

白若し本圖の樣な不利益に陷る事を避けやうと思へは、十二とアテる手で十三の處へ曲つておくがよい、其の時黑は十二の點に曲るか或は十七の點を截るかの二途である、若し十二へ曲れば前の第四拾四圖の結果と同一に歸するのであるが、十七の點を截れは以下示す通り極めて複雜な結果となるのである。

○（第六拾參圖）　白が二子の黑をアテずに圖の通り十二と曲つた時黑が十三と截つた時は以下數字の示す通り運んで、最後に二十一の手で圖の通り打てば隅に黑㋩、白㋺、以下符號の示す通りの手順を運ぶ切の味が殘る、白若此の切を嫌はゝ一手手入をせなければならぬ、其時黑に㋩（イ）と押されて中原の白が攻擊される結果は非常の不利を釀さねばならぬ、

乃で黑は二十一の手で㋩とアテ白に㋺と粘がせて更に（イ）と押すか、或は二十一と打つかは任意であるが、若㋩と押し（イ）と押す結果は次の如き結果を招く

（第六拾參圖）



（第六拾貳圖）

白十四黑二子ヲトル　廿五一へ一子トリ返す　廿六は七の點ツグ

十五粘ゲ

（第六拾壹圖）

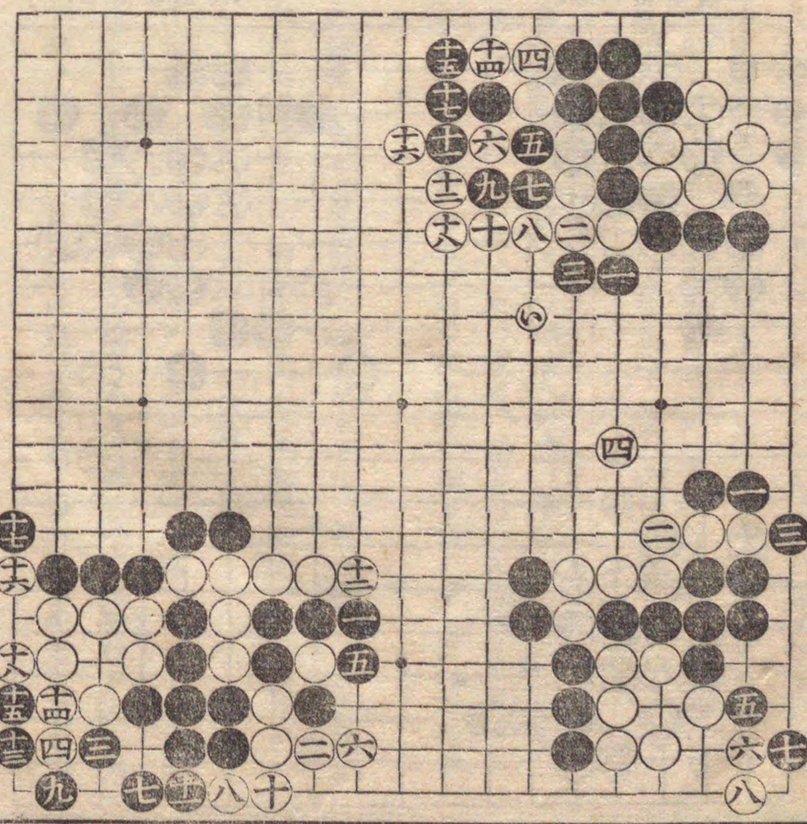
（互先定石）

○（第六拾四圖）本圖の通り黑が一、三と押し白に四と絶ちキラレた時、黑としては五と截らずに居られぬ感じがするが、此の截は危險である、即本圖十七となつて黑一、三の押が愚に歸する譯である、白十四の時黑若し十五の手で十八の點を截れば白は㋑と飛ぶ手である、

○（第六拾五圖）本圖の樣に運べは結局黑刼負である、

○（第六拾六圖）要するに第六拾四圖の黑五の截が危險である若此の危險を避やうと思へば本圖の通り一と夾み三と盤るにある其の代り隅の刼味は無くなるのである。（二間夾　完結）

（第六拾四圖）



（第六拾五圖）

（第六拾六圖）

大正五年貳月拾貳日印刷
大正五年貳月拾五日發行

著作權所有

互先定石一間夾　二間夾（郵付）
正價金壹圓八拾錢
郵送料金八錢

編輯兼發行者　廣月淩　東京市神田區美土代町四丁目五番地
印刷者　高桑基次　東京市京橋區西紺屋町二十七番地
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町二十七番地
發行所　中央圍棋會　東京市神田區美土代町四丁目五番地
（振替貯金口座東京一〇五八九）

圍棋神髓

七冊

¥1,000—

28112